

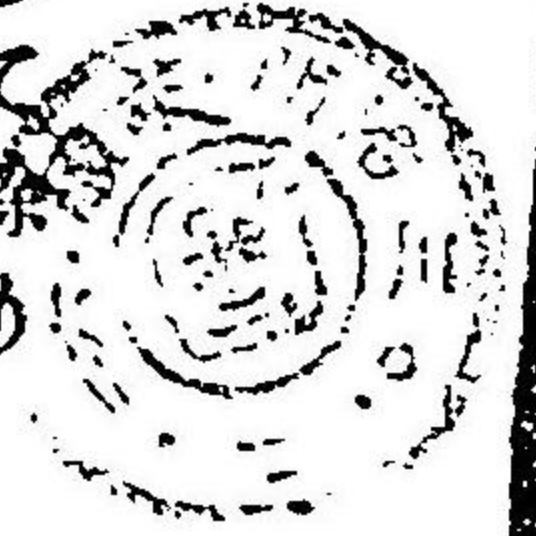
62
493

三宅雪嶺
陸羯南
福本日南
合本直文
落合直文
小中西村義象

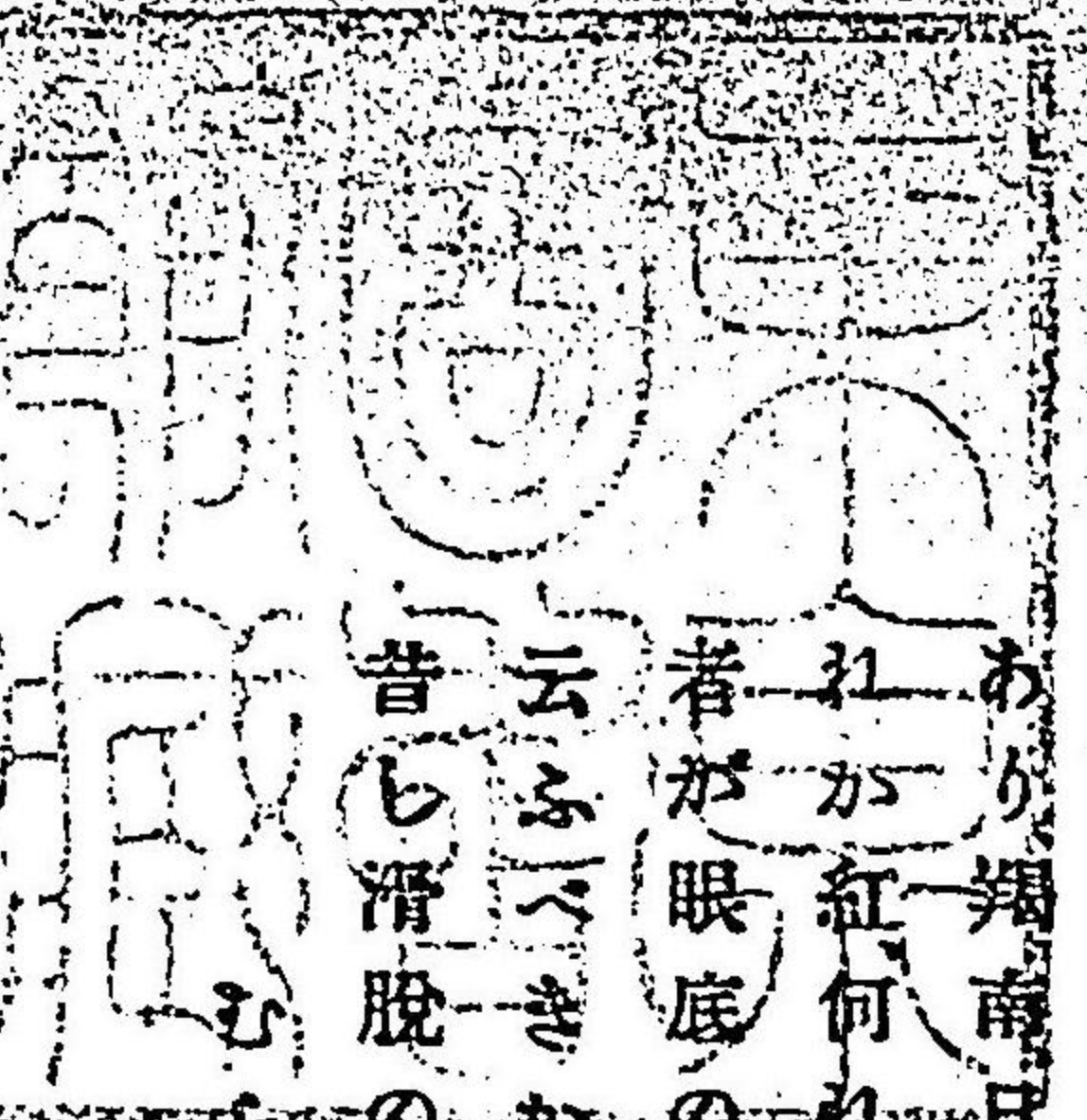
研學二
叢書編
千紫萬紅

研學會編輯

例言



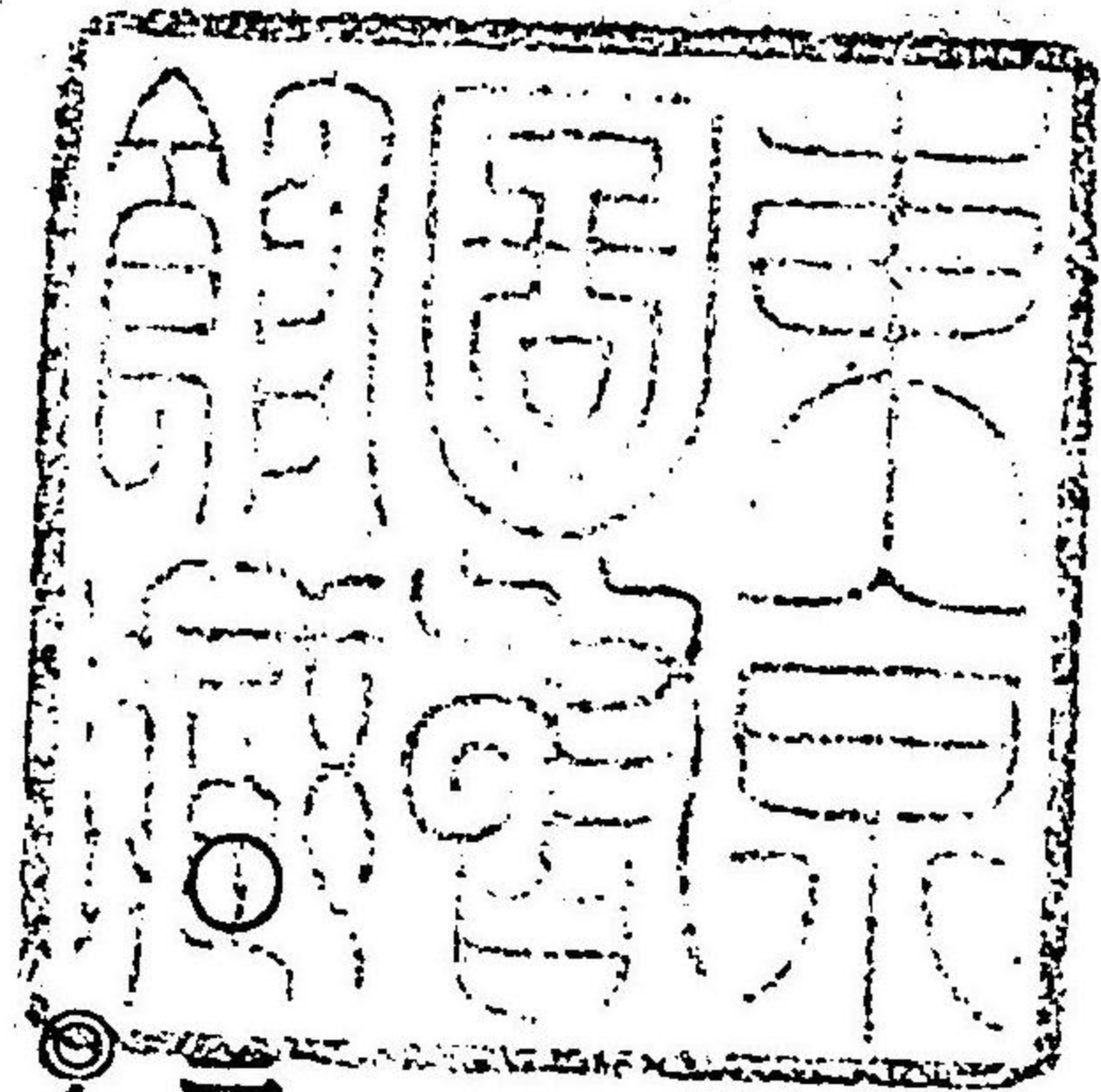
題して千紫万紅といふ、題目既に其所集の一ならざるを道破して餘り
あり、南日南湖村、天眼、雪嶺、及牛郎、小中村、落合等諸文豪の筆と落想、何
れが紅、何れが紫、咲き亂れたる万葉の花叢裡、何れをそれと分たんは讀
者が眼底の光明に任せてん、文の妙と整と熟と至とは、今更ら取出で、
云ふべきかは、
昔し滑股の奇人蜀山人は



さきの外よにくきは肉入の
あけをうばへる鼠色かな
と鼠を責めぬ、不知此編の文、紫、紅を奪ふか、紅、紫を奪ふか、亂れ咲く花の
數々、すみれは万葉の野にもすみれなり、櫻は木の間の奥にかくれても
人誰れかわかたざらんや、讀者は、編者の陋をな責め玉ひぞ、序に代ふ、

編者識

叢書 千紫萬紅



元日
◎今の新年式

元旦は面白き日なり

元日や昨日の鬼が禮にくる

長松か親の名でくる御慶哉

門松、鏡餅は由來久し

陸三福桂中落鈴

本宅 西合木

羯雪日湖牛直天

南嶺南邨郎文眼

述

萬代を松にぞ君を祝ひつる

二

千とせの陰にすまんと思へば

あふみのや鏡の山をたてたれば

かねてぞ見ゆる君か千とせは

然るも三大節の一として 天皇陛下が群臣百官の賀を受けさせ玉ふは、何に起因するか、憶ふに、今の新年式は奈良朝に基き、奈良朝参賀の禮は、源を大古の慣例に發するも、特に隋唐の制に倣ふ所ありしなり、隋唐は秦漢に依る、秦始皇天下を一統して、始めて十月に朝するの禮あり、漢高祖秦の苛儀を去て、法の簡易を致す、群臣酒を飲み功を争ひ、酔て或は妄呼し、劍を拔て柱を擣つ、叔孫通帝に説て曰く、儒者は與に進取し難く、與に守成すべし、臣願くは魯の諸生を徴して、臣の弟子と共に朝儀を起さんと、帝其の難からんことを疑ふ、叔孫曰く禮は時世人情に因て之が節文を爲す者なり、臣古禮と秦の儀とを采て之を雜就せんと、乃ち長樂宮成るに及んで、諸侯群臣をして十月元旦朝賀せしむ、儀莊重にして嚴格、御史法を執て、

儀の如くせざる者を引去る、諸侯王より以下振恐して肅敬せざる莫く、朝を竟て置酒するも、尙ほ敢て譴諱して禮を失ふあらず、帝曰く吾廼ち今日にして皇帝たるの貴きを知ると。今の新年式は此の分派を酌めるなり。

◎吾人の元旦と始皇、高祖の正

然れども吾人の元旦は一月一日なり、始皇、高祖共に十月を以て正と爲す、差違何爲ぞ生ずる。憶ふに、始皇以前多く十一月を正とし、高祖以後亦た或は十一月を正とし、幾世經過して漸く一月を正とすること、爲れるなり、一陽來復は冬至より起首することを得、又た春暖發生の時より認識することを得、十一月は天文に便にして、一月は氣候に便之氣候の便は衆人の便とするところ、是れ一月の正となれる所以とせんか。然るも謂ふ所の一月は陰曆の一月、吾人の一月と稱するは陽曆に由る者、本日は一月一日なるも、陰曆にては十一月二十五日、隨て一日といふも月は朔ならず、鳳曆春回といふも、絶へて春らしき景色を見ざるなり。蓋し月の盈虚は時を記るすに好くして、盈虚十二回殆んど四季の序を終ふ、則ち十二ヶ月を一年とすべし

三

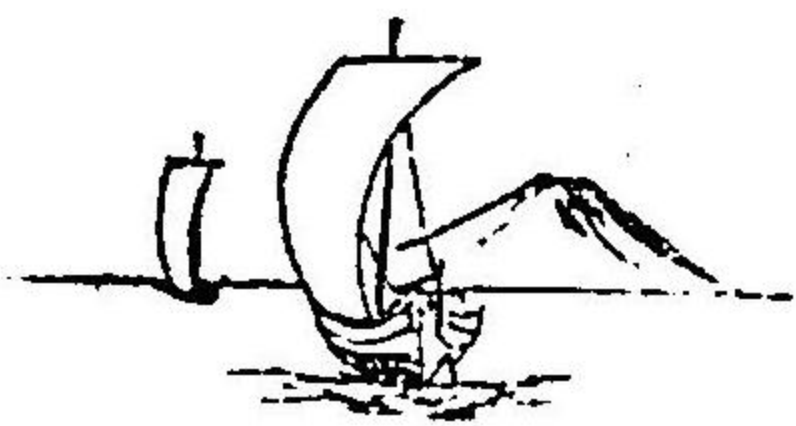
と雖ども、而も十二ヶ月は日の一年を成すに充分ならずして閏月を容るゝの要あり、希臘は初め十二ヶ月を一年とせしも、ソロン[◎]出で、大の月三十日と小の月二十九日を互ひ置きにして、時に閏月を加ふること爲せりと言ひ傳ふ、即ち普通に行はる所の陰曆なり。然れども月の盈虚遂に日の一年と合同するに由なし、埃及[◎]に月に拘ることを罷め、三十日を一月とし十二ヶ月にして三百六十日、年末に五日を加へて三百六十五日とせり、羅馬は最初陰曆を用ゐしも、誤謬堆積重ね來りて、祭禮節に協ひ難し、民人の惑ふ所少からず、夫の該撤新たに施政の大權を握るに至て、深く算學者と謀り、斷然陰曆を廢して陽曆を用ゐ、一年を三百六十五日とし、四年毎に一日を加ふること定めぬ、而も是れ一年を以て三百六十五日に六時餘るとするものにして、眞實五時四十八分五十秒餘にては十一分十秒違ふ所あり、後ち法皇グレゴ[◎]十三世巧みに改正するところありしが、舊教の徒皆其の改正に従ひ、新教の徒力めて之に反抗し、英國の如きは千七百五十二年即ち我が徳川九代將軍の時辛ふじて改正の旨を布告せり、我國は明治五年十一月より用ゐる始めたり。然して吾人

四

が一月と唱ふるは羅馬のイヤヌス神を崇める日にして、之を歲始とするは羅馬の遺風に外ならず。』

今朝見れば空もかすみて久方の

天のはらよりはるは來にけり



五

◎元日の來歴と始皇、該撒

元日の來歴に就ては、我國に固有なるあり、而も最も著大なる事蹟は秦始皇と羅馬の該撒なるべし。始皇は鷲鳥の膺にして豺の聲、思少くして心は豺狼、約に居て人の下に出て易く、志を得れば亦人を輕食すといふ。該撒は姿貌才力共に秀で、立て辯を振へば万千傾聽し且つ慈愛にして民を思ひ、大量にして敵を容れ、財を分つこと土芥の如しといふ、傳ふる所、恐らくは貶に過き褒に過くるもあらん。其似たるものを擧ぐれば、共に紛亂の間に崛起して群雄を制馭し、共に長策を振つて宇内を御し、敲扑を執て天下を鞭笞し、威四海に奮うて、百蠻の君命を下吏に委ぬ、一は地方を弱めんとし、一は都人士を歡ばんとするの差あるも首府を華麗にして敵愾の氣を撓めんと欲せるに至つては同じ、始皇の書を焚き儒を抗にせるは、該撒の文物を獎勵せると相反するも、而も該撒は偶然にもアレキサンドリアの大書庫を焼失せり、若し夫れ忽ちにして盛、忽ちにして衰、以六合爲家、鄴函爲居、一夫作難而七廟墮、身死人手、爲天下笑者何也とあるは寧ろ

"But yesterday, the word of Caesar might

Have stood against the world: now lies he there,

And none so Poor to do him reverence."

に類せざらんや。高祖が項羽の罪を鳴らすに、其秦の宮室を焼き、始皇帝の家を堀き、秦の降王子嬰を殺し、詐つて秦の子弟を新宮に抗すること二十万なるを以てせるは、ランヌマヤ井ユスの復讐軍に類するなからんや。項羽か天の我を亡すなりと言へるは、マルティヌスか

"O Julius Caesar, thou art mighty yet:

Thy spirit walks abroad and turns our swords

In our own proper entrails."

と歎せるに類するなからんや。始皇該撒は後人の爲に大壓制家と呼べる、渠は實に大壓制家なりき、而して大壓制家たるの罰を受けたりき、然れども渠は恵を遺すこと少からず、渠の時代には渠の出づべき必要ありし者にして漢の諸帝は始皇の業を繼

八
 續し、羅馬の諸帝は該撒の業を繼續せるなり。皇帝の名は始皇に出でエムペロル、カイゼル等の名は該撒に出づ、後世の君主たる者、それ誰か始皇の若くなるを欲せざらんや、大那翁や小那翁均しく則を該撒に取れり。小那翁の該撒傳を著せるは憐れむべきなり。嗚呼八荒を併呑するを得ば、始皇の如くなるも或は可なり、該撒の如くなるも或は可なり、若し勢然ること能はずとせば、謹慎を之れ要す。

中興霸略說豐公、
 公亦微時是牧童、
 煙雨滿村春曉豔、
 可無牛背出英雄、



○寶船

温藉なる哉古の人、至理名言を童謡俚諺、飲食坐臥の間に偶し、老若男女貴賤の人をして優悠存養皆其中に納らし、知らず識らず帝則に遵ひ、思はず替へずして王道を行かしむ、是を以て愚者は之を行ひて罪なく言ひて尤なく、賢者は之に居て名を成し、之を履みて動を建つ、歳序會々一月に入り、領曆新に春王を報ず、乃ち茲に硯を洗ひ、筆を改めて南軒の下、案前に向へば、一葉「寶船の圖」の案上に登れるあり、眼、圖線を走り、心、歌中に遊べば、油然たる思想、沛乎たる感奮、滿身を鼓動して來るあり、余覺えず案を拍ちて大呼して曰く是ある哉古人の偶言や、何者の俊髦か此圖歌を遺して明治二十五年以後の日本を助けんと欲する乎と、思ふに「此寶船の圖」は實に千古の識圖なり、迷語なり、豫言書なり、未來記なり、船其船を視れば危然たる巨舟なり、是れ尋常河上灣内を行走する小舸短艇の類ならず、又之に乗ずる所の人物を看よ、曰く夷、曰く大黒、曰く辨天、曰く壽老人、曰く毘沙門、曰く布袋、曰く福祿壽、多くは是れ我帝國の人ならざるに似たり、又其

船中に滿載せる所の物を觀よ、戟然たる珊瑚、煥乎たる黄金、亦是れ我帝國の物産に非ざるに似たり、而して更に圖上の歌を讀下せば「なかきよの、ととのぬふりの、みなめさめ、なみのりふねのをとのよきかな」といふ即ち復たび之を讀上せば亦同じく、なかきよなり、讀上讀下、往復して其間一句も違はず、夫れ其巨舟に異人珍品を載せ、快然たる詞章、誦讀往復、其間た嘗て凝滯を見ず而して之を歳首一睡枕上の伴侶に供す、果して是れ何の寓意ぞや。

余此神秘を斷じて以爲へらく是れ一大船を太平洋上に泛べ、南のかた濠州と往復不絶の航海業を開創して以て空前の國利を興す可きを教ゆるものなりと、何を以てか之をいふ、曰く説あり、彼の夷や頭上に烏帽ありて、其名亦三郎といひ、而して七福人の上に在り、是れ正しく帝國の人なり、次は其名を大黒といひて頭上に纏ふに布巾を以てせり、巾を頭上に纏ふは印度の俗なり、面貌大黒色なるは印度の民なり、則ち是れ印度人を代表せる所の者なり。次は則ち辨天歟、其色白皙、其衣纒絡、白皙なるものは歐人の膚色なり、纒絡翩々たるは歐婦の衣裝なり則ち是れ歐羅巴の貴

婦人に應ぜり。次に來るものを壽老人となす、是に至りて余れ古人の聖明睿智に驚くなり、壽老人なるものは南極星に非ずや、南極星下は濠州に非ずや、是れ實に濠州の代表者に非ざるなし。毘沙門は天上の武臣と聞く、開闢以來先天的の尙武國は日本を置きて何くに在らん、然れば知る可し毘沙門は我帝國の武人に應ぜり、夫れ夷三郎ありて此船を司配し、毘沙門ありて此の船を護衛す、是れ我れ自から此大船を有し、隨て武人の捍衛を待つ象、兵艦にして商船、商船にして兵艦たるべきものを用ゆ可しと示せるなり、今の世界に兵艦の商船、商船の兵艦たるものこれある歟、曰くあり、之を巡邏船となす、英佛の争て採用する所、富國強兵の基する所、吾輩海國核論を草す、轍底之を主張せんと欲するのみ。次の布袋は子分が唐見なれば親分は尙更ら支那人なるべく。次に今の攻伐世界に争はず戦はず福祿天壽の三者を保つは、亞米利加合衆國人より外あらず、扱は船上滿載の黄金と珊瑚は如何ならん知らずや珊瑚は南洋一帯の特産、金礦は濠州の専らにする所なり。翻て更に詞章を玩味せよ、漫々たる長夜の眠を破り船頭に銀山を捲くの聲を聞け、國利民福を載せ

得て来る、壯絶愉快言ふ可からずといふ、而して其の輪誦凝滞せざるは正に是れ上下往復、夫の濠航の途を絶たず、我巡邏船を泛ばせて、印度、歐、濠、支那、米利堅の十方世界の華客を寄せ、濠の黄金、珊瑚を博し、之を帝國に送り來れ、而して後ち壯絶愉快言ふ可からずといふに在り。

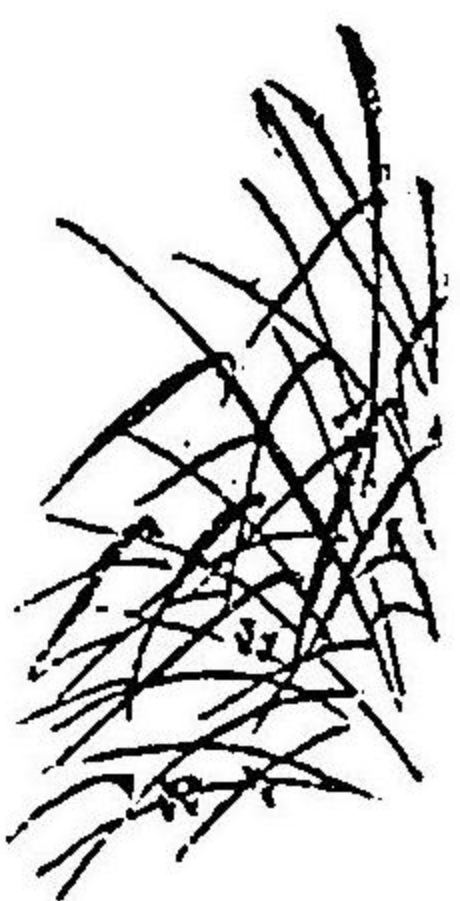
一年の計は一月に在り、一月の計は一日に在り、其一年の一月の首めに海國の恢廓を夢寐の間に思はしめ、他年一日國運進み人文盛ならん時、之を實行して百年の長計を策せしめんと欲する、古人の用意、深いかな又遠い哉、而して寒來暑往、秋收冬藏、二千五百五十二年、明治二十五年の帝國は方に此壯圖長計を實行す可きの時とはなれり、巡邏商航は寶船なり、富强兼博の寶船なり、寶船や、吾人の血族は此寶船を作ることな躊躇しぞ。

江流何渺々

懷古獨依々

漁父非賢者

蘆中但有磯



○年賀の衰微

◎彩鞠跳梁不離地

太平妝點是兒童、男女遊戲到處同、彩鞠跳梁不離地、紙鳶跋扈欲凌空 五山、是れ今に至りて異なるなし。

九街雞唱瑞氣新、簪笏朝正簇紫宸 山陽、車馬喧闐曉日明、万家應已賀新正 星巖、斯の若きもの今尙ほ之なきに非ず

然れども曆太陽に律してより、民人の新年を重んぜざるやう爲り來れるは争ふべからざる事なり、舊事風吹去、出門天地春、若しくは芳草和烟暖更青、問門要路一時生、など最早今日に通用すべくもあらず、隨て人間歳を迎へて改まらんとすること亦頗る難し、實は當代の新年當に一陽來復の象なきのみならず、四序初選曆とだにいふことを得ず、苦寒の嘆は久しからずして發せらるべければなり。

元日や何にたどへむ朝朝、これ或は感ずるを得ん、而も元日や晴て雀のものがたり、これ幾んど感ずるに難く况んや、梅が香の筋に立よる初日哉、に至つては遂に其意

に同すべからず、陽曆が新年の歳序を定めざるや、三種の新年を生出することになり、一に名目的新年即ち陽曆の新年、二に姑息的新年即ち一月後の新年、三に守舊的新年即ち陰曆の新年なり、衆庶焉んぞ新年に迷はざるを得んや、宜べなり年賀の次等に略式に流れ來ることや。

西人クリスマスを重ねて新年を輕んず、クリスマスは兎に角基督誕生の日と稱せらるゝ者、其教を奉ずる國に在つて欣喜悅樂するは當に然るべき所、たゞ一月一日といふに至りては、羅馬ヤーマス祭の遺習に従て聊か式を擧ぐるの外又何等の義あるべからず、我國已に陽曆を用ひて陰曆の趣味を棄却する上は、勢ひ新年に略ならざるを得ず、それかあらぬか年賀は漸次に略せらるゝやう覺ゆ、郷下の事は姑く措て先づ都會に就て觀んに、何年の頃よりしてか年賀除けに近縣に旅行し旅行先より書狀を發すること流行せしが、漸くにして旅行は名のみとなり、新聞に明白に旅行と廣告し而して所謂室内旅行をきめこむことと爲り、此頃は一層簡單になりて公然自宅より端書を飛ばして憚らざること、爲りぬ、今年の如き別して略式の様なり。

◎新年を破壊する者は議會なり

特に近來新年を破壊するに與りて力ある者は議會なり、世の風俗は強ち政治に動かさるるものにあらざれども、政府と議會との對立は、苟も公共心あるものゝ、注意を懈らざる所、而して其議會の開會は歳暮より年始に跨がるを例とするが、之れ陽曆の冬期三月を利用する者にして、初より歳と共に新ならんなど云ふことを毫末も念頭に置かざるなり、役所には御用納御用初あれど、議會には嘗て左様なる者なし、職に議員に在る者は年始なしといひて可、而して政府の高位に在るものは我々として對議會策を講せざる可らずとせば、政府も亦年始なしと謂ひて可ならんか。今や戦後經營の歳計豫算案已に出で、而して問責の上奏案亦已に出で、(二十九年)決戦の期蓋し旬日を出でざらんとす、朝野共に運動に間なく、或は御芽出度といひて直ちに相談に取掛かるもあるべく、或は轉地と稱して密計を運らすもあるべし、(中略)新年は正しく政治家苦心の時、元日も何もあつた話にあらず、元日も雜糞の腹にへりにけり。

◎佳節は佳節らしくあらまほし

佳節は佳節らしく有らまほしき事なれども、新年の如きは梅和藹雪凋清艶、花引東風ニ入ニ舊枝ニをいひ得べくんば、新を喜ぶべく、たゞ苦寒の前強て或日を以て是れ新年なりとし而して椒酒を酌む、人尙ほ能く六に酔ふべきか。三大節の一なる天長節、われ其の賀すべきを知る、紀元節われその祝すべきを知る、元日に至つては頗る解するに苦むなり、年賀の衰微する實に己むを得ざるものあるか。然れども人固より歡聲を發するの時なかるべからず、一月二日に愉快を得ずんば、更に他の日に之を得べし、維新以來事の曖昧に歸せる者少からず、而して新年の處分は實に其一なりとす。

香宅迎晴庭月晴
陸池逐日水煙深



○日本少年新樂府

仁里隱士

射猛虎

放疆弩。射猛虎。有兒有兒來求乳。捕而投之山谷萬仞許。眼光如電嘯且拊。一瞬起騰何雄武。斷巖寸寸裂不補。一陣疾風捲腹肚。此時百獸匿不覩。滿山翠葉墜如雨。

垂天翼

垂天翼兮北海鵬。搏扶搖兮可起騰。九萬里外六月天。雲是作幕兮月作燈。醉乾坤兮夢世界。浪千疊兮峰萬層。夜已深兮四無聲。太白星來兮作朋。

爆裂彈

爆裂彈。轟然一發裂肺肝。山谷鳴動天欲破。笑看大臣足竟單。車軸摧。衣冠丹。家人出門扶身入。淋漓流血如急湍。吶喊如雷一時起。百萬都人喜色闌。

花可醉

千朵春花可醉。萬里秋月可睡。世上仔細看來。悉是造化遺賜。波浪激鯨鯢蒼。風塵暗山峰翠。一劍短袍猶橫。萬古英雄心事。殷勤來勸予飲。東家女年十二。

新乾坤

十八

瀉酒新乾坤。擲杯小日月。胸中不平多。銳氣恒鬱勃。投筆更謁豹虎廟。捧刀又入龍蛇窟。五萬尺外芙蓉峰。頂上好欲埋俠骨。

四壁立

四壁立因家貧。當爐賣因情真。破琴如今難再弄。寒雨蕭條臨叩春。臨叩春過賣車騎。酒旗風外無一縷。忽有千金買辭賦。當年天子重詩人。



會豪賢

江南會豪賢。花下張盛醺。嫩草色染袍。芳樹香掠面。東山日晚月未登。花睡烏宿春不見。世上空名夢半時。英雄處世如流電。憶昔筮案雪初初。辛苦日日事精鍊。投刺願謁天下賢。獻策期登君王殿。小臣義豈輕。微官心自戀。壯語驚世俗。小心守郡縣。學劍窮神通。脩禪悟機變。始識英雄心。明白如素絹。嗚呼功名誤生平。腐蝕人心在

筆硯。拔劍疾視龍蛇避。焚盡古書十萬卷。

勸君行

勸君莫作宰官身。勸君莫作權家賓。唯作海內第一人。英名遠耀西土濱。

夢一場

酒帘翻翻到處足。江南花發春水綠。酒筵遲日也苦短。清夜美人來捧燭。一生觀來夢一場。休說一榮與一辱。一時別闢一乾坤。功名一任蕩一束。

邦國傾

武夫堅守千仞城。雲鎖萬山聽吼鯨。拂盡妖氛如拂塵。硝烟之中錦旗整。奮圖縱橫觸處斬。寒烟落日敵頻驚。戰罷沙場藉手臥。腰間寶劍聲有聲。將軍凱旋萬人從。博來長安遊俠名。纏身錦綉燦生雲。花下舉杯賞夜清。花睡烏宿春漏寂。嬋妍侍寢夜淺更。妖言惑聰從古有。空城月墜牝鷄鳴。人道春夢結未醒。早已有象邦國傾。邦國傾不在

十九

賊不在兵。只在美人一夜情。

鎮金鼎

鎮金鼎。守金甌。東海表。八十州。經世策畧共誰謀。廟堂妖狐白日走。海內奸雄皆我仇。何日斬作織織膾。酌酒淋漓新鬪醜。

五十娶妻

人生五十可娶妻。人生七十可生兒。大志已就大名舉。白頭抱子永爲遲。其奈妻兒成羈束。半生雄圖伸無期。余尙未娶。君將娶。書之贈君君莫疑。

頑夫秉政

可悲夫。士氣潛。無腸公。歷深壑。頑夫秉政爭錙銖。奸雄弄筆競妖豔。君不見眼慧面秀美少年。萬言草文迷光燄。月明霜白孤客夕。燈下無端磨古劍。

登龍門

我愛春水之浩蕩兮。春水如酒榼之激。我愛秋月之孤瘦兮。秋月似刀劍之稜。男子從來尙氣力。登龍之門龍可登。萬世偉業醉餘畫。區區何者論愛憎。君不見北溟之濱六

月。鵬。九萬里程一瞬騰。

鯤之大

鯤之大。幾千里。鵬之背。幾千里。休道南華說虛無。英雄胸臆亦如此。君見遠征格龍武。扁舟蹴起萬層水。

夢爲蝶

言爲鵬。夢爲蝶。羽々然。如墜葉。自喻適意意忘周。神變神通能得協。金千篋。酒百甕。少年粗豪何足痛。劍中應伏鯤鵬志。樽前且結蝴蝶夢。

桂可食

桂可食。故伐之。漆可用。故割之。嗚呼二豎何煩有爲身。負月負花秋又春。君不見洛陽城裏少年子。早作北邙山上人。

井蛙語海



水茫茫。山漠漠。英雄胸度如此博。月皎皎。花冥冥。英雄心事如此清。水是可度山可陟。月是可眠花可息。宇宙風光如此寬。井蛙語海傍人惑。

朝三暮四

朝是三。暮是四。衆狙怒之掉毛臂。朝是四。暮是三。衆狙喜之死亦甘。朝除一法。民有欣色莞莞。暮發一令。民有愁淚漣漣。今日朝廷法非疎。少年觀世須白眼。斥鴳笑。

花前醉。月下眠。大洋船可駛。曠原轡可聯。起兮字內千金子。往矣海外萬里天。近濤明。遠濤暗。男子誅鯨死無憾。大砲匄然船解纜。浪捲聲。海渺茫。萬里遷移天如水。千古盛衰月似霜。大魚跳入巨艦中。拔刀欲刺尾猶掉。咄哉南溟六月天。大鵬將起斥鴳笑。

蠻觸戰

蠻觸戰。鵝蚌爭。紛紛擾擾何日平。儒生章句論優劣。學士文字圖縱橫。精神伸。意氣合。年少匡時期高踏。君不見李白大笑心自閑。世事悠悠不須答。

龍逢誅

龍逢誅。比干戮。眼見舊國愁成斛。惡來死。桀紂亡。三千後宮亦無常。善何利。惡何咎。人間到處風波有。丈夫處世何有礙。君不見月照花前萬斛酒。

鮒魚來

鮒魚來。來何爲。車轍水淺中道悲。鮒魚去。去何事。他日去索枯魚肆。鮒兮鮒兮汝何愚。三千世界總是鯤鵬逍遙地。鳴鳩叫。花影重。烟霧霽。草茸茸。昨夜江上春風起。怒濤捲。鮒魚化龍。

血作碧

星已隕。日已墜。英雄叱馬牽霜鬢。旌旗皆盡龍虎章。干戈悉鑄金甌字。君已降。國已亡。慘風毒雨斷人腸。萬里江山夢一場。舌已爛。唾已積。英雄末路悲折戟。君不見三年前屠馬褻尸於其皮。正是空城風雨之夕。于今此際寂無春。蕪蕪墳畔血作碧。



○三侯五伯

謹みて惟みるに、五侯七貴は漢の治世の權家、六雄八將は和の戰國の豪族、凡そ名利場中必ず希世の優人出て、以て各々其の能を盡くす、是を以て史家稱官乃ち筆を弄して時代の特色を斜することを得、獨り吾が明治の昭代豈に其の優人なからんや、聞く今や國譽外に加はりて民福内に進むと、聖朝の慶事何物か之れに過さんや、吾輩は此の新年を迎ふると共に先づ賀意を表せんが爲め、現時政界の第一層に於ける名優を頌せんと欲し、撰で三侯五伯を得。

三侯とは誰れの謂か、伊藤侯、山縣侯及び西郷侯の三優を言ふ、而して五伯なるものは黒田、松方、井上、大隈、樺山の五伯を指す、吾輩が特に此三侯五伯を撰び得たるは自ら其説ありと雖ども、茲に一々説明するの甚だ時宜に適せざるを見る、但た此の入優人の吾が現時の政界に各々特能を有するを示さば、世人容易に之を解し且つ取りて以て今後の變遷を測るの一助と爲すを得べし、吾輩聊か左に略叙せん。人の賢愚優劣は濫りに評すべからず、况んや其の忠奸邪正の分をや、唯だ既に政界

の第一層に在れば經歷境遇の關係よりして自然的役割なるものを生ず、自然的役割は則ち其の特能を示すもの、必らずしも諸公の意志に出づとは云ふ可らず、伊藤侯が多數の文官に推さるゝことは猶ほ樺山伯が多數の武人に推さるゝが如し而して井上伯の長州派に中心たるが如く黒田伯は薩州派に於て今尙ほ首坐を占む、薩長の輒は時に免れ難きに由り、調停の役は西郷侯克く之を取る、文武の間も亦た屢々和合を失ふ、此に於て山縣侯は無かる可らざるの人と爲る、松方伯は世の富人等に信愛せられて重きを政界に有し大隈伯は民間の政客連に其材幹膽略を認められて元勳諸老の間にも一種の眞價を保つ、三侯五伯は此に至りて聖朝の名臣たるを失はざるなり、慶せざるべけんや。

世人若し諸元老の中に就きて其の最も藩閥的思想の薄き者を求めなは其れ必ず

◎伊藤侯

を以て其の人と爲すに躊躇せじ、侯は實に藩閥出身の人にして而して藩閥思想に薄きの人なり、此點は吾輩之を認めて侯の爲めに取るべき所と做すを吝まず、更らに

諸元老の中に就き誰か最も才智を有すと問ふことあらば、吾輩は世人と共に伊藤侯を以て答へん。

侯は藩閥に薄し、侯は武邊に疎し、是れ侯の一長一短なり、侯其の長所を以て克く多數吏人の心を攪る、而かも其の短所は一面に藩閥連の不人望を招き、他の一面には武斷派に重きを有せず、伊藤侯の今日あるを致せしものは、固有の才智と、皇家の寵遇とに因るといふと雖ども、一は山縣西郷の二侯克く文武薩長の間を調停し井上伯克く長派を一統して以て暗に其の内顧の憂を減じたるに因る、察せざるべからず。

黒田伯にして樞密院に長たれば畏くも、君側の重寄に薩派の感情を害すること無けん、松方伯を閣に留むれば以て富人社會を籠蓋すべく、大隈と交情を温むれば以て政客を慰むるに足らん、而して樺山伯は遠く臺灣島に在り、伊藤侯の枕は則ち安し、唯だ人情は世態と共に變化して極まらず、諸公の交情若し冷熱ありとすれば、其冷なるときは伊藤内閣の安からざる時と爲るべきなり、伊藤侯の苦慮は唯だ此に在らん、而して其特能は自ら別に存す。

侯の特能は外交の務と憲法の解とにあり、従て侯の自然的主義は平和的進歩的とも行かされど、言はゞ所謂る十九世紀的なるべし、侯にして篤志強行の人ならば、其の幕僚たる伊東男、陸奥伯等を率ゐて十九世紀的主義を固執すべかりし、而して武斷派藩閥派と明白に相分かるべかりし、侯は毎に其の目的を達せんことに苦慮せずして、唯だ其方法を得るに苦慮し斯くして又た徒らに又一年を内閣の生命に與ふ、侯の十九世紀的主義は何時にか行はるべき、而して侯の十九世紀的主義は漸く剝落せんとす、惜い哉。

陶門跡絶春朝雨

燕寝色衰秋夜霜



◎山縣侯

三侯五伯の中、憲法の解と外交の務とを能くする者は朝に在て伊藤侯あり、野に在て井上大隈の二伯あり、此二伯一侯を除くの外、立憲政治及列國交際の事を何となくオツクウに思ひて尻コネリするが如し、特に薩州派又は武斷派の諸老は唯た伊藤侯あるを特みて閣中に安堵するに似たり、山縣侯と雖とも恐らくは亦た此の種類の屬するを免れず、侯は本と武人を以て身を立てたる者、政治の事は其の長ずる所に非ず、乃ち憲法及外交の取扱は侯固より伊藤侯に數歩を譲る、現に侯は伊藤侯の如くに洋文を解せざるなり。

然りと雖ども、山縣侯は純然たる武人にもあらずして和漢の文事をば一と通り心得玉ふとぞ、即ち西郷侯、黒田伯、松方伯、樺山伯等に比すれば侯は文事の智識較や多き人なるべし、故に侯は軍人社會にも資望を負へると同時に、文吏連中よりも亦た重んぜらる、諸老中に於て若し文武兼材の人を探らば先づ山縣侯の外に當撰者は之れ無かるべし、文治無斷の兩派にして相ひ軋轉することあらば、之を調停し得る

ものは他人にあらずして必らず此の侯なりとす、侯の久しく政府部内に勢力を有せしは實に此の特能あるを以てのみ。

山縣侯は其の材文武を兼ね、然れども其の文治的たるや聊か其の武斷的方面に及ばざるものあり、去る二十二年侯新に歐洲より歸り、黒田伯の内閣を襲ぎて首相たるや、實に第一期の議會に際會せり、此の時に當りて外交甚だ無事、夫の青木氏外務大臣として毫も足らざる所あるを見ざりしが、獨り憲法の解に至りては侯自力にて之を爲す能はず、乃ち今の伊藤侯を貴族院議長に置き其の補翼に據りて僅かに一年を過ごしたり、去れば山縣侯は伊藤井上二老の一と相携へて始めて文治の材を完ふし得べし、伊藤侯と離れ、井上伯と遠かるの山縣大將は、文治世界に於て頗る微弱ならん。

一長一短は人の免れ難し、山縣侯の短所は實に此點に止らず、夫の薩州派なるものに對しては侯實に重きを有する能はず、此に至りて侯は夫の西郷侯と相結ぶの必要あらん。

は世にも重寶なる人にして如何なる内閣にても侯之と相ひ容れざること無し。蓋し侯は猶ほ夫の伊藤侯の如く藩閥の念甚だ薄く、必らずしも自ら薩州派を以て居らず、且つ文治の點に於ては、侯殆んど其材にあらざるにも拘らず、往々にして文治大臣の位地を占む、侯は特能なし、其の特能なき所は是れ即ち侯の特能なるか。

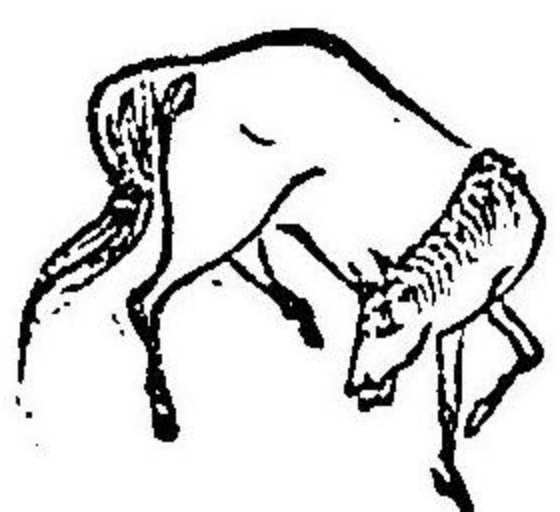
然れども武斷派に於て重きを負ふは西郷侯決して山縣侯に譲らず、薩州派の宿者としては侯必らずしも黒田伯の下に立つべきにあらず、故に伊藤侯は薩長間及文武間の折合の爲めに侯を引かざるを得ず、特に山縣侯の閣を去りし後は伊藤内閣の爲めに西郷侯一日も無かるべからざるの人なり、况んや侯は直ちに國民協會と相ひ連りて多少の黨派的勢力をも有するをや、侯の現内閣に重んぜらるゝは怪しむに足らず。「之を要するに、凡て内閣の存立、薩長の權衡とか文武の調和とかいふ事を必要とする間は、何人の組織する内閣にても、山縣西郷の二侯は竟に度外視せらるゝこと無かるべし、二侯の朝廷に重んぜらるゝ間は政府なる者は決して内輪われなぞすべき筈

なし、二侯は其れ藩閥政府の柱石ならんか、夫れ武人は大將に至りて其の高を極め、文吏は大臣に至りて其の貴を極む、而して寒士より起りて伯と爲り又た侯となる、其の國家に盡くせし功勳の大に由るといふも、二侯の顯榮は自ら別に由る所あらん、伊藤首相の此の二老に於ける亦た厚からずといふべからざるなり。

顯榮富貴を極むる者は有爲の志自ら消す、有爲の志なき者は何の必要ありて責任の地に立つべきや、二侯の如き亦た昭代の名臣なり、立憲政體及び列國交際の事は之を他人に委して以て美名を老後に保つ、豈に人情の常趨にあらずとせんや。太政官は廢せられて内閣てふもの置かせられ、大寶令的政府は十九世紀的政府に改められて以來大宰相は必らずしも舊攝籙に限らずなりぬ、其の始めに總理大臣となられしは今の伊藤侯、其次に代はりしは黒田伯、而して山縣、而して松方、薩長更るゝ立つといふ内約の存するにも非るべけれど、一長一薩互に首相の職に登りしは不思議なり、一たび大老職に就かれし大名は、相撰年寄と同じく、唯だ四本柱の根にアグラかいたばかりでも觀客に見答へあり、必らずしも其の力量の如何を問はじ。

いさほるし我身は春の駒なれや

野がひびてらにはなち捨つる



◎黒田伯

の松方伯と共に今も世人に彼是と言はるしは其の曾て一たび首相の席に就きしことあるに由るものと云ふべし。

然れども黒田伯は其の昔し故南州配下の四天王の随一たりし経歴を以て、今猶ほ薩州派第一席の故老たるを失はざるなり、縦ひ薩州派の若手連は左までには思はざるも長州派より見れば兎も角も南州翁以後の剛の者たる事情あらん、論より證據、伯が首相の地に登り又た樞相の位に在るとは、如何に伊藤侯に重んぜらるしやを知るに足る、若し長州内閣といふものを立て得るあらば井上伯其中心と爲りて伊藤、山縣の二老を左右にすべきを要するが如く、薩州内閣は黒田伯を中心として松方、樺山其の左右たるべきなり、而して其の不足の點は大隈伯もて補はん。然りと雖も

◎松方伯

は其の一たび首相たりし経歴と其の富豪社會に重望を負ふの事實とを以て、黒田伯の下風に居る者にあらず、唯だ伯に兵權なきの點は猶ほ伊藤侯の如く慥に一の短所

たり、故に世運の變遷若し松方内閣の成立つを許さば黒田、樺山の二伯は言ふまでもなく其の右翼と爲るべく、而して立憲政體及列國交際の務に付ては大隈伯之が左翼たらん、斯くして成立する松方内閣は必らずしも純然たる薩州内閣とはならずして、其色容は今の伊藤内閣と正反對なるを示すに至るべし、是れ黒田伯の内閣と稍々相ひ異なるの點にあらざるか。

松方伯の薩藩的志趣に淡なるは猶ほ伊藤侯の長州派に冷なるが如し、故に伯の薩州派に於ける地位は黒田伯に及ばざること遠からん、特に武斷的傾向ある薩州派は伯が如き文官出身の人を甚だ重せず、是に於て伯は少なくとも樺山伯と相ひ離るべからず黒田伯と相違ざるべからず、而して西郷侯の圓滑なる自ら伯と相ひ合せん、國民協會は長六薩四の抱合物なりと見做さるゝものなるが、彼れは西郷侯、樺山伯を経て勢ひ間接に松方伯と連るを免れず、強て之を免れんと欲せば協會は自ら滅びん。

立憲革新黨は異分子の結合なりといふも、自由黨の次には此の黨より大なるものなし、此黨や三侯五伯中誰れに最も近きかを問へば松方伯に最も近しと答ふるも大差なからん、而して其の一半は大隈伯に近くして改進黨と殆んど其の軌道を同うす、大隈にして松方伯と結合するに至らば革新黨は益々伯に近寄ること多言せずして明なり、國民協會は益々伯に近寄ること多言せずして明なり、國民協會は其頭部に於て松方伯と間接に相ひ連ること前に言ひしが如し、而して其の脚部に於ても緊要の部分は頗る革新黨と漸く相ひ接近するを見る、此に因りて之を見れば、松方伯の政界に於ける近狀は多幸といふべし。

且つ松方伯は老練なる文吏の間にも信用を有す、文治的勢力の點に於ては伊藤、山縣の二侯に及ばざる所ありといふと雖ども、井上伯と比すれば寧ろ過ぐるありて及ばざるなしといふべし、現に財政の中心たる大藏省は今猶ほ依然として松方伯の手を離れずして、金融社會のパロノメートルとも云はるゝ井上伯をして一指をも其鼎中に染めしめず、况んや黒田伯の如き薩州的大故老の其傍に在るをや。

◎井上伯

の長州派に於けるは猶ほ黒田伯の薩州派に於けるが如し、黒田伯一たび慣れば薩派の士皆な憤り、井上伯若し不平を唱ふれば長派の人士亦た不平を唱ふ、井上伯の勢力亦た大なりといふべし、二伯の性行は固より相ひ同じからざれども、男らしく各々其の藩閥を代表するに躊躇せざるは即ち相近し、蓋し二伯は共に多情の人にして名聞の爲めに其の真情を枉ぐるが如きは伯等の敢てせざる所ならん。

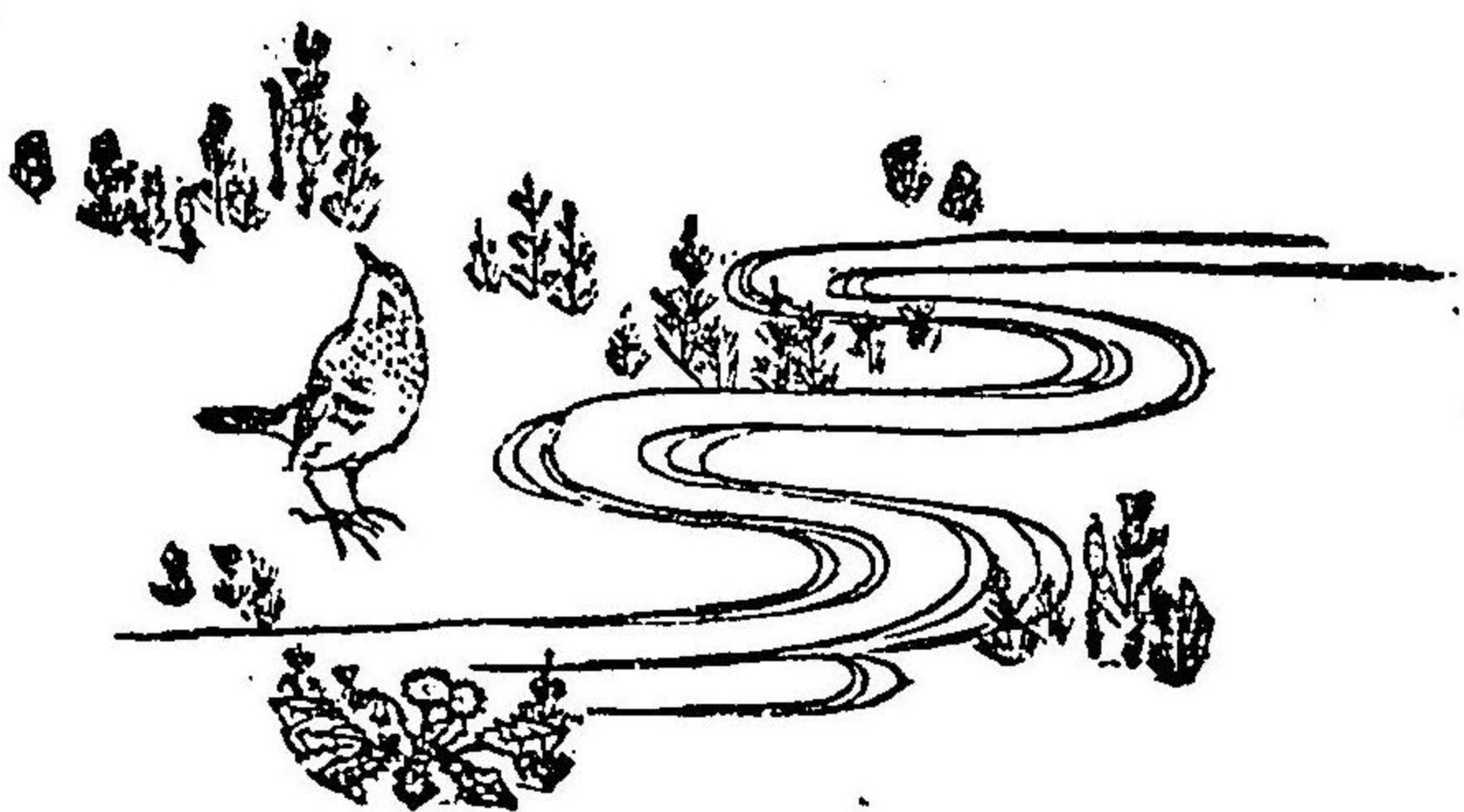
黒田伯の薩派に於ける關係よりも井上伯の長派に於ける關係は一増密切なるが如し、何となれば薩派には第二の黒田伯あるべきも長派には井上伯を除く外復た伯に似たる者無ければなり、切言すれば、井上伯なければ長派の一致は一日も保つべからずして従て長派の存立甚だ覺束なきなり、井上伯は外交の務に通ずるも憲法の解に至りては伊藤侯に及はず、文治的能力は伊藤侯に多く譲らざるも、兵權を有せざる點は則ち山縣侯に一籌を輸す、然れども其の欲する所を斷行し其の愛する所を厚用するの勇は伊侯固より及はず山侯の武斷的も亦た及ばず、三侯五伯中此の點に付きては皆な顔色なけん、強て其の比較を求めなば黒田、樺山の二伯稍や之に近きか。

井上伯の果斷にして世評に拘らざるは薩派の黒田、樺山を壓するに足るべく、其の財政上に於ける勢力は夫の大藏省に舊株を占むる松方、大隈と比肩すべく、外交上の智識は伊藤、大隈に敵するを得ん、唯た伯の性行は、其の愛する所を過度に愛し其の憎む所を過度に憎むの傾きありて且つ愛憎亦た變化甚だしく、従て多數異種類の人々を總攬するの量に乏し、言はば飽きつぱくして瘡癩持ちの方なり、是れ其の勢力の大なるに拘らず未だ一たびも首相の職に上らざる所以か。

然れども、世若し純然たる長州内閣を造るの必要に遭ふことあらば、其の時の首相は伯を措きて他に求むべからじ、但だ伯は老人の機嫌を取ること慣れずして専ら壯年の才子を用ふるの風あり。爲めに長州以外の信用は遠く伊侯に及はず、或は意外の邊より敵を招くことあるべきも、井上伯の内閣にして成るあらば、必らず活潑の才子其の側に多く集り、存外に情實の宿弊を破るに足らん、若し出來得ることならば一回は井上内閣を捲らへて見たきものなり、伯未だ老はずんば必らず其の企望あらん。

瓜類一何多 吾欲問老圃

更乞東陵侯 來教渴者苦



◎樺山伯

井上伯は長派元老中最も果斷ある人にして樺山伯は薩派の元老中最も勇敢なる人なり、二伯は經歷に於て大に相ひ異なるも、内情に拘らず外評を憚らず其の思ふ所を行はんと欲するの氣象は相ひ同じきなり、二伯は共に左盼右顧唯た圓滑を是れ努むるの政界に適當せざるの人なり、故に井上伯が電信鐵道の通ぜざる豆州修禪寺に隠れたる如く、樺山伯は自ら好みて大洋外の臺灣に總督の任を奉じ瘴烟瀟霧の間に其の豪氣を靜養せり、樺山は眞に武斷的政事家なり、然れども彼れは滿腹唯た南洲の遺志を續ぎて國威を輝さんと欲するの心あるのみ、街名飾功榮爵を取りて以て老後の逸樂を貪るが如き人にあらず。

夫れ武斷的政治は必らずしも悪しきにあらず、唯だ辭柄を武斷的に假りて徒らに權勢を張らんとするデモ武斷的政治は惡むべし、揚言して曰く、議會の喧囂は顧みるに足らず民間の論議は懼るゝに足らず二回でも三回でも解散は大權の自由なりと、而して其の内心を窺へば初より何の愛國的企圖もなく、唯だ藩閥的權勢の滅せんこ

を慮りて故らに傲語を放つのみ、樺山伯をして之を聞かしめば必ず私かに其の眉を蹙めんなり、伯の武斷的は他の諸侯伯と異れり。

◎大隈伯

朝に在りては伊藤侯といひ野に在りては大隈伯といふ、是れ何故ぞや。一侯一伯の遠く他の二侯四伯に過くるの智徳ありといふか、然れども伊侯獨力にて文武を統一する能はず隈伯の腕豈に薩長を操縦すべけんや、二人の特に今の政界に持て囃さるる所以のもの必らずしも其の智徳にあらず、所謂る十九世紀的政事家を克く氣取るの一點に由らずんばあらず、十九世紀的政事家とは自由主義の政事家といふにはあらずして、即ち流行の政事家といふの義なり。

伊藤侯のヒスマークを氣取るが如く、大隈伯はグラッドストーンを氣取れり、伊藤侯がホーヘンローエたることすら得ざる如く大隈伯亦た夫のロースペリーたることすら未だ得ざるなり、然れども、彼等其の齡何れも耳順に近きにも拘らず妙にモデルンアイディアを有する如く氣取り、洋行歸りの壯年者と議論を上下して頑固迂濶ならざるを示すこと、此の一點以て他の侯伯を凌駕して後へに睨然たらしむるを得、

一侯一伯の外に井上伯は稍や新思想あるが如きも氣取りの一點は未だ及ばざるものあり、伊藤侯が憲法法律の講釋に長ずる如く、大隈伯は經濟財政の批評に巧なりと稱せらる、實地の技倆は兎も角も此の點に付ては他の諸老皆な自ら企及せずとして暗に大隈伯を推すものに似たり、伯亦た以て自ら居る。

大隈伯は此の特能の外に又た諸老の企及せざる所のものあり、恐らくは伊藤侯と雖ども固より伯に向ひて三舍を避くべきなり、凡そ今の侯たり伯たる人には多くは順境に慣れたるも逆境は殆んど青年時代の記憶に存するのみ、特に伊藤侯は上に君寵ありて下に吏望あり以て今日に至れり、諸老若し一朝其地を換へて大隈伯の境遇に至らしめば恐らくは落膽失望して復た前時の人に非るべし、夫れ身強藩の閥威を挾み上に君寵を荷ひ下に吏望を負ふときは庸人凡夫と雖ども猶ほ得意の色あるに足らん、大隈伯の如きは皆な之れなくして而して克く早稻田邸に車馬を集む、此の點は伯の外復た克く及ぶ者なけん。

改進黨は小と雖ども大隈伯之を支配す、伯の克く逆境に立て得色あるは改進黨其の配下に在りて之を奉ずるに由るか、然れども聞く所によれば、今の改進黨必らずしも伯の配下に非ずといふ、時に或は伯あるを迷惑とすることありと、然らば大隈伯は其れ眞に獨歩の力量あるか、改進黨猶ほ然り、其他の諸黨派が大隈伯に因縁ありと稱せらるゝを無上の迷惑とするは毫も怪むに足らず、夫れ君寵の薄厚は暫く問ふを休めよ、朝に吏望なく野に士望なく、加之薩長兩閥の嫉視を受けて動もすれば輒ち構陷せらるゝあり、凡そ今の世に不利の地位を保つ者誰れか大隈伯に如くものぞ、而かも彼れは依然として窮通をいはず、偉といふべし。

三侯五伯中若し文治的手腕を求めなば、世人必らず伊藤、井上、大隈といふ、而して井上伯は漸く老ひて復た往時の敏腕を有せずなりぬ、此に至りて政界は唯だ伊藤侯を朝に算へて大隈伯を野に算ふ、朝野の人士は伊藤侯に附かざれば則ち大隈伯を推すに至る、現に夫の自由黨も今や伊藤侯に付き従て大隈伯を排斥するを以て其の任務と爲す、蓋し今の政界は忠奸を以て分かれずして利害を以て相争ふ、一侯一伯

の外に忠誠なる人は固より之あり、然れども手腕の鋭鈍は覇業の成否に關せん、伊藤侯は足利公の如く大隈伯は新田殿の如きか、兩者共に覇を企つ、克く京師を守る者は則ち覇權あり、但だ明治の昭代は伊侯の覇權遠く足利に及ばざるものありて、而して隈伯の運命は寧ろ新田よりも多幸たるを見る、賀すべきのみ。

◎結 論

吾輩をして少しく夢想を描かしめよ、今其の徳量以て三侯を容るゝに足り其の膽識以て五伯を御するに足る人あらば、其の人出で、首相の位に登り、伊藤侯を内務大臣と爲し大隈伯を外務大臣となし、松方伯をば大藏に復せしめ、山縣、西郷二侯を各々陸海軍の局に當らしめ、井上伯を農商、遞信の局に當らしめ、樺山伯を參謀本部に入れたらば、此の諸名臣は、聖朝に於て各々其の能事を盡すべきか、惜い哉、此の夢想は竟に夢想たるを免れざること。

飽食安眠消日月 閑談冷笑接交親
誰知將相王侯外 別有優游快活人



○庶民子來

聖徳の盛なる其れ至れる哉、大婚の式を擧げさせ給ふや、四方の民争ひて京に入る者方を以て數ふ、聖徳を慕ひて皇儀を祝するの心厚きにあらずんば焉んぞ能く此に至らんや、雨雪繽紛として道路皆な泥濘、而して來り賀する者は毫も難しとせず、相ひ率ひて宮城の邊に参り以て大典の盛を拜す、皇徳の斯民に蒙らすもの二千五百余年以て此に至る。

此の忠厚順良の民を以て此の國を爲す、若し治する能はずとせば是れ民の罪に非ず、輔弼の職に在る者其實に任せざるべけんや、夫れ驕悍の民は御するに政刑を以てすべく、忠順の民は懐くるに徳禮を以てせざるべからず、今世人は立憲を名として唯だ之に加ふるに政刑を以てし、而して治まらざれば則ち罵つて驕悍と爲す、民本と驕悍なるに非ず、治むる者の之を驅りて驕悍ならしむるのみ。

皇の盛儀を擧げさせ給ふや、必らず兵を郊に觀る、盖し尙武の氣を國に養ふ所以、夫れ尙武の氣とは何の謂ぞや、敵愾の氣を謂ふ也、王の懐はる所に敵するの氣は是

れ獨り兵の氣にあらず、舉國皆兵の今日は寧ろ之を國民の氣といふべし、今や

皇の兵を觀たまふや庶民子來して以て万歳を祝す、是れ實に國民の氣の發揮せる一兆象に非ずや、爲政の局に當る者若し對外の士心を非とするが如き事あらば、吾が皇の大御心と相ひ違ふの嫌なきを得んや、吾輩竊かに畏る。

民は皆な勤王、人は皆な敵愾、唯た其れ敵愾なり、故に内に向ひては常に忠順なり、唯た其れ勤王なり、故に外に向ひては時に驕悍なり、是れ心理の通則にして爲政の局に在る者察せざるべからざるなり、若し當局者乃ち外に向ふの驕悍を忌みて反つて内に向ふの忠順を失はしむるの方針を取らば則ち如何、今や盛典の日に際して庶民子來の風を見、大に感ずる所あり、記して以て世間に問ふ。

祝つることたまなれば百年の

のちも盡せぬ月をこそ見ぬ



○櫻

◎最爾たる孤島の中

吾人日本人一たび自から吾人の位置を顧念するときには奇妙、神妙、不可思議にして深く自ら崇敬し、先天に有する自尊の氣象をして更に一層自尊の念を喚起せしむるものあらん、試みに亞細亞若くは羅歐巴なる大陸人の眼より此一國の位置を視んか、最爾たる絶海の孤島たるは、柯太、蝦夷と何ぞ擇ばん、臺灣、瓊南と何ぞ擇まん、乃ち呂宋、乃ちシンタオ、乃ちボルネオ、乃ちセレベス、乃ち新ギニア、乃ちスマトラと亦復た何の異なる所ぞ、而るに獨り日本人と稱する一族の生ずる諸島のみ、數千年來聲きこと磐石の如き邦家をなし、美しきこと春花の如き文明を發し、今は則ち世界の人均しく東天に旭光を仰ぐ、是れ誠に奇妙、神妙、妙不思議といふべきなり。

其身幹を視れば未だ嘗て他の東方諸國の民に異ならず、其の躰量を問へば亦未だ嘗て他の海島諸方の人に異ならず、更らに之を泰西の國民に比すれば兩ながら共に一

籌を輸するなり、而して其勇敢の氣象を觀れば、諸島は論なし、他の亞細亞の大陸人を壓して岸として歐羅巴人の前に立てるあり、彼れや海島諸方の民、安んぞ正義の食色より重きを知らんや、又安んぞ仁愛の斯民に周からざる可からざるを知らんや、亞細亞の大陸は孔子に聽き、釋迦に聽き、歐羅巴の大陸は耶蘇に聽き、摩西に聽きて僅に之に傾向するも、衷心の誠は從はず、而して此日本人は孔子と釋迦を借らず、摩西と耶蘇を待たずして數千年の古より正義の爲めには水火を避けず、仁愛の爲めには自家をも顧みざるの天性を稟有せり。審美の情と高尙の氣との富贖なるは文化の邁等なる邦國に於て始めて之を見るとは目今の通論なり、而して此日本人には高妙不可言なる審美の情と、一種不可及なる高尙の氣とは先天にして賦享せり、是れ誠に奇妙、神妙、妙不思議といふべきなり。

◎世に不快の説あり

然るに世に不快の説あり、日本人の秀靈斯くの如しと雖ども、規模の小にして器局の狹なるは終に大陸人と比肩して立ち、並鎬して馳する能はず、例へば日本の繪畫

の如き、就て之を看れば鮮妍可憐ならざるに非ざるも、離れて之を望めば索然平板興味なし、之れに反して歐羅巴の畫圖は、就けは則ち塗沫含糊、徒た丹走り青迸るを看るも、望めは則ち陸離光怪、幾んど端倪す可らず。例へは日本の家屋の如き、四疊半の數寄屋、内に風致を極むるは大陸に求めて無き所なるも夫の歐亞の大廈高堂、上に万人を坐せしむべきが如きは此國に於て見る可からず、例へは日本人の國に處するが如き、快刀亂麻を斫り、談笑の間に大事を決するの技倆は大陸人の驚嘆する所なりと雖ども、夫の大陸人が遠視始終を照し、百年の大計を策定するの器識に至りては到底日本人の企及する所に非ず。又例へは日本の詞章の如き、紅楓の河に浮べるを看て「渡らは錦中や絶えなん」との錦心は横溢するも「黄河万里入海流」といふが如き宏思は動かず、是れ他なし、規模の小、器局の狭なるに坐するなり、是れ遂に奈何んともす可きなしと。嗟乎是れ果して日本人の天性なる歟。將た習の以て然らしむるものなる歟、思ひて而して得ず、快々の間に久しく此説を聽く、頃る偶々櫻花の爛熳たるに會ひ、一日花を上野に賞して、豁然一覺胸宇頓に朗かなるものあり、喜心翻倒言ふ可からず。乃ち

◎翰墨を呼びて世に問はんと欲す

人の物を愛するや、概ね其の人の性行に近く合するものを求めて之に就く、故に見其友知其人といふ、友何ぞ獨り兩性人類の儔のみに限らんや、其親愛する所は鳥獸花艸も亦た一種の友なるなり、試みに視よ、菅公の皎々たる梅花を愛し、豊公の天々たる桃花を愛せしが如き、二公の人となりを察するに餘りあり、屈原の幽芳なる蘭を愛し、陶潜の高逸なる菊を愛せしが如き、二子の懷抱を想見するに足る、プランゼーの標致ある石竹を愛し、ヒスマーの空濶なる園林を愛せるが如き、二人の襟度も亦た躍出せるに非ずや、單一なる一ヶ人の好愛する所さへ以て其人の如何を見ることを得れば、複雑なる民衆の一般に好愛する所は益々以て其の民衆の特性を斷するを得べきなり、此の眼を以て諸國民の好尚を視んか、薔薇を愛する歐羅巴人、蓮を愛する印度人、牡丹を愛する支那人の特性亦た自ら判定するを得べく、而して櫻を愛する日本人の如何も得て知るべきなり。

然れども梅の如き上古に無くして後ちに渡來し、以て國人の愛好を分つものあり、杜鵑の如き上代に悪まれて後世に反つて愛せらるものあり、故に櫻を愛するを以て日本人の特性を斷せんと欲せば、此日本は上古より果して之を花王として愛好せしや否やを見んとを要す、而して余の翻倒して喜ぶ所は上古草昧の世よりして之を花中の花として賞せしに在り、蓋し我國當時の俗は禽蟲草木何れを問はず其中最も著しきものを見れば、其一類の總名を以て之を特稱せり、例へば木材中楨の如き、上古下民の屋材として、其需用や最も多かりし、乃ち之を呼びて真木となせり、又夫の飛鳥中其最も驚悍なるものを鶯となす、乃ち之を呼ぶに真鳥を以てせり、又夫の爬虫の裏、其最も忌避す可き蝮蛇を見るや、乃ち呼ぶに真虫を以てせり、此の命名法を以て櫻花に對し、之れを真に花中の花となし、乃ち命して木の花といへり、吁寔に寒暑の中を執る大日本の春山には古より百花は開く而して特に此の一花に興ふるに木の花の稱を以てせるは、尙ほ是れ此の人類を尊稱して万物の靈となすがごとし、愛の極なり、尊の極なり

且つ此木の花を愛好せしは上古も實に上々の遠きより來り、夫の瓊々杵尊の御世には一世の好尙早く已に此花を認めて百花の王としたりしなり、即ち當時天下第一の麗人世に生るゝあれば、之に負はしむるに木花開耶姫の名を以てせるにても知る可きなり、爾りしより以來貌なり徳なり、凡そ世に秀絶せし人に會へば則ち比するに此花を以てせしは、夫の三韓の王博士は灘波津の歌に仁孝明哲の大鶴鶴尊を木の花に擬し奉りしが如き亦其一例とするを得ん。

三江路千里 五湖天一涯

何如集覽第 中有中津池

◎空蟬のわがよの限り

又其花をサクラと稱するも上古に擬せしものならん、九春の天、鮎陽の空に妍を競ひ、芳を争ふ花は十百を數ふべきに、獨り櫻に「開麗」即ちサクラの稱を與ふるも

の亦木の花と名ずると同一意、之れを夫の妍麗なる一貴人を木の花開耶と稱するに視れば、サクラの命意は益々明なり、夫れ我邦人が愛櫻の好尚は斯くの如く夫れ古く、中頃支那の文物は國の上流社會を風靡せしも、牡丹を以て櫻に代へず、次て印度の宗教は貴賤上下を一化せしも、蓮花を以て櫻に易へず、歌を咏するものは万葉以來二十一代集を重ね、累千百万の什を見るも花といふ題には櫻といひ、美人の花顔に淡紅を帯び、妍麗慕ふ可きを視れば、則ち狀して櫻色となす、近くは封建の世代となり、武士を人中の人と尙へば則ち之れを稱して曰く「花は櫻に人は武士」と。日本人の日本人たる自尊の氣象の特名たる「やまと心」を説明して「朝日に匂ふ山櫻花」と斷定を與ふる詞に會へば、万口同音和唱して異論あらず、其これ愛するの極情は

空蟬のわがよの限りみるべきは嵐のやまの櫻なり是。

といふに至りては人は合和明廷の想あり、日本人の古來今往櫻を以て命となすや其れ斯の如きなり、是れ果して如何の人種なる歟。

◎試みに審美の情より之を見ん乎

今ま試みに審美の情より支那、印度、及び泰西なる三大人種の特愛する花を執て之れを我日本人種の命とする櫻花に比觀せよ、一輪の牡丹、一朶の薔薇、一顆の蓮花は瓶中に挿みて艶麗皆愛す可し、獨り櫻に至りては一瓣の花は以て目を寓するにたも足らざるなり、是れ牡丹、薔薇、蓮花の以て櫻花に優れる所なり、然れども牡丹の如き富贖と雖ども俗氣あり、薔薇の如き明媚と雖も霸氣を藏し、蓮花の如き飄逸と雖ども丈夫の態を存せざるなり、而して櫻花は獨り此の外に立てるの感あり、且つ其れ牡丹の俗氣を帶ふるは之を愛する支那人の卑吝に似たるあり、薔薇の霸氣を藏するは之を喜ぶ泰西人の殘忍性をなすに似たるあり、蓮花に丈夫の態なきは之を好める印度人の獨立の氣象に乏しきに似たり、見其友知其人の格言より推せば彼れ三大人種の好愛の表物は則ち其特性の一徵證にあらざるなきを得んや。

◎且つ尙ほ云ふべきものあり

且つ尙ほ牡丹、薔薇、蓮花につきて言ふ可きものあり、此種の花は是れ小瓶中の觀

なり、小園中の觀なり、小丘上の觀なり、小池中の觀なり、之を文章に喩ふれば孰れも皆な小品の種なり、雄壯宏蕩なる大文字にはあらず、一二種にして美なり妍なり、湖澤を連れ、山嶽に亘りて而して觀るを得べからざる所のものなり、且つ好し多く之を連れんか、會々以て人をして厭嫌の情を發せしむるものあらん、櫻花は則ち之に異り、一瓣はいふに足らずと雖ども、一枝は則ち觀るべきなり、而して一樹の好きは一枝の好きよりも好く、十樹の好きは一樹の好きよりも好し、乃ち百樹、乃ち千樹「一目千本」多々益々辨す可し、且つ其の花や咫尺の間に之を觀れば未だ大に異采を發せず、百歩にして之を觀れば白雲の空に起るあり、千歩にして之を望めば紅霞の峯に環びくあり、光采陸離、實に天地の間に磅礴せり、是れ寔に花の至大至壯、極妙最美なるものなり、而して百花に撰みて獨り之れを採り、殊寵絶愛以つて其の生命となす者にして豈に規模の小、器局の狭なるの理あらんや。

◎均しく東天の旭光を仰かしむるもの

寔に此國の位置を視よ、樺太、蝦夷、臺灣、瓊南、乃ち夫の呂宋、シンダナオ、ボ

ルチオ、セレベス、新ギニア、スマトラと將た復た何の撰む所ぞ、而して吾人獨り諸島の中に於て數百千年來斯くの如き邦家をなし、斯くの如き文明を致し、今や世界の大陸人をして回頭一時均しく東天の旭光を仰かしむるもの、如何ぞ規模の小、器局の狭を以て能く之を濟すを得んや、夫の至大至壯、極妙最美なる櫻花を以て生命となすに觀て以て其の特性を知る可きなり、然れば則ち今の時に當り國人の爲す所、往々偏狹細小の譏あるものは習にして性に非ず、夫の千樹万樹、九春を司り、絢爛陸離、天地の間に磅礴するものは汝が父祖先人の志なり、汝が後世子孫の事なり、花を觀て感悟する所あり、原櫻を作る。

秋風入毛骨 寒水遶柴門
 獨島平時外 斷雲幽樹村
 僧歸黃葉寺 橋落古苔園
 閑寂無人解 緜香倚竹研



○原氣

老人曰く劍花舞ひ彈雨下る未だ以て天下の患となすに足らず、寧ろ士狐化し、人鼠化し、官狸化し、民羊化し、國驢化し、邦猫化するを憂ふ、血淋たり、脊溝たり、未だ以て天下の憂となすに足らず、寧ろ邪を膽とし、奸を肝とし、諂を脊とし、詐を胸とし、操を胸とし、志を貨となし、念を魍となし、心を魅となすを憂ふ、鸞影北邊を掩ひ、獅蹄西邊を蹂む、未だ以て天下の患となすに足らず、舉朝婦人を爲ひ、一國女子を爲ぶ是れ誠に國家の深思なり、舉朝婦人を爲ひ、一國女子を爲ぶ未だ以て天下の患となすに足らず政府已に政府を厭ひ、議會既に議會を厭ひ、官吏既に官吏を厭ひ、人民既に人民を厭ひ、政黨既に政黨を厭ひ、名士既に名士を厭ひ、親々を厭ひ、子々を厭ひ、夫々を厭ひ、婦々を厭ひ、山河山河を厭ひ、草木々々を厭ひ、一國々々を厭ひ、天下々々を厭ふ、天下々々を厭ふ元氣銷するなり、一國々々を厭ふ志氣磨するなり、草木々々を厭ふ國家形無きなり、山河々々を厭ふ天地色無きなり、婦々を厭ひ夫々を厭ふ情失するなり、名士々々を厭ひ政黨々々を厭ふ意氣亡する世の大患なり。

早向湘流葬楚津 忍看天下悉歸秦
 十餘鳧雁誰加繳 六里江山巧弄人
 稚子勸君逢虎口 忠臣憂國逆龍鱗
 偏憐多技妙辭賦 千古低頭仰後塵



○革命の理

五十八

◎爲國の經、爲國の權

國なるものは國家に由りて代表せられ、國家なるものは政府に由りて代表せらる、故に國民たるものは政府を尊敬せざる可らず、兼ねて政府に服従せざる可らず、之を爲國の經といふ、惟だ其れ國家といふものは正義を持して公道を行ふを以て其本然の任と爲す、故に國民が政府を尊敬し服従するは、其政府が善く國家の任務を代表し、正義を持し公道を行ふの限りに於て其義務ある者と爲す、然れども政府なるものは元と人を以て構成せられ、而して人には即ち正あり邪あり忠あり姦あり、若し不幸にして政府姦邪の徒が手に落ち、國家本然の任を蔑し、單だ其權力を妄用して國を非命に沈淪せしむるあらんか、其政府は正しく國家の意思に反するものにして、自ら之が代表者たるの資格を喪失したるものなり、彼が如きの政府に對しては國民たる者は皆に尊敬及び服従の義務なきのみならず、之を廢して更に正當なる代表物を建立すべきの義務あるなり、之を爲國の權と爲す。

國家の生命は永遠不死を期す、而して忠正の士必らず世々進まず、姦邪の輩時ありてか局に當る、若し其れ姦邪の輩にして局に當り、政府を代表せしむるあらんか、國家の生命朝夕を期せず、是に於てか權道以て之を救ふ、而して經道復して全たし、故に爲國の道は經と權とに在り、是れ天の國民に許す所にして、萬古に亘りて誣う可らざるものなり、鬼神に質して疑ふ可からざるものなり、而して權道の發動之を革命といふ、革命也は時ありてか國に無かる可からざるものなり。

◎革命の辯

唯だ其れ革命なる語は人の視聽を驚かし易し。従ひて誤解を來さしめるの恐れなき能はず、故にわれ嘗て『日本人』に於て之を辯じしとあり、復たび此に之を擧げん。

われ今革命の必要を主張せんと欲するに當り、豫め一言して意義の誤解を避けん。抑も支那に謂ふ所の革命なる語は天の命を革むといふの約語なるが如し、蓋し支那の古に在りて帝位を踐む者は、自ら稱して皇天の御子即ち天子といふが如く、其帝として一國に君臨するは、皇天の命に由るもの、如く信じしならん、從

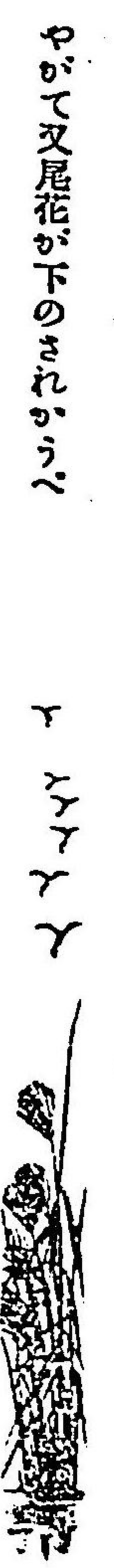
ひて其帝位を廢し己れ代りて之を踐むときは天の命を革むとは稱しにけんか、然れは革命なる語は吾人の夢想にだに上らざる所、何んぞ况んや之が必要を主張するに於てをや

今我謂ふ所の革命は之に異り、海西に稱する「レヴォリュエーション」即ち政治の變革を暫く革命と名づくるのみ、蓋し命なる語に精神の義ありとせば、政治の精神は變革するの擧を指して之を革命といふに於て、穩當を缺がじと信すればなり、若し夫れ明治戊辰の政變、彼が如きの擧を以て、彼が如きの業を成すを維新といはば、我謂ふ所の革命は則ち維新の意なり、若し又彼が如きの擧を以て彼が如きの業を成すを根本的改革といはば、我謂ふ所の革命は即ち根本的改革の義なり、乃ち維新の必要、根本的改革の必要を主張せんと欲するに過ぎざるのみ、

我謂ふ所の革命なるもの其れ諒とするを得んか、之に關しては西人亦夙に其意を致せるあり、シヤル、ド、レミユザン等が所謂「其目的や則ち眞實に、其主義や則ち公正に、其行爲や則ち適當に、其結果や則ち幸福に、其事業や則ち繼紹す可き、

是れ之を十九世紀に於ける革命の神髓と爲す」と、是れ亦我志を得たり、革命也は時ありて國に無かる可からざるものなり。

願ふに一世の人概ね經道の尙ふ可きを知りて、權道の無かる可からざるを知らず政府に衣食する者に論なく、皇漢の古學者も、西學の新學者も、甚しければ根本的改革を口にする政黨政社の諸人士も權の義を知らず、又權の義を思はず、權道をいへば亂臣賊子たらんかと畏れ、革命をいへば共和政治に傾くかと驚く、一世斯の如く後世も亦斯くの如くならば、經道も亦死せん、國を危くするものは實に此死經に在り、われ請ふ之を古今に徵せん



蓋し國といふものあれば、其政體の如何に論なく、革命の舉時に己む可らず、他邦の事は暫く擱き、一たび我朝の歴史に就きて之を回憶せよ、如何なる忌革命論者と雖ども、豁然として革命の國に無かる可からざる所以を頓悟するを得ん。看よ皇朝の十五世紀に至るまで我國の政權を専らにしたる者は蘇我氏の一族には非すや、若し一たび天智の革命を経ざらざれば、國家の危殆其れ之を如何と爲すや、國民の不幸其れ之を如何と爲すや、近くは維新の革命の如きも亦然り、若し其れ當日此革命の壯舉を一經し來らずば、皇威の光被と人權の伸暢と以て今日の如くなるを得る能はじ。而して蘇我氏や徳川氏や皆な時の政府を代表する所のものなり、若し今の論者の如く、政府に對し革命の舉に出づる者を以て亂臣賊子となすあらば、天智、鎌足は皆亂臣賊子なり、而して維新中興の元勳三條、岩倉の諸公より西郷木戸の諸氏に至るまで、亦皆亂臣賊子たらん、乃ち其末光を仰ぎ余澤を蒙りて今月今日政府の要路に立てる公侯相將亦又亂臣賊子に非ざるは無けん、天下寧ぞ此理あらんや。

尙ほ詳に之を言へば、蘇我氏の政府や徳川氏の政府や國家の本旨に背反し、國家の生命を殘賊するものなり、國民の之を尊敬し之に服従するの義務は此時既に絶へたるものなり、此義務既に絶ゆ、之と同時に正當に國家を代表すべき眞誠の政府を創立せざる可からざるなり、是れ亦國民たる本然の義務と爲す、爲國の權とは則ち是なり、革命也は實に此權の發動なり、天智の革命や維新の革命は此權の實行に外ならず、天下今に至るまで一人の其盛舉に疑なき者は國民の自ら此權に默契冥識するの明徴なり、而して今日革命を言へば論者の愕眙逡巡するは何の故ぞ。

◎革命夫れ無かる可けんや

且つ革命の時に無かる可らざる必要は獨り此に止らず、國家を代表するの政府は、常に人に由りて表彰せられ、而して人は動もすれば必要以外に政府を膨脹せしめんとするの傾あり、殊に我國の如き國制に於ては最も此傾向を長ずるの弊あり、此弊をして際限なく滋蔓せしめんか、人民の幸福は擧げて政府の犠牲に上るべし、之を救ふは又革命にあり、われ又嘗て『日本人』に於て之を言ひしことあり、

惟ふに我國の革命は、藤原氏の革命、源平氏の革命、北條氏の革命、足利氏の革命、織田氏の革命、豊臣氏の革命、徳川氏の革命、薩長氏の革命、之を革命の甚大尤著なるものと爲す、若し我國にして一も是等の革命を経ず、而して國初以來の政府依然として繼々承々し來らんか、皇室を圍繞せし蘇我氏の一族、朝廷に充満せし藤原氏の一族、諸國に散在し、諸源の後裔、三十余州を分領して平氏の一族より、降りて北條、足利、織田、豊臣と、就中自家の兄弟子孫恩顧譜代を以て海内を專有し徳川氏とは、今の薩長氏以外に皆な貴族たるの利と權とを有し、其生活を國家の上に托し、斯くの如くば三分の人民に七分の政府を有するに至るべく、國何を以てか生存することを得んや、則ち以上の數革命を経、其度ごとに後者は前者の特權を奪ひ特權を收め、其大分を治者より引卸し、之を被治者の列に降し、が故に一國の權衡僅に維持する所あり、不十分ながらも人民今日の幸福を享有するを得たりしなり、革命其れ已むを得んや。

治者の一たび國家に據り其特權と特利とを壟斷するや、一般に對しては口實なかる可らず、是に於てか何れの治者も口を開けば則ち曰く、貴族なるものは皇室の藩屏なりと、實だ貴族を然りといふのみならず、治者全體を合して皆皇室の藩屏となす、現に今の薩長氏より吾人の日々稔聞する所、吁是れ實に笑ふ可きの至なり、我國に於ては四千餘方の民皆な勤王黨、全國を通じて悉く皇室の藩屏たらざるはなし、謂ふ所の非勤王黨、反帝政黨なるもの何處にかある、斯る目出度き國柄に對し、何ぞ一分の國民のみを限りて皇室の藩屏と稱するを要せんや、其藩屏と稱する者の十の八九分は、其實〇〇〇〇なるのみ今の〇〇〇〇に於て最も其然るを見る。

〇〇氏一たび政府に據りしより業に已に三十年、もろ／＼の特權と特利とを收めて悉く二家の私門に集め、一族黨與に五爵を授けたる者無慮數百人、其他勳位恩金に食む者に至りては、擧げて數ふ可からず、若し精密に其中に就き正直に殊勳偉功の士を求めんか、其數豈幾何あらんや、其他自家の功名の爲めに乃至私恩を賣らんが爲めに、國民の慶福如何に關はらず、國家を増大し、と振古未だ曾て其

比を見ず、吁是れ冷眼にして抛擲すべきものとなすか。
願ふに以上列擧し、革命中には、眞誠の革命を以て目すべからざるもの亦之れあり、
而も政府無用の膨大を裁節したるの功能は、毎度之を伴ひたるを認むるを得べし、
革命其れ無かるべけんや。

Gull mall a gem of purest ray serene
The dark, unfathomed caves of Ocean unseen
Gull many a flower is born to blush unseen
And waste its sweetness on the desert air.



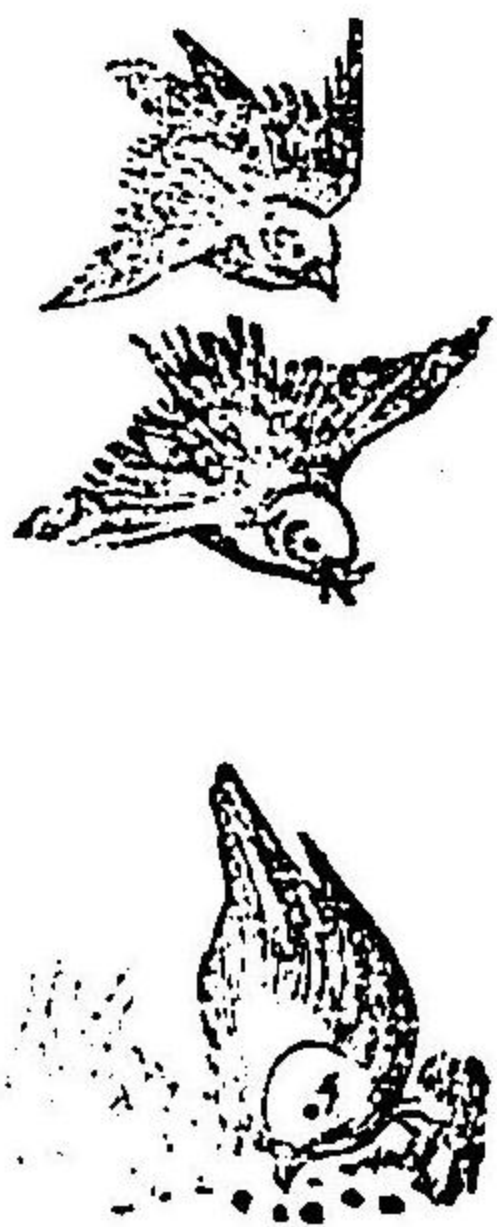
○求直諫詔

明治元年十月十七日

『詔 皇國一體、東西同視、朕今幸東府、親聽内外之政、汝百官有司、同心戮力、以
翼鴻業、凡事之得失可否、宜正議直諫、啓沃朕心』
詔札藏して御庫に在り、詔旨布きて四方に在り、而して近時百官有司一人の直諫を
納るゝ者あるを聞かざるは 聖代直諫を納るゝ者なきに由らん。
嗚呼是れ明治の 聖代直諫を納る可きもの無きに由る歟 然りと雖とも禹は古の聖
人なり、其下尙ほ諫臣あり、故に云く、禹聽昌言則拜と。

晚來風定花如雪

飛入宮牆不見人



○ 壯士何くにか歸らん

◎ 古の壯士

衣は胛に至り袖腕に至る、腰間の秋水鐵斷つへしと振ひしも壯士なり、風蕭々として易水寒し、壯士一去復た還らすと慨せしも壯士なり、古の壯士は眼に名利の念なく、身を抛ち家を忘れ、或は人の爲めに難を排し粉を解き、或は國の爲めに危険を冒して辭せず、此故に國家危急の際又社會腐敗の時に當りて必ず壯士なるもの現はる、壯士なるものは武力世界に在りて亦一の刺激劑となり、防腐藥となりしことなきに非ず、然れども紀綱振ひ法度張るの時に在りて古來壯士あるを聞かず、壯士の現はるゝは却て是れ時事方に非なるの反證たり、而して是れ即ち古の所謂壯士なり。

◎ 今の壯士

壯士なるものは書生に非ず、武人に非ず、商人に非ず、學者に非ず、即ち一種の仲間なり、今日の壯士なるものも亦昔時壯士の餘流にして、宛かも彼の支那戰國時代處士横議の世に現れたる「客」なるものに髣髴たり。今を距ること三十年前、幕府の

政綱方に衰ふるや、家を棄て藩を脱し、志氣慷慨、一劍に仗りて天下に奔走し、王政復古の説を唱ふ、此に於てか壯士なるもの大に勢力を得、漸く時運を風動す。而して其勢漸く成り、幕府倒れ、王政維れ新なるの際に當りて壯士の價值頓に高く、以て少壯人士の氣血を動かせり。維新政府立ち、社會の秩序漸く整ふと雖も、當時壯士の遺風は容易に消滅するものに非ず。爾來二十餘年間、壯士は一轉して政黨社會の波瀾に乗し、其悲歌慷慨の氣を鼓して往々世人を騒せり。加ふるに一方に於ては、二百万の士族一朝世祿を解かれたるか故に、或は官途に上り或は商賈に従事するも、二百年來政治を高談せし氣風は、業を求めて業を得ず、公私交々一世を疾視するの心抑ゆへからず、此に於てか壯士なるもの、餘流、今日に至るも尙ほ未だ盡きず。之を要言すれば、今日の壯士は維新壯士（即ち今の英雄豪傑）の餘風と、封建武士の遺業と交相投合して生ぜし者といふべし。而して其風氣の稍々流落するや、不逞無頼の徒又之に投して身生を托し、遂に世人の爲めに蛇蝎視せらるゝに至れり、是れ即ち今日の所謂壯士なり。

武力時代去りて文明時代來る、此に於て壯士者流の早晚形狀を變ぜざるべからざるは當然なり、然れども世人壯士なるもの、生存する理由を明かにせずして、徒らに之を排斥し、之を疾惡し、嘗て彼等の方向を指導せざるは甚た不可なり、社會激變し嘗て政治文學武力の力を専有したりし種族、一朝身を立つるの地を失ふ、此時に當りて秩序外に縱横する政治的分子の留存するは決して怪むに足らざるなり、彼等は固より社會の厄介物には相違あらず、然れども社會は徒らに之を疾惡し嫌忌するのみにて止むべきに非ず、社會の子弟の無賴狂暴を見て更に之を教え之を導くことをなさず、徒らに之を鞭撻し之を呵責するは、父母の父母たる所以に非ず、彼等の狂暴は抑ゆへし、彼等の過激は戒むへしと雖も、彼等の心術は甚た憎惡すべきに非ず、蓋し彼等は單純にして驕激なるの極遂に急々の心に忍ぶ能はず、遂に敢て社會の秩序を侵すに至る、之を彼の口に文明を唱へ、陰に野蠻の行をなし、名を公平に借りて實は權譎の術を行ふか如き、陰險奸佞の輩に比すれば、其惡むべきの度如何そや。

願ふに刀筆を執て細密の事務に従ふは、彼等の能くする所に非ざるなり、錙銖を較へ虚實を計りて商業に就くは、彼等の能くする所に非ざるなり、學術を研究し理法を探討するは彼等の能くする所に非ざるなり。凡そ社會に於ける秩序的の業務は願ふに彼等の能くせざる所にして、又其欲せざる所ならん。然らば則ち彼等の將來身を托するの地は果して何の所ぞ、吾輩の見る所を以てすれば則ち雄壯快活なる地殖民の事業これなり。日本今日の形勢を見るに、法律改正せざるに非ず、制度文物整備せざるに非ず、然れども國民生活の勢力常に萎微振はざるは一の宿弊なり。人口日に繁く、貧民月に殖す、而して國民中更らに眼を拓地殖民の業に注ぐ者なく、因循姑息小天地内に蠢動して、小文明を修飾するのみ、是れ世人漸く文弱の衰風に傾き志を四境の外に馳する者なきに依る、此の時に當り日本國民の新元氣を吐て、國力を振張するの事業に従事するは、豈に壯士の任に非ずや、壯士諸氏よ、徒らに齷齪紛擾して所謂紳士紳商の爲めに蛇蝎視せられんよりは、壯圖一蹴鵬翼を張り虹氣を吐き、此の快活の業に従事するに如何そや。吁、北海の沃野、南島の富源は、諸氏の

来るを待つこと久し。

べにさいた口も

わするゝ清水哉



○世界の一半

◎一大疑問、一大危懼

『世界の一半、東方の天地は昨今如何の状をなすや』天外聲ありて此一問を落し來るとき、東方の同人、果して如何の答を引く歟、『東方の一國、日本の分野は目前如何の運に中するや』冥中響ありて此一問を寄せ去るとき、日本の同人、果して如何の對を取る歟、此は是れ一大疑問、一大危懼。

西一半の世界を説くとき、必らずしも東一半を問はず、東一半を談せんと欲すれば、直ちに西一半の之か主となるぞ先づうたてき、何物の牛鬼か先づ主となるや、英國なり、露國なり。

◎波斯

波斯は我波斯なり、英の波斯に非ず、露の波斯に非ず、然れども國をして擧げんと欲すれば、忽ち英露の談となる、蓋し波斯は歐羅巴と印度との路衝に當る、兵略眼もて之を窺は、正に英國の策線に中せり、英國永く之を擒すれば英國と印度との

聯絡を失はず、露國一たび之を拉すれば、印度は掌上に運らす可し、即ち波斯は英露の孤注、

前年波斯王英國に遊ぶ、英の女皇臂を拉る、英の宰相壽を稱す、倫敦府中奉迎に狂し、全英蘇愛万歳を唱ふ、王の去るとき寶貨車に盈ち、冠蓋車馬埒頭を埋む、堂々たる波斯の可汗、宛然英皇藥籠中の物となる、安んぞ知らん、露國の欽差波京に在り、黄金万鎰、出入を問はず、多く宮中に賄ひ、多く府中に賄ひ、妃嬪之を賄はざるなく、相將之を賄はざるなし、專制國の國命は相將に在り、君主國の勢力は宮中に在り、堂々たる波斯の王、俄然露皇願使中の一に落つ、是れより波斯、足は地を離るゝこと三尺。

近ごろ英國は印度よりベルヂスマンを申ぬき、波斯のサイスマンまで國道を開通すること力を用ゆ、要は緩急一瞥、直ちに大兵を送り、無事日常、貿易を聯ねんと欲するなり、露國も亦須臾も猶豫せず、頃ころは波斯が嘗て英國に負へる烟草專賣權報償金を償却せしめんが爲め、關稅を抵當に五十万圓を貸與して、一面には恩惠

の絆に波斯を繋ぎ、一面には樞紐の間に英國を斥けんとせり、此れは是れ東方の我波斯。

◎阿富汗

阿富汗は英の阿富汗に非ず、露の阿富汗に非ず、亦是れ東方の阿富汗なり、而して露國之に據るときは印度帝國を眼下に視あるし、譬へは高屋に瓶を建るが如し、砲門一たび開らくとき彈雨硝煙を此大原曠野に漲らすへし、印度あらざれば英國あらざるなり、阿富汗は實に印度北面第一の屏障。

今や英國の術數は阿富汗の可汗に中りたり、可汗は頃ろ國中に詔して曰く、露國は終に阿國に利なるものに非ず、阿國の安全は一に英國と親和するに在りと、此時露國の權謀は早く阿内の諸汗を擒にしたり、是に於てか内亂は又發す、今や可汗の官兵と諸汗の部下と各地に相闘き、互に一勝一敗あり、而して勝も阿、敗も亦阿、損する所は終に阿なり、此れは是れ我阿非汗。

◎印度

印度は我印度なり、然も今は只た其地の東方に置かるゝあるのみ、印度の綿はマンチエスタ一の糸となり布となりて徒らに英國を富まし、印度の粟は深く東隣の人骨を削り去て英國の寶庫を肥す、而して印度の國人は天下の最貧平均每人一磅の資にだに中らず、即ち是れ我印度。

◎緬甸、東蒲塞、交趾、安南、東京、

緬甸、東蒲塞、交趾、安南、東京、其亡きや已に久し、暹羅の國王半腐の肺腑に生く、而も半島の一王國を擧げて、豈一人外務大臣あらざる歟、本年(二十五年)四月白耳義の一學士ローレン、マヤクミンを擧げて之に任せしが如き、西人は稱して改進黨といはん、實は是れ東方の恥辱、此れは是れ東方の暹羅。

◎支那

支那あり幸に稍や人意を強くす、然れども堂々たる東方の一大帝國を以て、何時か英國の掀簸に入り、同盟密約、英國に對するに英國に頼りて僅かに重きをなす、其内政如何を顧みれば、昨夏江南の變に次ぎて昨冬朔方の亂となり、朔方の亂始めて

平らげば、又台灣の叛を見る、台灣の叛近ぐる鎮まれば、福州に長江に今も復た民教の紛を聞く、

彼れ、彼れの如き大國を有しながらバミール事件に何の議を持つるや、露國も其權利を主張し、英國も其權利を固執するに、支那は己れの威重を思はず、屏氣降意、英國の權利を認むるに甘んず、夫の西人は姿然悍然、江南に入り、江北に入り、滿州に入り、西藏に入り、燕京に眠り、成都に夢みるに、支那人は則ち桑港に逐はれ、バンクペーに逐はれ、メルボルンに斥けられ、マニラに困めらる、航通自在、四海昌平、世は文明を唱へて、人は博愛を口にするの世界に、天に跼して地に躡す、嗚呼是れ我東方の大帝國。

◎朝鮮

朝鮮亦我が東方の一國、其國勢將た如何と顧みれば、搖々靡々、内に一定の順序なく、外に一國の舉動なく、政府は族戚の紛争に遑なく、人民は收斂の政制に疲れ、北には威鏡道亂れ、西には平安道安からず、遠世凱近ころ版來すれば、此の一少年

に滿朝震動し、今は又た國の大老李昆應將に害に遭はんとすと云ふ、此れ亦た我が東方の一國。

七十八

◎西伯利亞

西伯利亞も亦東方に非ずや、而して之を環らして日本、朝鮮及び支那、手を拱して他人の事業、大兵備、大鐵道、大港灣、大拓殖日に就き月に進むを傍觀す。

◎日本

日本如何、日本如何、東方の勇武國、東方の先進國、長睡昏昏、且つ如何の夢をか結ぶ。

居蘇さして小唄きつむ女の子

○古白子を想ふ

散るが爲めに咲くか、咲くが爲めに散るか、散る何ぞ狂風妬雨の到るを待たんや、

散ること花、亂ること花、あはれ古骨の白きもの、いつしか野艸の青に埋められ、今は其余芳を稱する人だに無し、春風駘蕩、滔々たる世人は、盡く墨陀東蠶の花に酔い、一顧を此哀れなる芳骨を埋めし孤墳に與ふるものなし、噫

花守の散る時は寐てしまひけり

古 白

花はこれ詞人、花守はこれ世の人か、小夜更けし花守の枕の上に、風なくして一片の花は散りかゝりぬ、花守の夢はなほ胡蝶を追ふて、此落花の上に及ばさりき、

泥舟の泥に散りたるさくらかな

古 白

うき世の風に任せ、流るゝ水にまかする花は、麗はしき詩人の筆に上るも、泥舟の泥に散りこむ櫻に一滴の涙を灑く人稀なり

噫、面影橋のわたりに、鳥鳴くこと悲しげに、水流るゝ事愁しげなり、獨り杖を立て黄昏、橋畔を徘徊すれば、月靡ろに風寂し、空を飛ぶ星あり、しらす是れ魂魄の月界に飛ぶものなららんや。

七十九

○人和論

◎日本國民が處世の大策

試みに地球の全圖を繕ひて列國の形勢を視よ、禍機亂運紙面に滂渤たる者は東、方、亞、細、亞、に、あ、ら、ず、や、魯、英、侵、略、の、手、は、將、に、伸、ひ、て、相、搏、擊、せ、ん、と、す、電、光、石、花、機、は、髮、の、間、に、在、り、歐、州、各、國、の、勢、力、平、均、は、吾、人、の、恃、む、へ、き、所、に、あ、ら、さ、る、也、來、れ、日、本、國、民、國、民、は、何、等、の、大、經、綸、を、講、し、て、か、此、危、勢、に、處、す、へ、き、民、衆、の、多、寡、は、固、よ、り、以、て、強、弱、の、形、を、定、む、る、に、足、る、然、れ、と、も、終、に、四、千、万、の、人、口、に、加、ふ、る、の、術、な、き、を、如、何、せ、ん、國、富、の、厚、薄、は、固、よ、り、以、て、勝、敗、の、數、を、實、に、す、る、に、足、る、然、れ、と、も、終、に、三、万、方、里、の、外、に、出、て、さ、る、を、如、何、せ、ん、兵、士、の、訓、練、府、庫、の、充、實、固、よ、り、講、す、へ、き、な、り、知、ら、ず、東、洋、の、危、機、は、吾、人、國、民、に、此、の、餘、裕、を、與、ふ、る、や、否、や、を、然、ら、は、則、ち、日、本、國、民、か、處、世、の、大、策、は、其、れ、果、し、て、天、に、あ、る、耶、曰、く、人、に、あ、る、な、り。

軍隊の精練既に其爲すへき所を爲し、府庫の充實既に其講すへき所を講するの外は運命を昊天に附するの外、復た術策の講すへきものなきか如しと雖も、尙一事の以て大勢力大活氣の本源となすに足るものあり、 그리스列邦は此一事を用ゐてサラマイカの水戦にペルシヤの大敵を挫き、和蘭國民は此一事を用ゐて潮水の如く侵入し來る強盛の西班牙人を斥け、北米合衆國民は此一事を用ゐて強英の虐政を攘らひ、我弘安の勇戦は此一事を用ゐて蒙古の大寇を壓殺す、古來國民の興亡盛衰は常に此一事の上に係る、若し此一事にして乏しきあらば、山河の險、壘塞の固あるも之を用ゐる所なし、苟しくも此一事にして存立するあらんか、兒童走卒も國家の干城たらん、千載の英豪百万の貔貅を擁すと雖も、之を如何ともする事なきなり、今の時に當り日本國民か其恃むに足る者は唯此一事あるのみ、何ぞや國民の一和是れなり。

◎日本國民の現状を見よ

半夜燈前十年事

一時和雨上心頭

其れ然り、而して試に眼を回らして日本國民の現情を見よ、政略敏活ならざるにあ
らざるなり、學術隆盛ならざるにあらざるなり、法律完美ならざるにあらざるなり、
民衆勤勉ならざるにあらざるなり、國民は各々其才能智力を叩て此世に處すると雖
も、如何せん一致和合の精神に至りては、吾輩をして歎然たらしむるものあるを免
れざる事を。請ふ看よ政黨の名稱を掲げて黨援を募るものあり、其の名を問へば即
ち曰く何々主義なりと、其目的を問へば則ち曰く取て代るなりと、苟くも取て代ら
んと欲す、何事として爲さるあらんや。廊廟に蹠蹠して、政權を壟斷するものあ
り、猥りに寵榮を恃て富貴を貪り、藩閥を擁して賢路を塞く、彼等は其政權を保た
んが爲には豈一事の爲さるあらんや、此兩者は方今に於ける一大松明にして、而し
て其内部を見るも亦閥中閥あり、黨中黨あり、互に相猜疑し互に相排擠す、大猜忌
の衝突する所は則ち大波瀾をなし、小猜忌の抵摩する所は則ち小波瀾をなし、動搖
離合殆んど端倪すへからず、

◎無數の小人間に投して詐術を用ふ

公議政弊の下に縦横の略を試み、無頼の暴漢は隙に乗して其憤怒を漏し、言論の歸
結を定むるに獸力を以てせんとす、此に於てか信用措く所なく、公論施す所なきに
至らんとす、是れ果して國民の一和を得たりと云ふべきか、更に甚しきものあり、
國家百年の長計を定むるに當りて私利の消長を慮るものあり、議政の公權を利用し
て賄賂を貪ほるの徒あり、自家の聲譽を累さんことを恐れて故らに他人の處分に反
對するものあり、愛國者を裝ふて政友を賣るものあり、黃白を貪て噬嚙を逞ふする
ものあり、試みに彼等の心情を推盡せば、昔時アゼンス國の演説家か勁敵の厚賂に
酔ひ、其國是を潰亂したるか如きも怪むに足らざるなり、余輩は政黨離合の頻繁な
るを憂へず、政黨分争の激烈なるを患へず、何となれば、國是國論の上に於て其信
する所を異にするは免るゝを得ざる所なればなり。公に盡し私を忘るゝの人は、其
議論に於て侃々諤々執て動かさるの争を爲すありと雖も、國民の和合一致に於て些
の缺損となさしるなり、吾輩は政黨の分争離合を憂へずして、而して其姦情野心の
かくのことくなるを患ふ、此姦情野心は實に國民の一致和合を妨たくるの根本なれ

ばなり。

◎盛と衰と興と亡とは人和の如何に在り

苟も姦情野心の政治家の心裡に存する間は、純正の國是は何の處にか之を定めん、和合一致の大勢力何れの日か之を振ふあらんや、東洋の危機目前に在るは國民誰か之を知らざらん、政事家誰か之を慮らざらん、而して區々の政權を以て己を榮せんことを謀り、唯其位を失はんことを是れ憂へ、唯其位を得ざらんことを是れ憂ふ、東洋の危機も彼等の慾望を畏縮せしむるに足らざる邪、暴張天を涵す侵略の大潮も彼等の視覺に感せざるか、近時の事何そ彼のフイリツアか兵革に起臥して軍營に霜雪の難を嘗むるに際し、アゼンス人か悠長の演説に日を消したるの光景に類するの甚しきや。嗚呼方今日本國民が其威名を列國に輝すと、屈辱を白人に受くると盛と衰と興と亡との二端は、國民一和國是を定むるの如何に在り、國民一和の大因とは何ぞ、政事家たるもの、私を斥け公に徇ひ、河漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴し、鶴々乎として尙ふ可らざる一片愛國の精誠を養ふこと是れなり。

沈香亭畔玉樓榭

疊々春山捧翠螺

何似江南天水碧

周娘親爲剪宮羅

明 王世貞



○賢能の辨

能者とは何そや、技能材藝有る者を謂ふ、更に一步を進めて之を謂へば、技能材藝を賣りて身を養ひ活を計る者の稱なり。故に經濟學者の或るものは、之を物質的に解釋して一の財産と謂ひ、或は富の一種と謂ふ。又邦俗にては、物事に堪能ある人物を指して重寶なる人と謂ふ。皆それ表裏正側より能者を見たる批說にして、兎に角に世間欠く可からざるの需用品なり。若し夫れ類例して之を擧れば、家を建て倉を造り得るの大工も能者なり、壁を塗り得る左官も能者なり、屋根を葺き得るの屋根屋も能者なり、庭を作り得るの豪腕師も亦能者なり、其外鐵を鍛ひ得る所の鍛冶屋も、菓子を製し得る所の菓子屋も、マッチ筥を張り得るも、絹ハンケチを縫ひ得るも、亦皆能者ならざるは無し。更に此等の下等手技の外、心手兩能を同時に働かせ得る所の能者にては、機械師も能者なり、造家匠も能者なり、畫工彫刻家美術家書物を拵へる人、小説を造る人、亦皆能者と稱せざるを得ず。又更に心の働きを主としたる能者にしては、書記官秘書官等の伶俐なる人、或は相場師或は政治家、或

は俳優狂言師、是亦能者ならざるは無し。此の他に口を働す所の演説かたり、淨瑠璃かたり、話し家、講釋師、大鼓持ち等、凡そ能者の部類に入る可き者數へて盡す可からざるなり。而して皆之を用つて世に立つことを得、之に依りて活を計ることを得、技能材藝亦實に輕んす可からざる者なる哉、而して亦爰に世間能者の需用の尠少ならざるを知るに足る可きなり。

賢者とは何そや、是れ頗る知り難し、否な知り難きに非ず、見難きなり。更に語を換へて之を言へば、世間多數人の眼睛中に多く映出せざる者なり。今類例を援めて之を論斷せんと欲するも、夫れ將た何の處に向つて之を取らん、滔々たる今日の天下、能者を以て充たされたり。自ら一技一能を挾んで售を權門勢家に求むる者、居常多く之を見る。然れども未だ自ら賢を以て世に稱し時に鳴る者有るを聞かず。然れば則ち世間實に賢者無き乎、或は之れ有るも能く見能く知る者無き乎、吾輩實に賢者の實際類例無きに苦しむ。

蓋し能者は職人の謂ひなり、又藝人の謂ひなり。世間に職人と藝人と無かる可から

さるは、必しも智者を待つて而して後に知らざるなり、故に今日の天下到る處に能者を見る、是れ實に天下の需に應じて出て來る者乎、若しも此理を以て推論すれば、今日の天下か賢者に需むる無きに因ると謂はざる可からず、嗚呼今日の天下は職人と藝人か獨占獨有する所の天下乎。此くの如くにして猶能く和緝諧寧、駸乎として文化の高域に躋るを得る乎、吾輩未だ其の可なることを知らざるなり。

人間社會の事物益々機械的に仕組まれ、經濟政治等日常衣食と俱に欠く可からざるの器具、皆精巧微妙の働きを委するの今日に於て、全く技能材藝を有せざる律義一偏の好人物を容るゝ能はざるは固より無論、故に苟も世に處し身を立てんと欲する者は、必ず學問修練を心掛けざる可からず、技能材藝亦決して却けて罵斥す可きに非ず、然れども人間靈活の心意は、實に死機械の力の及はざる所ありて、必や他の靈機活具に需むる所無きこと能はず、故に或は技能材藝に欠く所あるも、若し他の律義令徳の了簡に富める人物あらば、之を推して以て社會徳義の準繩たらしむるは亦是れ治世の要たるなり、然らば則ち社會の何れの部局にか廣濶なる門戸を開き

置きて、豫め此等の人士を容るゝの地を設くるの止むを得ざるを見る可きなり、想ふに今日の天下徒に能物を見て賢名を聞かざる所以の者、亦或は此の設け無きに因らずんばならず、吾輩の見る所を以てすれば、彼の宮中の天地こそは實に賢者の府たる可き所の處に非ずや、紫闕の門牆は千仞なり、吾輩の能く窺ひ知り得る所に非ず、目下既に群賢の肩を比へ、衆徳の星聚する者無きに非ざる可きも、猶此上にも意を用ゐて職人藝人の侵す所と爲さしめざるこそ肝要なれ、想ふに宮中の天地にては毛頭毫末の技能材藝を要せず、至粹純一の律義令徳を集れば足れり、否な獨り技能材藝の職人風藝人氣を要せざるのみに非ず、實に務めて之を斥外せざる可からざるに非ずや、然らざれば則ち侏儒俳優に類する卑陋の徒は、或は此の門戸よりして侵入し來り、動もすれば宮中神靈の靈氣を墮すの憂を醸す可し、豈に戒めざる可けんや。田獵に巧みなるも一技なり、弋射に妙なるも一能なり、其他遊戯道樂に關する瑣材雜藝を抱ける者にして、皆之を執りて宮門に干す者有るに至らば、決して喜ぶ可きの事に非ず、それ宜く當局の司の深く意を用ふべき所なりとす、蓋し獨り夫

の山岡鐵舟翁亦或は吾輩の狂言を尤めざる可し。

山月絳中庭

幽人酒初醒

不是怯清寒

愁腸梅花泥



○雪に哭し雪に泣く

二月四日大に雪る夜に入り猶ほ已まず、近來未だ嘗て見ざるところ、古來丈夫雪の爲めに泣きたる者幾何ぞ、古今男子雪に哭したるもの幾何ぞ、彼等は既に雪の爲めに泣く、故に雪の爲めに紛々として消滅して俯仰天地に作ぢず、後人亦た寒窓雪を仰ぎ之を想ふて已まず、彼等は爛熳百花に感を深うし、落日秋風に思を厚ふし、既に雪に哭し既に雪に哭す、一生一死一存一亡一盛一衰一落一枯一骨一皮一鬼一火夙夜に警す、而して猶ほ朗々詠々天と爲り龍と爲り月と爲り艸と爲る、男子の意氣誠に此の如くなりしと聞く、二月四日大に雪る、雪の爲めに哭するものは無くして破軒衣を得ざるものはあり、雪の爲めに泣く者は無くして玉樓一世の春を握にする者はあり、天下の光景を察すれば、百年悠々華を夢み、蝶を夢みるの紅顔子は唯だ非業の最後を遂げて敢果なく消ゆること雪後の雪の春嵐に融くるか如し、春千年秋又千年、可憐の美少年は、唯だ無殘の毒刃に罹りて淺間敷く散り行くこと猶ほ雪の一枝に在る僅かに一霎時なるか如し。識者は猶ほ嘗て雪に哭し雪に泣くの丈夫に全き

を賣むるに天地万物を、一白にし、一幻にし、一面にし、一齊にするものは雪なりと云ひて一時の奇に戀々し、万世の常に反らざるの非を以てしたりとかや、斯る親切の識者をして、今の天下が何の頓着なき若者を驅りて、惡火叢中に投するの酷あるを觀せしめざるはまだしものことなり

白かへも今日の雪には黒くなり

江郷臘盡欲回春
雪共春來又浹旬
鏡鏡漸懸背髮改
對床猶喜白髮新
地爐溫暖添歸火
流艇蕭條罷釣綸
何日凍消梅意動
携排賈酒趁芳辰



○壯士芝居、書生役者

◎世一種の動物あり

方今の世一種の動物あり、其の物たるや耳目口鼻あり、以て聽き以て視以て語り以て嗅く、恰も人と異なるなし、手足あり以て握し以て歩す、亦た恰も人と異らず、只資なく産なく職なく才なく學なく慮なく、人の爲めに人を嚇し、人の爲めに人を脅かし、人の爲めに人を撲ち、人の爲めに人を害し、人の爲めに人を傷け、以て此世に棲息す、試みに一片の黄金を取つて其群に投すれば以て狗とならしむべく、以て狐とならしむべく、以て狸とならしむべく、以て鼠とならしむべし、或は虎の如く咆吼せしむべく、或は猫の如く佞順ならしむべし、此物や其住處を定めず時として政界に出没し時として商界に隠現し又時としては梨園に飛揚す、此動物世之を稱して壯士と謂ふ、壯士なるもの果して此の如きか、

◎古壯士

天下の英雄と天下の豪傑と一堂の上に置酒高會す、堂下の兵は戈を把て立ち、堂上

の人は劔を抜て舞ふ、老臣目を張り、玉珠屐々擧ぐ、一室の内英雄の首は豪傑の手に懸る、進退爲すなく活殺他に任す、巨人あり突如盾を持して入る、目皆悉く裂け、毛髮皆な堅つ斗酒以て豪傑の膽を呑み、疑肩以て老臣の心を奪ふ、是れ豈に樊會の勇に非ずや、樊會は壯士なり、壯士須らく此勇氣なかる可らず、初め詐りて刑人となりて人の廁を塗り、意を遂げずして又た身に漆して瘡となり、炭を呑んで啞となり、又た意を遂げずして空しく衣を裂て死す、之を問へば則ち曰く彼れ國士を以て我を遇す我れ故に國士を以て之に報ずるなりと、是れ豈に豫讓の義に非ずや、豫讓は壯士なり、壯士須らく此義氣なかる可からず、予は乃ち市井の人鼓刀の屬にして貴人千里を遠しとせずして車騎を枉く、是れ我を知るものなり、况んや母君今已に亡し、是れ身を以て許さる可らずと、獨り劔に仗りて府に至り人の爲めに仇を刺して身は自ら面を皮き眼を抉りて死す、是れ豈に攝政の俠に非ずや、攝政は壯士なり、壯士須からく此俠氣なかる可らず、天下の利匕首を挾んで長驅西の方秦に入り、赤車白馬相送て易水に到るや、漸離筑を擊つて歌ひ悲聲路人を感ず、其の風蕭々兮

易水寒、壯士一去又不還を歌ふや白虹日を貫き國人皆恐る、是れ豈に刑軻の意氣に非ずや、刑軻は壯士なり、壯士須らく此の意氣なかる可らず、古より壯士の名を價すべきものは斯の如し

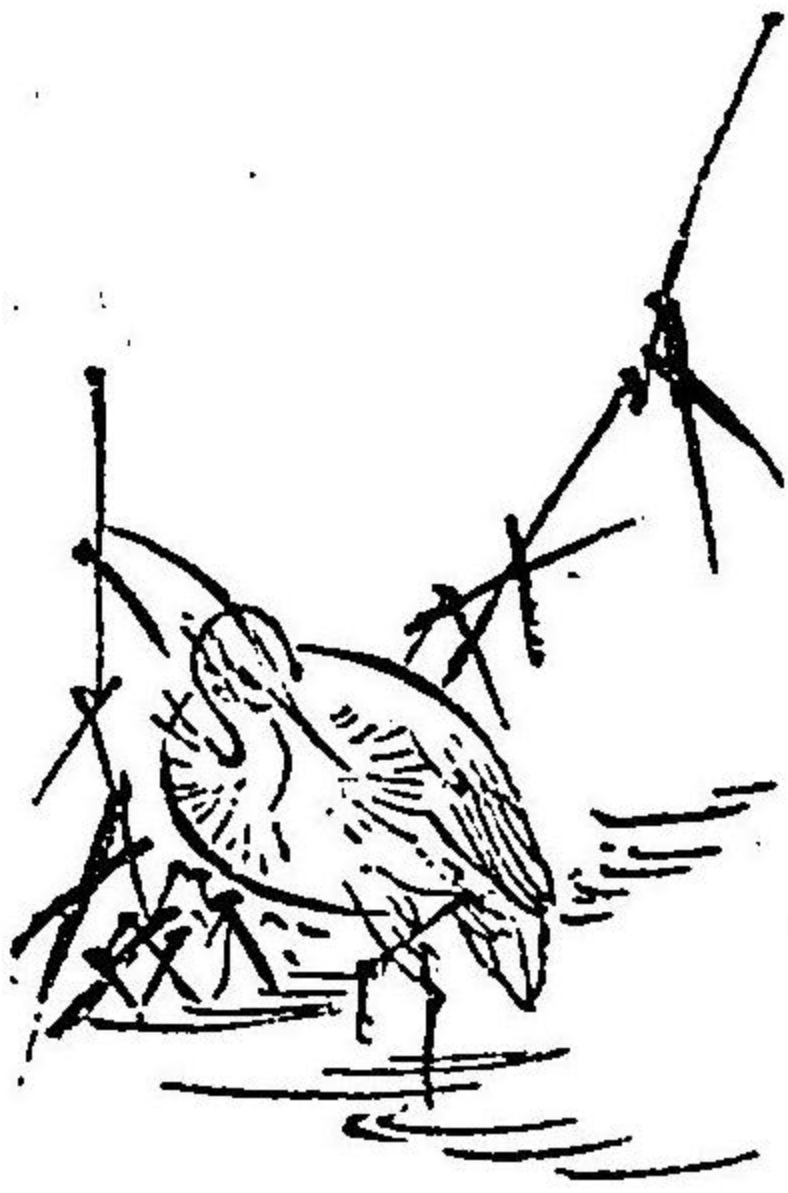
◎今の壯士

壯士果して此くの如くならざる可らずとせば、今の所謂壯士なるものは是れ名を盗むものなり、名なるものは實の實なり、名分亂るゝに及んで天下亂れ、天下亂るゝに及んで名分亦亂る、名分の正さる可らざる所以のもの實に此に在り、古人故に曰く似て非なる者を惡む、と今の壯士なるものは似て非なる者に非ずや、然れども天下の不義不仁を爲して、産を作すもの名けて之を紳士紳商と謂ふを見よ、天下の無禮非理を行ふて人を屈するもの名けて之を英雄豪傑と謂ふを見よ、人の説を聞て己れの説となし人の論を取つて己れの論となし厚顔憚らざるもの之を稱して學者と謂ふを見よ、人の爲めに髯を拂ひ、人の爲めに腰を折り、因循卑屈僅に身を保つもの之を稱して道德家と謂ふを見よ、人を賣り己れを欺くもの稱して之を政治

家と謂ふを見よ、似て非なるもの豈に獨り壯士のみならんや、吾輩は寧ろ壯士の邪念悪心なくして思想單純之を導けば以て正路に反るの望あるを愛す、何んとなれば紳士紳商は導く可らず、英雄豪傑は教ふ可らず、學者は誘ふ可からず、道德家は、動かす可らず、而して政治家は化す可からざればなり、荆棘は或は取つて薪と爲すべし、朽木糞土は遂に如何ともすべからざるなり、况んや天下の事必らずしも悉く法律を以て律すべからざるものありて壯士なるものは實に此の法律以外の一種の制裁力たる一分子となる事あればなり

数枝紅蘆吟

一片白雲孤



◎壯士に似て更らに非なるもの

似て非なる壯士は思むものは多し、或者は力を警官に借りて之を獄にし、或者は正當防衛の十字軍を張りて之を攻撃す、壯士を思むはよし、壯士に思まるゝは尙ほ更らによし、然れども之を壯士に比して尙ほ更らに思むべく厭ふべく憎むべきものあるを奈何、而して毫も之を思まざるを奈何、更に思むべきものとは何ぞ曰く似て非なる壯士に似て更らに非なるものなり、似て非なるものに似て更に非なるものとは何ぞ、曰く壯士芝居なり、自稱善生芝居なり

吾輩固と劇道に暗しと雖ども新聞の教ゆる所、巷間の傳ふる所を以てすれば、今の俳優なるものは一二老成のものを除くの外は所謂る河原乞食の稍々進化したるものにして皆な藝を售り色を鬻ぐの徒なり、其卑陋猥褻風を壞り、俗を歌り、教を害し、淫を誨ふるの迹、顯然として掩ふ可らず、曾て俳優を擧げて教導職と爲したることあり是れ歐化主義の流潮のみ、名は勸善懲惡と云ふ而して實は勸惡誨淫たるを知らざるなり、爰に於て衣冠して淫を誨ゆるの奇觀を生ず、此の一時の誤見は數年の經

驗に依つて廢せられたりしが、演藝矯風會なるものは別に一種の流潮に浮されて起る、矯風の舉固より美事に屬す、然れども今の演劇の世を害するものは演劇其物に非ずして俳優其物にあり、俳優の弊を矯むるを知らずして只々演劇其物を矯めんと欲す、是れ猶ほ尋を枉けて尺を直ふするもの類なり、表面の矯風或は得べし而して冥々の裏に悪感化する弊習は依然として存す、夫れ演劇の社會に於けるは猶ほ小説の社會に於けるが如し、或る一方より説けは甚た善く、或る一部より觀れば甚だ悪しく、其善者は頗る善く、其悪者は最も悪し、而して我れ未だ一の善者を見ず、當今の俳優なるもの概ね此の如し、而して壯士なるもの果して俳優たるものある乎、是れ壯士は天下の一大至毒物なり、人を傷け、人を撲つの側ら又た人に淫を誨へ世の風を亂す、暴言亂行既に害あり、加ふるに淫行褻言を以てす、一大至毒物に非ずして何ぞや

◎所謂壯士、書生と俳優なるもの

壯士と云ひ書生と云ものは皆な武骨なるものなり、俳優なるものは優しきものなり、

一は蓬頭垢面なり、一は粉面脂顔なり、一は切齒扼腕を事とし一は巧言令色を業とす、一は亂暴にして一は便僻なり、一は粗服して一は輕裘す、一は麥藁帽子を頂き一は山高帽子を頂く、一はホーの木の高木履を引ずり一は疊付の駒下駄を鳴らす、一は剛者にして一は柔者なり、其性行全然相反す、而して此剛柔を打して一丸と爲すもの之を書生芝居と云ふ、吾輩爰に於て私かに壯士芝居、書生芝居に疑ふ所あり

◎我等益々疑ふ所あり

書生芝居の出づるや、府下大小の諸新聞之を筆にし、團菊の老優亦た之を觀る、曰く技藝巧妙なり、曰く動作游滑なり、曰く臺詞流暢なり、曰く裝束適切なりと劇評日々紙上の一半を塞ぎ、肖像刻まれて往々紙上に出づ、爰に於て女往き、男往き、老往き、府下百萬殆んど其熱に浮ぶ、而して青年書生往々之を學ひて都人の好遇を得んと欲する者あるに至る、吾輩は是に於て益々疑ふ所あり、吾輩の疑は愈々出て、愈々深く益々進んで益々長し、夫の下部俳優は果して壯士なるか果して書生なるかを究め遂に左の報告を紙上に公にせざる可からざるに至れり

似て非なるものに似て非なるものとは之を是れ謂ふなり(報告の川上一座表容)
 由是觀之壯士芝居の十九人中其所謂壯士とも稱し得べきものは只だ僅かに四人あるのみ、他は所謂河原乞食のみ、河原乞食の最劣なるもののみ、所謂馬脚のみ、而して尙ほ且つ壯士芝居と云ひ、書生芝居と云ふ、是れ豈に壯士の假面を被て世を欺くものに非すや、是れ豈に書生の名を盗んで人を偽るものに非すや、名は之を正さる可らず、而して今や此の如し、殊に此等一輩の徒が近來の舉動を見よ、其猥行褻言實に言ふに忍びざる者あり、彼等は實に書生の名を盗んで人を偽るのみに非ざるなり而して實に頹風の事を爲すなり、彼等は實に壯士の假面を被て世を欺くのみならず而して實に誨淫の業を行へるなり、壯士淫を誨へて人の子を誤り、書生風を亂して世道を害す、名分の亂るゝ何ぞ一に此に至るや、嗚呼河原乞食の壯士、馬脚の書生、之を似て非なるものと謂はずんば天下何れの處にか似而非者ある。

五街春色夕陽天、

嬌女如花滿綺筵、

指穴低門親客醉、

笑挑燈火待郎眠、

嚶鳴靜處弦歌罷、

嗒吼譁時笑語連、

縱是羅敷有夫在、

多情不語使君前、



○櫻花軍を興せ

◎天成の美性己に地を拂ひたるか

人心の萎靡するや久しい哉、一國の人皆死するが如し、内は有司の權勢に畏れ、外は隣國の恫喝に恐る、七尺の男兒首を屈して骨なきが如く、都邑の人士嬌を粧ひて婦人に似たり、人々三五相會して事を議すれば則ち曰く、其利は如何、其害は如何と、之を朝に視れば固より然り、之を野に察するも亦又然り、其間一人の起ちて義に斷する者あると稀なり、甚たしい哉神州人の沮喪挫敗沈滞朽腐せるや。宗廟の神威豈既に天に盡きたるか、天成の美性豈既に地を拂ひたるか。

生や我の欲する所、義も亦我の欲する所なり、兩つのも兼ねることを得べからずば、寧ろ生を捨て、義を取らんものなり、是れ我神州男兒の頼みて以て命となし、所なり、心となし、所なり、神州上下三千載金匱の未だ嘗て缺くる所あらざりしもの、只た此一片至誠の誠神ありしに由らざるなし、而して今や取捨其地を易へたり、苟安生を偷む者は智として崇せられ、慷慨義に赴く者は愚として擯せらる、鼎鑄は

輕たり、羽毛は重たり、於戯吁嗟邦家の前途其れ之を奈何。

惟ふに朝鮮、支那の羈轡を脱し、獨立の地位を得たりしもの、唯だ我義これに由らずや、誘掖輔翼其舊染を一新せしめたる、唯だ我義之れに由らずや、椎髻人種たる者は理應さに我徳に報ひ、情當に我恩に答ふべかるべし、而して蠻夷性を成し、鬼虺俗を爲し、朝たに我同胞を殺し、夕べに我同胞を害し、暴戻恣睢窮極あることなし、吾人同胞の行々慘禍に罹るを看て、保護の忽にす可からざる、嚴責の緩にす可からざるを、政府に苦言し、や一再にして足らず、而して彼や視て河漢の言となし、未だ曾て意に經せず、政府者彼の如くして一般も亦甚た之を尤めず、忽ち見る「長崎縣の漁民去十三日（二十九年三月）慶尙道寧海に於て暴徒の襲撃を受け、十五人は其毒刃矢石の下に屠殺せられ、九人は重傷を負ひたり」との報到れるを、蠻奴の惡むべきは言を待たず、其蠻行を長せしめしもの抑も誰の尤責そや。

◎誰か一片相憐の情なからん

今や半嶋に在留せる一万有餘の同胞は、不測の禍害に逼迫せり、五内に有機の血液

循環するあらば、誰か一片相憐の情を起さらんや、而して政府彼の如く、一般彼の如し、豈大日本帝國なるものは行屍走肉を集めて之を成せるものか、われ謂らく何其れぞ然らん、何其れぞ然らん、國人の惨害を視て保するを思はず、同胞の屠戮に遭いて憤るを知らざる者は、今の在朝顯貴の衣冠と在野上層の紳董のみ八州を顧みれば美なる山河は依然として在り、富嶽今に於て其崇大を改めず、淡海今に於て其の瑩徹を易へざれば、三千年來繼紹の義性仁血豈八州の野に留らざるの理あらんや。

◎我れ野の人士に議る

われ野の人士に議る、政府者頼むに足らず、紳董者倚るに足らず、半嶋に在留せる一万餘の生命は今や繫りて諸君の高義如何に在るのみ、諸君にして起ちて之を救はずば、彼や骨肉を分つの子女は、擧げて一往不還の鬼とならん、昔は回教の徒小亞細亞に蟠踞し、ゼルザレムの聖地を瀆し、基督教民を惨害す、歐州列國の民期せずして十字軍を起し、聖地を垂亡に救ひて教民を既死に回す、天下今に至るまで噴々

として歐州人の義俠を稱せざるは無し、謂ふと勿れ半嶋は路遠しと、十字軍は歐の西部より小亞細亞まで遙々千里の路程を重ねぬ、謂ふと勿れ半嶋は海峡を隔つと、十字軍は亦たダーダニスの海峡を渡れり、又謂ふと勿れ身は壯丁に非ずと、彼の十字軍には妙齡花の如き小婦も糧食を負いて之に従ひ、頽齒雪を戴く老翁も長戈を擔ひて之に赴きしことを、今ま諸君にして彼同胞を救はずば日本國民が世界に有すべき立脚の好地は之れより去らん、日本國民は歐州國民の義俠に似ずと世界は公定せん。

一家仁なれば一國仁に興る、カリパルチー鉄を孤島に投ずれば、伊太利の風雲悉く仁に興りしに非ずや、われ重ねて野の人士に議る、有血の諸君は老と無く少となく男と無く女と無く農と無く士と無く工と無く、傳家の劍を帯び、秘藏の銃を擔ひ、朝日に匂ふ櫻花の章をかざし、勃として茲に『櫻花の軍』を興し行きて彼半島の同胞を救へよや。

◎櫻花軍の第一勢

今の政府は自ら保民の防を怠りながら、條規の庶砦を結びて人民の容易に半島に入
 ることを禁止せり、又た半島在留領事に無限の特権を付與し置きて、恣まゝに邦人
 の追放を行へり、櫻花軍の第一務は先づ此前路に横はれる庶砦竹柵を廢撤して而る
 後、ち彼岸に進め、幸にして議會はあり、議會朽腐せりと謂ふとは雖ども、同胞の慘
 死を願ふまでには至らじ、下院に請ひて下院に議決し、上院に求めて上院に議決し、
 彼遮碍物を一掃して坦々たる大道を半島に開き、天の成せる美性の國民が發して爲
 せる万朶の櫻花軍をば釜山、仁川、京城、元山同胞の在りと在らゆる地に進め、同
 胞を九死の裏より救ふべし、刻や刻、再々雲の如く慘禍は迫れり、八州有血の君子
 其れ躊躇すること勿れ



○蟹時代

昔者梵王、蜘蛛に其の欲する所を問ふ、蜘蛛曰く願くは軀幹を大にし堅甲を被りて
 天下に横行するを得んと、言聽かれ、立どころに身體膨脹し、二螯八足を張りて左
 右を睨す、則ち睨すと雖ども、内既に已に空、これ蟹族の先祖たりといふ。彼の蜘蛛
 や徒らに形を壯にせんとし、而して實の伴はんことを慮らず、漸く志を達するに
 及び、却て昆虫の嘲笑する所と爲る、痴なりしと謂ふべし、無腸公子、利鉗尖爪あり
 りと雖ども、其れ竟に何をか爲すべき。

今世は蟹時代なり、何事も殻がちと見ゆ、昨年の今頃は臥薪嘗膽の聲海内に涌き、
 極力戦後經營に務め、以て歐州の大國に當るべしと爲し、一年後の今日何の感
 ありとかなす、國庫の出入億を越へ、軍備の量數舊に倍し、而て民衆は依然として故
 態に安んじ、干渉は國際の常、露の強を以て干渉に苦めらるゝ管に一再のみならず
 しとし、臥薪嘗膽は殻ばかり、戦後經營も殻ばかりと爲りにけり。論功行賞甚だ盛、
 而して人〇以て榮〇とせず、賞篤〇くして尙ほ沙上に偶語する者〇擧げて數〇ふべからず、行

賞も殺なりけり、官命の事業績々興らんとすれども、結果の如何は頗る危むへく、一の製鐵所其の人を得るを難んじ、鐵管事件の以て前途の測り易からざるを想像せらる、教育の隆盛を求め、大學の増加を要し、而して準備は至て姑息を極む、事に堪ふる者の慤き以て知るべしとす。畢竟するに計畫は概ね殺のいかめしきを貴び、精神ありと雖ども、遲鈍なること蟹の如く、行くと雖も、直行するに由なき者。何等の國民にても、戦勝てば意氣熾盛、所謂戦後の何々勃然として興るなり、我が國民は新たに覇を東洋に唱へる者、而して意氣の揚るなきは何の爲めぞ、三國干渉の爲めに戦勝を完くする能はざりしとせば、之が局に當りし者皆全功を以て賞せられたるを奈何すべき、政府が議會に名數を制し、欲するとして得られざるなきを以て國民の意を得たりとせば、國民は當さに大に起つべき筈、而して絶へて奮はざるは其れ何の爲めぞ、人民一般に精神に乏しく、國家の事は政府之を爲す我は關せず、政府は是なるも非なるも我れ亦た關せずといふもの、如し、悪る悟りに悟れるなり、莊子云ふ浸く假て予の右臂を化して以て彈と爲さば、予因て以て鵲炙を求めん、浸く假て予の尻を化して以て輪となし、神を以て馬と爲さば予因て之に乗らん、豈更に駕せんやと、今の人は滔々として莊子の徒か、斯くして國家の形貌を壯にす、果して能く外侮を禦ぎ得べきか、蟹を立て、行く、自ら以て威ありとせん、而も蒼蠅其の背に止りて其の意氣地なきを嗤ふべし、天然具八足、戈甲宛軍裝、本是無腸子、横行也不妨、蟹や憐れむべきのみ。

若し今の儘にて過ぎ行かば、國は無腸國と爲るべし、砲臺を控へ軍艦を泛べ、百万の兵あるも、唯だ形を具ふるのみ、國民は精神の有るなきなり、支那人勝報を得則ち雀躍して官軍大勝を叫び、敗報を得、則ち深く悲む所あり、而も悲喜共に一時に止り、國と俱に供にするの念に切ならず、是れ墳墓の地を敬重しながら、度々外人に犯さるゝ所以とす。我が國民は太だ愛國心に富むに似たれども、戦後の景況を以て察すれば必らずしも特むべからざる所あり、餘りに運に安んじ餘りに強に捲かれ易し、順境に銳進するも、逆境に或は早く屈撓せんか、サンステファンを引て自から慰むるに至つては洵に澹泊に過ぎたりとせざらんや。朝鮮より退て、以て後圖の

爲めと稱せば、又他より退て後圖の爲めと稱するに妨げなし、後圖の爲め、後圖の爲めといふは支那の執政官が憂を遣るの慣行なりき、我れ亦た逆境に臨みて或は之に類するありとするか、民人戦後の情状、頗る好みす可からず、我れ其れ此の如くして過ぎ行くべきか。

物極れば必らず變ず、蟹時代の極らんとするは、伊藤侯の絶頂に達するを觀て知るべし、侯は群蟹の首領、外剛にして内柔なる侯の如き少し、今や侯方さに得意満志の時、時代の變ずるも亦蓋し遠きに在らざるべし。阿房の成る、楚人一炬して焦土とせり、小錦の横綱を張る敢なく京の里に挫かる、根幹緋唄せる情弊内閣、或は意外に動搖せんか、其の動搖するは、國民が新たに生氣を得るの禎祥なり、氣力ある者其れ進んで爲す所あれ、正面より推して効なくば、更らに側面より打て、又更らに背後より打て、若し終に効なくば、嗟呼國運の茲に究せる也。

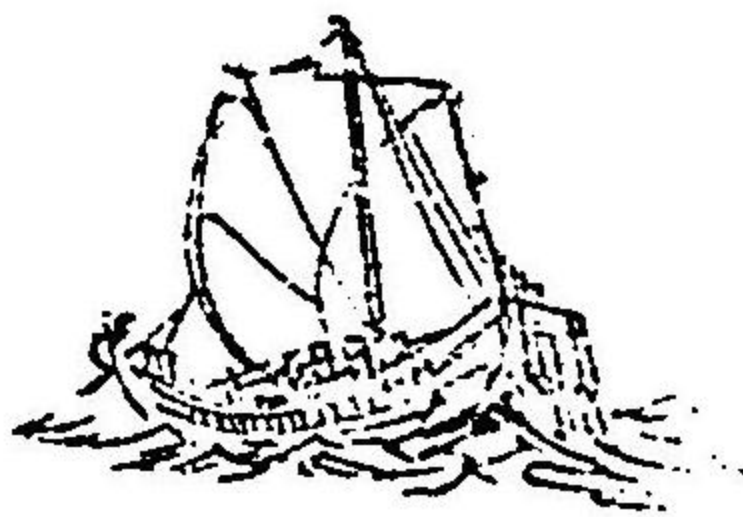


雨餘芳草欲成煙

花落新林哭杜鵑

遊跡天涯當未遍

東風又上滄江船



○學者有何用

世勢の趨向や其の初め甚だ微にして知り易からず、中ごろにして漸く大を加ふるや既に凡人の得て抗すべからざるに至る。其極に達するに及んでは、遼勃として山を撼すの風と爲り澎湃として海を醜すの潮となり、一國の宰相賞罰黜陟の權ある者と雖ども猶ほ之に逆ふ能はざるなり。三軍の將帥生殺擒縱の威ある者と雖ども猶ほ之を回す能はざるなり。况んや滔々として其間に漂流せらるゝもの徒らに手を揚げ足を動かして自から煩悶するあるのみ、風潮の勢亦た甚はた恐るべからずや。世勢の風潮は一種激烈の流行病なり、流行の及ぶ所は村落市井の間より、以て朝廷の上に至る、人々皆な其の熱に感じて狂奔痴走し、嘗て自ら身の流行病に罹ることを知るものあらざるなり、縱令ひ之を知るあるも亦た自ら離脱する所以の道を解せざるなり。此の時に在て能く之れが治療豫防の任に當ることは、之を宰相の權に望む可からず、之を將帥の威に望む可からず、又た之を君王の尊に望む可からず、其の任に當る者は獨り學者あるのみ、野蠻の民は風潮に驅られて破滅するに終る、文明の國

は風潮の勢力を回へして以て能く破滅を免る、其差は只た學者の存する、否とに在るのみ、豈他あらんや。

今や博士の數は多し、我が國決して學者の乏しきを憂へざるなり、學者決して乏しきにあらず、唯た學者の本分未だ明かならざること是れ憂ふべし、博士號にして若し俗學の稱たらば、吾輩は言はざるなり、苟も碩學の稱たりとせば吾輩之に學者の任を望まざるを得ず、今や僧侶にして俗行ある既に非なり、學者にして滔々者流と共に狂奔痴走する、世道人心其れ何に依りてか衷を折すべき。學者自ら悔ること斯の如し、世人亦た學者を視ること幕府時代の儒生醫師を視るか如く、往々將に之を卑みて夫の僧名俗行の徒と同じくせんとす、彼れ自から碩學を以て居り博士の稱號を以て世に誇る、而して其行動を見れば殆んど權門功家の走狗たるを甘んじ、所謂御用商人一輩の徒と共に名塵利埃の間に馳逐して以て自ら得たりとなす、焉んぞ社會の師表、世道人心の中心たるに在らんや、吾輩は博士たる人々の其の名節を失ふを恐れずと雖ども社會風潮の其の堤防を失ふことを憂ふ、堤防なければ則ち堤防

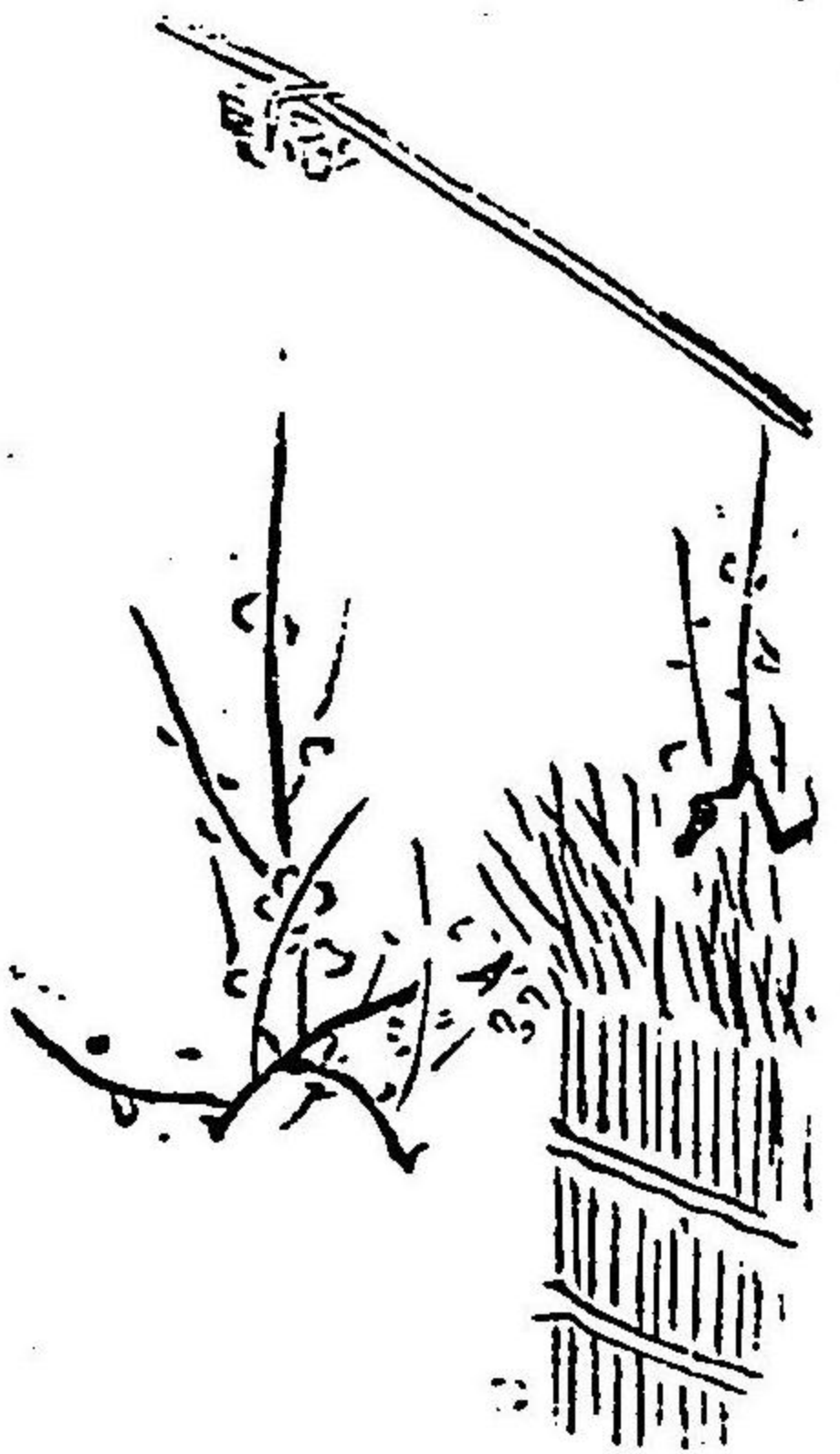
を築かん、學者なければ則ち學者を以て自任する者は出でん、空名を擁して世を欺く勿れ。

堂々たる博士にして一候補者の爲めに推撰演説を爲す者あり、堂々たる博士にして自から候補者と爲り俗士と名を争ふ者あり、而して彼れ其の學者たるの功績に至りては寥々聞く所あらざるなり、博士果して碩學の名稱なるか、吾輩豈に黙して之を見るべけんや。立憲政體の近狀、選舉競争の現況、共に學者をして其の將來を講究せしむるの價あり、國家の基礎と社會の組織とは我れに於て能く歐米政治を完全に受容することを得べきや、斯る深遠の疑問は功利に關係なき學者にあらざれば能く之を解釋するものなきなり、彼れ博士なる者は之を遺して顧みず、反つて自ら講究資料の中に混入するか如し。一國の宰相、三軍の將帥、其の權威の赫々たるも學者の面前には復た何等の價値がある、文明の國に在りては君主の尊と雖ども學者猶ほ之をして自ら屈下せしむ、今の學者たるものは反て權家の走狗となりて其の功利心を幫助せんとす。世勢の風潮は凡人庸夫を漂蕩して一種の惡熱に感ぜしめ、世を擧

げて涸濁、事物の輕重を轉倒せしむ、學者の任は局外に超出して以て此の惡熱を冷却するの清泉と爲るに在るなり、夫の學者を以て自任するものは反つて此の風潮に乗じて惡熱を煽起するの狀あり、噫。

畢竟百年眞是夢

笑看寒月上梅花



◎ 交道

昔者大谷刑部は當世第一流の名士なり、其友石田治部が、諸侯を結んで徳川氏を滅さんと謀るに當て、刑部靈眼夙に治部の事成らざるを洞察し、之を諫む、治部可かず、乃ち治部を助けて、終に關ヶ原に戦死す、傳へて以て本邦の美談と爲す、夫れ必敗の勢を知て、必死の地に身を致す者は、固より刑部が肝膽を友に許すの俠骨より出つ、利害を離れ是非を脱して、而して一擲の秘味、死生存亡の上に存する者は、誠に交道の至純至潔、千古を動かす所以にして、眞正大丈夫の本懐なりとす、今の世、交道廢れて詐術獨り盛に、人々勢を見て且く相許す、堂々たる一國の名士、皆一個の心友有る莫し、何ぞ古人に愧ぢざる耶、

◎ 屈伸有時

玄雲龍の爲に興る、虺蜥の能く招く所に非ず、颯風虎の爲に發す、狐貉の能く致す所に非ず、是を以て大人命を受くる時は逸倫の士集まり、玉帛幽に求むれば則ち丘遠の俊起る、

◎ 虎耶鼠耶

議論滔々懸河の辯の如し、文藻彬彬々泉の湧くか如し、其舌以て人を罵り、其文以て世を嘲る、豈鑿々として聽くべからずや、是れ虎耶、一旦危機、卒然として起り、急雨烈風天裂け地動く、左支右吾、憐を乞ふに至る、是れ鼠耶、今や議會の議員、虎たらん乎、抑も亦鼠たらん耶、

◎ 雲冉冉水漫漫

革新の前に情實あり、革新の後に私欲あり、情實の雲冉冉、私欲の水漫漫たり、若し天下を規矩繩墨の末に律し、以て革新を謀らんと欲せば、青天白日の光、得て望むべからず、

◎ 一劍非將事

上に天なく、下に地なく、後に主なく、前に敵なし、一將の兵は狼の如く虎の如く、風の如く雨の如く、雷の如く霆の如く、震々冥々天下皆驚く、

◎ 春情

「暮雨朝雲幾日飯、如糸如露濕人衣」、方は是れ春色多情の事、惱殺す、幾多の才子ぞ、

●春雨

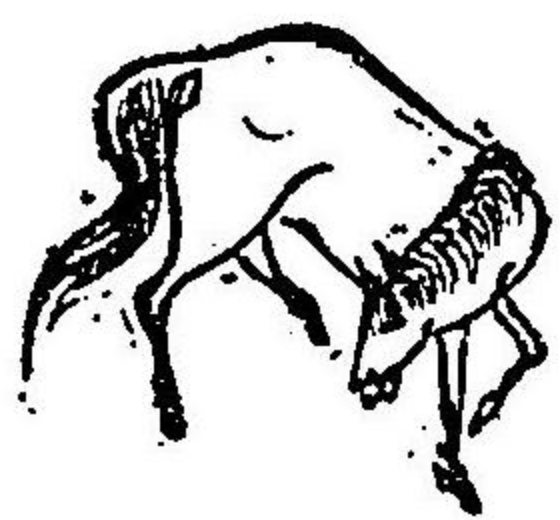
「王孫不祭如糸雨、罩斷春風一寸心」、細雨靡々、新柳依々たり、恨殺す志士の腸、

●英雄の本領

英雄豪傑の胸襟は、洒然脫然形の捉ふ可き莫く、影の追ふ可き莫し、而して其内毅然凜然一點犯す可からざるの本領有て存する者は、心を以て形を役し、實を取て名を亡し、小我を捨て、大我を收むればなり、淵嘿して雷聲し山立して海受する者は、無作の作已む可からざるの機と勢とに投する而已、

老去自知人佳境

一年勝似一年秋



○無絃琴(二節)

◎絶海の詩

龜田綾瀬竹溪集に序して曰く、藏經東流、高僧巨細、代作並出、闡揚宗風外、擒翰吐辭、其音高古、固非末學所能優劣也、弘安應永間、義堂絶海策彦師鍊諸老宿駢起、其風調格律、昔師晚唐、雖乏冲和之音沉澹之思、終是足稱宗工也、と其の皆晚唐を師とすと云ふは當らずと雖とも、而も四家を推崇するに於ては至れりと謂ふ可し、予淺陋目未だ策彦の集に寓せず、僅かに先輩の涉筆中に在りて其斷篇零章を覩るを得たるのみ、濟北蕉堅空華に於ては幸に初尾貫申して通讀するを得たり、故に畧は其躰格風調に於て窺ふ所あり、三家中竊かに絶海を推して其の首と爲す
絶海の集を蕉堅と曰ふ、篇什甚た多からず、體も亦盡く備はらず、明僧道衍の叙に曰く、禪師平生所爲詩凡若干篇、其徒等聞哀爲一帙と、則ち徒弟の見聞するに隨ひて哀錄せる所のもの、其の全集に非ざるを知る可し、衍の序に又云ふ、日本絶海禪師之於詩善鳴者也、禪師得詩之體裁、清婉峭雅、出於性情之正、雖晉唐休微之輩、

亦不能過之也、當時に推賞せらる、此の如くにして、全集今得て見る可からず、惜い哉。

蕉堅集收むる所の詩、體に於ては五律七律四言七絶に分つ、今左に七律のみにつきて數首を節録して同好の士と共に之を賞せんとす、其の細論に至りては他日を待つ、七言律詩開卷第一は即ち曰く、錢唐懷古、命題既に可なり、其の詩を讀むに及びては、案を拍ちて驚嘆、覺へず起舞せんと欲す、詩に曰く、

天目山崩炎連徂、	東南王氣委平蕪、	鼓聲震震三州地、	歌舞香消十里湖、
古殿重尋芳艸合、	諸陵何在斷雲孤、	百年江左風流盡、	小海空環舊板圖、
興亡一夢歲云徂、	葵麥春風久就蕪、	父老何心悲往事、	英雄有恨滿平湖、
朱崖未洗三軍血、	瀛國空歸六尺孤、	天下百年同戲劇、	燕人又獻督亢圖、

躰の正大は言を待たず、雄渾の氣、雋永の韻、亦た皆な概ぬ具はらざるなし、宋元諸家に在りても翻る希なるの文字、直ちに之れを唐の許渾劉滄等の集中に置く誰か得て其の非を辨ぜむ、特に前首に於て然るを見るなり、從來本朝古賢の詩を讀むに、

一兩句の佳なるもの無きに非ず、其の全篇を誦するに及びては、則ち殆んど格に入るものなし、是れ古今の通患、獨り絶海に於ては、篇々皆入格、而して其の妙各々絶頂に到る、前賢曾て絶海を推して本朝第一と爲す、吾れ其の諛言に非ざるを信ず、絶海の懷古に工みなるは、皆に錢唐の二律のみに止まらず、岳王墳にいたりては則ち曰く

深入朱僊臨北虜、	不知碧血透南州、	壠雲空映吳員廟、	湖水無期范蠡舟、
四將元勳俄寂々、	兩宮歸夢漫悠悠、	他年天墜人飛渡、	添得英雄万古愁、

古今此題の絶唱と稱する者、此躰に在ては元の趙猛瀨明の高啓を指す趙か作にいふ
 岳王墳上草離々、 秋日蒼涼石獸危、 南渡君臣輕社稷、 中原父老歎旌旗、
 英雄已死嗟何及、 天下中分遂不支、 莫向西湖歌此曲、 水光山色不勝悲、

清の論詩家に趙が作を舉て一二詆點せるものあり、然も竟に其傑作たるは失はず、高の作に曰ふ

大樹無枝向北風、	千年遺恨泣英雄、	班師詔已來三殿、	射虜書猶說兩宮、
----------	----------	----------	----------

每憶上方誰請劍、空嗟高廟自藏弓、樓巖嶺上今回首、不見諸陵白露中、

絶海の詩は二家の間に在りて共に連鑣並驅して毫も愧色なし、優に魏吳蜀の形勢を爲せり、今三家の時代を致ふるに、絶海の明に入りしは、趙孟頫が元に仕へて翰林學士となりし後五十二年にして、高啓が死に先だつと六年なり、其の明の太祖と唱和せしは高啓が死後正に二年に在り、輩行を論するも亦た甚だ遠からず是れ亦た頗る奇と謂ふべし

絶海、高啓、又各々姑蘇の詩あり、絶海は題して姑蘇臺といひ、高啓は題して姑蘇懷古といふ、古を詠せるは一なり、高か詩にいふ

麋鹿來游客過稀、消沈霸業在斜暉、游帆自向湖邊落、鳴雁誰聞月下歸、
烏隊計成楣柵至、蛾眉舞罷綺羅非、如今始悟牽裳諫、荆棘遺宮淚滿衣、

絶海が作は直ちに高が吟に駕して上らんと欲す、曰く

姑蘇臺上北風吹、過客登臨日暮時、麋鹿群游華麗盡、江山千里版圖移、
忠臣甘受屬鏃劍、諸將愁看姑蔑旗、回首長洲古苑外、斷烟疎樹共淒其、

これ等の諸篇を誦せば則ち周の磻匭、宋の結縵、梁の懸黎、普の垂棘も皆珍とするに足らざるを覺ふ、今の才雋動もすれば曰く、我國の詩古人今人に及はざる遠しとわれは未だ必らずしも然らざるをいふなり

絶海が多景樓の一首亦た大に誦す可し、乃ち左に記す

北固高樓擁梵宮、樓前風物古今同、千年城壘孫劉後、万里監麻吳蜀通、
京口雲開春樹綠、海門潮落夕陽空、英雄一去江山在、白髮殘僧立晚風、

◎夏

をりふしのうつりかはるさまを見るに夏ばかり長閑けきはなし、春は梅の咲き出づるより江南の驛使の待ち遠く、楊柳のたるゝを見ては扉を掩ひ、草上の孤花には行歌の處を憐み、心をなやますことのみなるを秋冬は一入もの悲しきことの多かり、桐の一葉に西風たちてより、たゞよう雲に雁鳴きわたり、かれ行く野らに虫の音すたく、やがて雪降る頃にもなれば北風つよう吹きすさびて空行く月も荒れなむとす、世にもあらぬ心地するに、夏は北窓の下に臥して清風に夢を結び、板牀に座し

て書を樹陰に讀むなどことの外のどけし、かぞふればかすく多かれど、からふみに詳しければよく。

夏日は畏るべしといはれけるは、心のうち涼しからねばなるべし、韓持國が許唱の第は深さ七尺ある涼堂なりしを、盛夏には猶ほ居堪へずとて、常頼士が許をどひて、郊居は涼しきやといひけるに、頼士の答へけるは、賤しき身には修簷大厦などさらになし、さりとてぬがふこと待らねば、思ふまゝに形を露はし、扇を挾みて、木牀といふものに足を投げ、木陰の東に搖くを見ては東にうつり、西に搖くを見ては西にうつるのみにて候といひければわか心さへすしくなりぬといはれにけり、こゝる涼しからねば涼堂のうちに在りてもあつきにや。

宋の陸九淵といふ人の集を見るに詩は少くて秀てたりとも覺えず、文には却つて無韻の詩多かり、張伯信に與へられたる書に

風塵凄清、星河錯落、月在林抄、泉鳴石間、薰鑪前引、茶鼎後殿、方池爲鑑、廻溪爲佩、氷玉明登、雪霜騰耀。

といへるは劉壘の隱居通議にも引き出でて嘆美せられたり

白隱のさびしき味

をわするゝな



○干戈を鎖して世界の昌平を致すの論

◎世界の列國亦與みし易きのみ

世界の列國も亦甚だ與みし易きのみ、我の海港を開きて列國に交際し、より以て今日に至る、僅々三十餘年には非ずや、就中我の海軍を建て、國防を講じ、より以て今日に至るまでは、僅々二十餘年に過ぎず、是れ國際に於ても國防に於ても實に孩提の幼兒のみ、我の始めて公館を歐米に置く、歐米は視て以て幼兒、邯鄲に歩を學ぶとす、我の始めて兵艦を英佛に購ふ、英佛は笑ひて以て小兒、大阿を弄ぶとなし、なり、嘗みに其一例を擧げんか、西曆千八百八十五年といへば近く明治十八年の事のみ、此歳自稱文明人の一客が本邦に漫遊し、版後其紀行『日本』なる書を巴里に於て刊行せる中には實に左の如き文字にて充たされにき、曰く

五千里外より日本を想望すれば、彼れ日本なる者は、彼が如き短値の時間に如何にして善く我文明を接納し、而も全然之を自家の藥籠中に收めしかと驚嘆の外あらず、寔に如是觀を爲し去るときは、此の人種に對して如何にも高尚の思想を附するに餘りあり、去れと是れ望遠鏡を掠め去る單なる洩色に過ぎざるのみ、即ち是れ田夫野人眼たるに過ぎざるのみ、彼は其實時計を修理する時計匠を見まねしたる沐猴爵殿の歴史を繰返したるのみ、次の一事を引擧し來らば、彼人種が智識の程度を證明するに餘りあらん。

或時日本人は米國人より汽船一隻を買い入れたる事あり、是れ日本に於て汽船輸入の嚆矢なりと云へば、其運轉術に關し無智識無經驗なる事言ふまでも無けん、然るに當時日本人は之を買入れて乗組米國人より一通り運轉の方法を聽聞するや否や、早く既に鵜呑みに呑み込み、乗組を謝還して自ら之に代り、僅に其横濱一港内に於て小舢に乗りたる經驗を以て直ちに之を應用すべしと爲し、乃て汽船を港外に乗り出し、試運轉にぞ取りかゝりぬ、取り掛りしは敏捷なりつれども、生憎彼等は進運の方法を學びて未だ停運の手段を諒解せざりけり、彼等は無性闇雲に石炭を投じ推進力のあり限り船を沖合に出したる後碇と原動力の空堀に會ひ、進みも得ず、退きも得ず、僅に數艘の和船を見出し、曳船を頼みて元の港に曳き還

らしめたりとぞ

百二十八

是れ輕佻膚淺なる一巴里人の言、單だ一笑柄に過ぎずと雖ども、歐人の我を輕侮し、
も亦以て察す可きには非ずや、彼の輕侮斯の如くなるに干はらず、我の兵力は他
の諸事物と邁進超上已む時あらず、明治二十七年の初に當り我海軍の物質的地位を
如何と顧みれば、既に世界に於て海軍國を以て稱せらるゝ列國中、南米のブラジル
アルゼンチン、智利に凌駕したるのみならず、歐洲に在りても葡萄牙、希臘より丁
抹及瑞典諸國の聯合海軍を軼過し、英國より指を屈始し第十二位に數へらるゝに至
れり單だ是のみを以てするも既に吳下の舊阿蒙に非ず、而る後日清戰爭あり、頗り
に清國に克ちて我海軍力は物質的のみならず、否な現在の物質よりも尙かに優進せ
るを世界の上に證明し鬚きの沐猴爵視したる者をして却て自己の田夫觀野人眼た
りしを感悟せしめたる、亦た快ならずとせざるなり、而して明治二十九年の今日に
至りては、我は再び支那、土耳其、和蘭を越へ、明年を出でずして將に埃匈國の上
に立たんとす、加之今春の議會は業に已に海軍の擴張案を決定せり、而も其案たる

畢竟是れ其第一期案たるのみ、若し其第二期案を議會に上せ、之を決定する亦た數年
の外に出でじ、是等の擴張にして功成らんか、我海軍は又更らに西班牙を驅け抜け、
競争場裏に笑ひて獨乙の手を握るに至るべし、曰く英、曰く佛、曰く露、曰く伊、曰く
米、曰く獨、曰く日、世界の海軍國の第七位に坐する亦ただ遠きに非ず、是れ我愛國の
偏情より發するの私論に非ずして、實に列國公評の許す所を概説するものたるのみ。
夫れ我海軍の建設以來、之が擴張の跡を顧みれば、陸軍に比して太はだ遲緩に且つ
偏小たるを免かれず、若し陸軍に致したる擴張の一半を移し來り、之を海軍に用ゐ
來らば、今月今日既に獨逸の道連れたるを得たりしを疑はず、然らば則ち世界の列
國も亦甚た與みし易きのみ、帝國小なりと雖ども亦た以て宇内に雄飛するに足れり、
此道よりして邁進勇進せば、以て世界の一大強國たるを得へし、然り 一大強國た
るを得るは、吾人天日を指して疑はず、只た其れ斯の如き雄大の強國となりて、而
して我國は何をか爲す可き(一問)、又我國の慶福を幾何をか増進する(二問)、吾人
は豫め之を解釋するの義務ありと信ず

百二十九

神州言語帶胡聲
忍見銅駝沒蕪荆
戰士不收江北地
詩人空奪渭南名
孤燈懷友聽秋雨
一騎探梅趁晚晴
危坐正襟千歲下
欲繙遺卷淚先傾



◎我的擴張と、英、佛、露、獨

我海軍は陸軍に比し設備一籌を輸せりと稱せらる、然るも尙ほ南米若しくは歐洲二三等國の海軍を踰越し、優として既に一等國設備の域に入るものあり、今より數年を加へなば、復たび埃匈國を軼過して西班牙國に凌駕すべし、是れ快は則ち快なり然れども尙ほ其上には英國あり、露國あり、佛國あり、伊國あり、米國あり、獨國あり、今ま此六國の設備を按ずれば、獨の海軍は約二十六萬餘噸、米の海軍も略約之れに同じきものあり、我擴張にして功成らば、之に匹儔することを得ん、伊の海軍に至りては今ま約三十二萬噸を算し、米獨に優ること更に又一等なり、但し此海軍國は數年來頗る其擴張を躊躇するの情あれば、我にして一増擴張に力を用ゐんか、亦企及す可らざるに非じ、只だ其れ是より以上に至りては我何を以てか之に折衝せんとはする、露の海軍は三十六萬噸、是れ尙ほ庶幾す可きに似たりと雖ども、彼の擴張に熱心なるは我と毫も異なるものあらず、否な我れよりも熱心なるものあり、我にして一艦を増せば、彼は亦二艦を増さん、我にして二艦を加へなば、彼は亦三艦を

加へなん、其決意其熱心は歴々吾人の眼中に反映す、我れ之と同量を收めんとせば、何の日に加之を期せん、若し其れ佛の六十五万噸、英の百四十七万噸に至りては、徒だ其の壯大に驚くのみ、英國今年度の海軍費を視は、二千百八十二万余磅を算す、是れ約我二億圓、即ち我政府全般の總歳出に匹敵せるに非ずや、我にして若しアルビオンと同量の海軍を維持せんと欲せば、維持それだけの爲めに、一切の國務を抛却して海軍の一途に犠供せざるを得ざるなり、是れ固より不可能事ならずや、如今奈何に海軍好の政事家を捉へて之を内閣總理に押据ゆとも、之を夢想するだも得ざるべし。

然れば則ち軍備擴張々々々と連呼するも、世界の上より觀過し去れば、薩埵峠より富士山を望み、峠に土壤を盛るに等しきのみ、盛れば盛らざる前よりも、尺を高むるに相違なきも『雲居にまかふ薩埵の峠山』と歌人に呻吟せしめんことは、われ其幾百年後の事なるやを知らず、故に軍備擴張は國家の情態の許す限り、何程之を擴張したりしとて單だ『いくらか強くなつた』といふに止るのみ、而して二三等國

より強くなつたといふに止まるのみ、而して其の所謂二三等國なるものは何者ぞや、是れ各々其土を土とし其民を民とし、己を守りて分に安んずるの外は、決して世界に爲すあらざる邦國のみ、然れば是等に對しては初めより毫も軍備擴張を要せず、ガムボート、トルビート、乃至巡查辻番にて以て之を待しらふに余りあり、何を苦んてか仰々山に軍備擴張を要せんや。

◎世界を亂すものは英と露佛と獨逸なり

畢竟今の世界を亂し、五洲の内に寧日なからしめ、生靈をして天福を享樂すること能はざらしむるものは、一方は英、一方は露佛、之を點綴する獨逸なる鼎足三位の殘賊が横行して呑噬攘奪の獸慾を逞くせんとするに由するのみ、東海の神山蓬萊瀛州までか軍備擴張々々々と連呼せざるを得ざるに至れる者は、此四殘賊あるが爲なるのみ、然れば軍備擴張なるものも露佛の一方か英の一方かを敵として之を叩きつくるに足るだけの優力を備ふるまでに至らざれば、擴張して見たればとて余り香ばしき結果もあらず、又其目的を達し得たりとはいふ可らず、而して英なり露佛な

り其狹持する所の兵力は前に示す所の如く、如何に擴張に熱心なればとて彼等の一
と同位地に達せんことは始んと望む可からざるものあり、是に至りて軍備擴張とい
ふことも、亦た一般の屬望するほど其れほど有望の事業にもあらず。

願ふに露佛といひ英といふ殘賊の爲に、世界の各國各民族は驅り起てられ、直接に
若くは間接に溝壑に赴くもの歳に幾國幾千万人、其力最弱なるものは直ちに其爪牙
に罹り、攘奪吞噬の慘を免れず、否らざるものも其攘奪吞噬を防がんが爲めに國不
相應の兵備を興し其民をして懸倒の苦を受けしむ、則ち彼れスラヴ、ゴローワ、
乃至アングロサクソン賊は十億に余れる皇天の赤子をして或は血税に或は汗税に無
限の義務を負擔せしめ、兄弟妻子團欒して天福を樂しむことを得ざらしむ、然れど
も謂ふ所の人強くして天に克つ、カそれのみを以てしては、到底之を屈せんこと殆
んど期す可からず、斯の如くば世界の昌平何の時にか之を致すべき、人類の天福何
の年にか之を樂むべき、武装の平和は畢竟苦痛の平和のみ、垂裳の平和にして始め
て茲に人類の天福を言ふべきのみ、然れば當今世に處し世界の昌平を致さんと欲せ

ば、國家の眞福に近よらんと欲せば、軍備擴張以外に於て一の經綸を求めざる可ら
ずと思ふ

◎伐兵は政家外交家の爲めに取らざる所

孫子言はずや 用兵之法、全國爲上、破國次之、全軍爲上、破軍次之、全旅爲上、
破旅次之、全卒爲上、破卒次之、全伍爲上、破伍次之、是故百戰百勝非善之善者也、
不戰而屈人之兵善之善者也、故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城のみと、
是れ豈用兵之法のみならんや、經國の道も亦又之に異らざるのみ、國あり陰謀を善
へ、以て吞噬の慾を逞ふせんと圖る、我れ之を機先に察し、陰謀をして舛錯齟齬し、
要無効に販せしむるもの、是れ謀を伐つには非ずや、國あり同盟を約し、以て暴戻
を専らにせんと策す、我れ之を未發に制し、同盟をして乖離破裂し、交反目に終ら
しむるもの、是れ交を伐つには非ずや、畢竟國に政事家及外交家の必要あるは、此
所謂謀を伐ち交を伐ち以て國を全くし世を泰くせんと欲するが爲めのみ、若し其れ
袖手して陰謀の中るに任せ、傍觀して同盟の成るに委し、而る後倉皇として軍備擴

張々々々と連呼するは是れ則ち兵を伐つもののみ、一流の政事家外交家の爲めに甚だ取らざる所なり、否々國家の爲めに深く賭るを願はざる所なり。

且つ今の軍備は古の軍備に同じからず、戦艦一隻を建造すれば、立どころに千万乃至一千四百万圓の洪費を要す、近くは今年の議會に於て議決せし所の海軍擴張費のみを以てするも、約二億圓の巨額を算するに非ずや、而して是れは此れ第一期の計畫に屬する費目のみなりといへば、第二期の計畫決するに至らば、三億以上四億圓内外の費額に上るべし、若し其れ陸軍の擴張を取りて之を合せ算すれば、日本帝國の國富に比しては實に絶大の負擔に非ずや、而して此種絶大の擴張に由りて英の一方か露佛の一方かを見事叩きつくるの成算立つといふならば是れ尙ほ可なり、然れども彼等の兵備は前に云ふ所の如く、此擴張を経たりし爲めに太だ軒輊する所あらずとせば、一流の政治家外交家を以て自任する所の君子は、別に思慮する所なかる可からざるなり。

◎豺狼を制するには豺狼を用うべし

思ふに豺狼を制するには豺狼を用うべし、今の英なり露佛なり乃至は獨の數國なるものは、是れ世界の豺狼なるなり、今や歐洲の分野に於ては兎鹿の以て餌食す可きなく、争ひ來りて之を東洋の世界に求むるものなるなり、故に英の欲するところは則ち露佛の欲する所、露佛の欲する所は則ち獨の欲する所、従つて時としては相合すること無きに非ずと雖ども、内相忌むは頃刻の間も亦絶えることあらず、是れ則ち微妙の機なり、伐謀伐交の權を出す可きは實に此間に在り、眞の政事家眞の外交家が畢生の技倆を蓄ふ可きは只だ箇中の立々には非ずや。

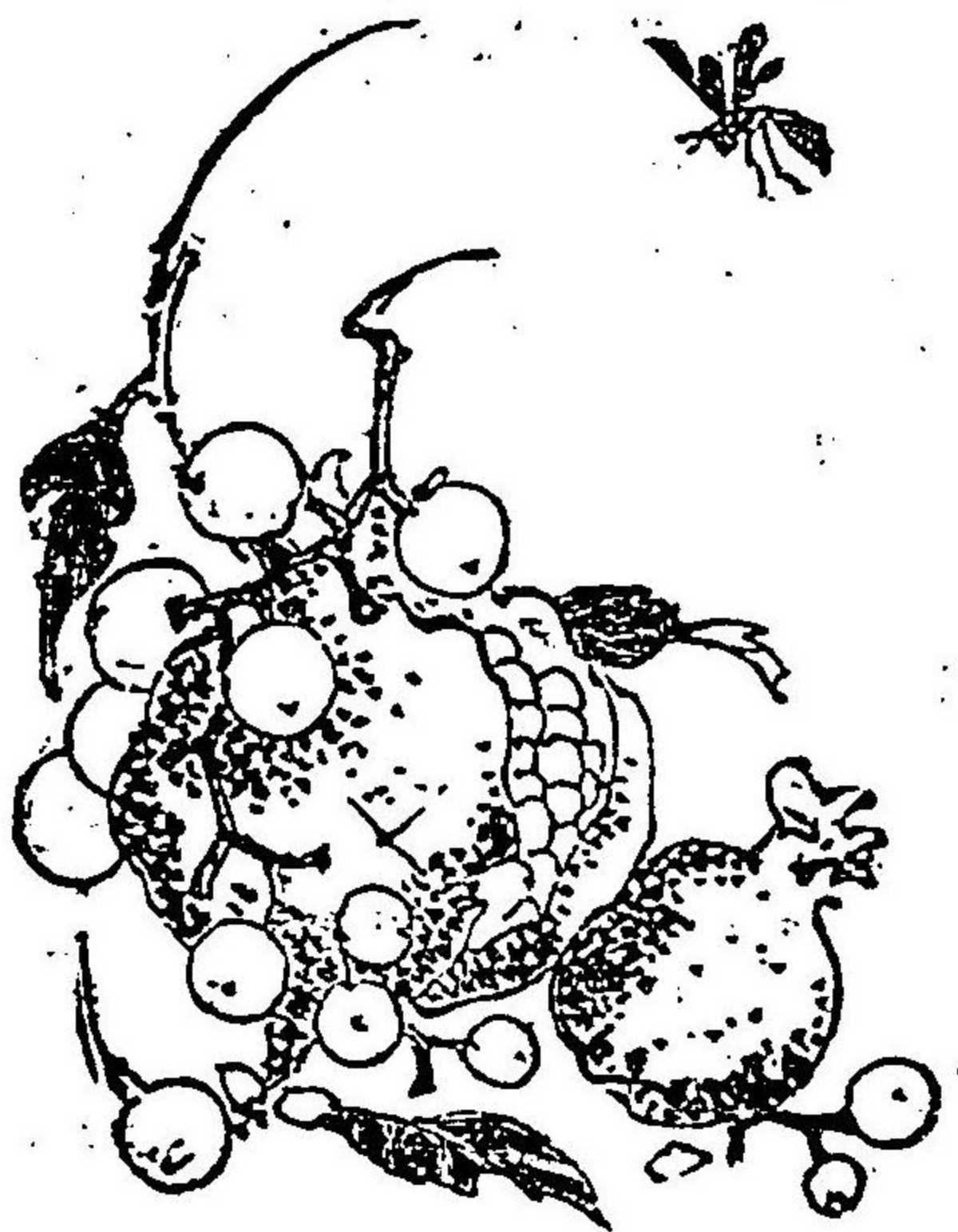
孫子は善く此機を知れり、故に其十三篇、最後に説く所のものは則ち用間の一事に在り、其言に曰く、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騷動、怠於道路、不得操事者、七十萬家、相守數年、以争一日之勝、而愛百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將也、非主之佐也、非勝之主也、故明君賢將、所以動而勝人、成功業出於衆人者、先知也、と孫子は兵家なり、故に單に兵に就きてのみ之を言ふ、[◎]間何ぞ兵に限らんや、今の時に當りて外交官は或方面より之を視れ

ば、是れ一の間たるなり、日頃互に相標榜し、天下の英雄は只だ便君と我とのみと
自矜せる藤侯陸伯等盡ぞ善く外交官を用ゐざるや。

孫子は用間の要を詳論し、末に事例を援きて之を立證せり、曰く殷之興也、伊摯在
夏、周之興也、呂望在殷、故明君賢將、能以上智爲間者、必成大功、と伊尹太公と
もいはるゝ人がよも行賈行商の細作となりて夏殷に入込みたるに非ざる可く、則ち
當時の外交官とし其大手腕を奮ひて以て未夏季殷を間したるや亦疑ふべくもあらず、
降りて劉項の争に視よ、間の必要は益々見るべし、楚圍漢王於滎陽、漢王謂陳平曰、
天下紛々何時定乎、平曰、項王骨鯁之臣、亞父輩數人耳、行間以疑其心、破楚必矣、
王與平於黃金四萬斤、不問其出入、平多縱反間、爲大疑、亞父請骸骨歸、疽發背死、
と則ち漢の天下なるものは上智の一陳平と黃金四萬斤にて贏得し、といふも亦不可
あらじ、一等の外交官を使用するの効驗も是に於てか亦顯著なりと謂ふ可し。

飛將發鼎千重鐵

陳統丹砂萬點紅



◎一等國と一等國の交

一等國の相交はる、自ら一等國の禮あるなり、見よや英佛露獨埃伊等諸國の間には互に全權大使を派遣して他の國都に駐劄せしむるには非ずや、又其全權大使たる者には地位名望技倆に於て一流の人物を選任するには非ずや、是れ其國際上に於ては他國の地位を重んずるの美ありて、其外政上よりいへば、之に非ざれば以て敵國の政策を洞察し、兼ねて自國の政略を運用するに足らざるの實あればなり。

今や我國は一躍して既に一等國の班に在り、而して外交の政如何と願れば、依然として二等國當時の情態に止まれり、公使は則ち全權公使なり、全權大使には非ず、而して其全權公使には如何の人物が選任せらるるかを思へ、殿様そだちの貴公子達に非ざれば、英佛形製の才子連には非ずや、是等の人物を將ゐて歐洲の外交社會に占坐せしむ、衣裳の着こなしや、挨拶のしぶり、舞踏會食禮式の間には、寔に優美に寔に氣の利きたる外交官たるを得べしと雖も、技たる固より此に止まり、敵國の形勢を洞觀し、自國の政略を運用するが如き、國家の休戚世界の治亂に關する絶大

の事業に對しては、初より概ね無資格の徒なることは、一般の夙に認識する所ならずや、論より證據は遼東問題に關し三國同盟の形成せられたるを覺知して先づ報告したる公使は何處に在りしや、或國駐劄の某公使オックスの如きは我東京に於て三國の照會に逢着する前日頃、然も照會者の國都に在りて媾和條約締結の祝宴を開きて陶々酣醉し、帝國萬歳を三唱し居たりし人さへ有りしにあらざりしか。

斯かる人物を使用し、斯かる人物に依頼して、國家の外政を延べんとする、縁木求魚の感なきや。凡そ敵を防禦する、之を本丸に於てするは、之を外廓に於てするに孰れぞや、之を外廓に於てするは、之を國境に於てするに孰れぞや、之を國境に於てするは、之を國外に於てするに孰れぞや、豐太閤の築きたる大阪城は如何に天下第一の名城たりしとはいへ、其の外廓を毀たしめ其の外濠を埋しめ、而して尙ほ天下の名城なりとて箇中掌大の天地に立て籠りて、夏の陣を關東に挑みたる豊家二世の戰略は、百代の笑柄となりしに非ずや、外交の政は外廓の防禦なり、國境の防禦なり、否や國外の防禦なり、是をこれ等閑に附去し、而して獨り軍備擴張以て國を

保つ可しといふ、何ぞ彼の大阪城の本丸に立て籠りし者に異ならんや、元んや其軍備の力も亦大阪城に及ばざるものに於てをや。

軍備擴張は大物入りの骨頂なり、戦闘艦一隻を新造すれば一千萬乃至一千四百萬圓は單だの一隻に之を要せずや、今ま其一隻を加へたればとて、世界の上より大觀し來れば、英佛等の上より比較し來れば、鼻糞を丸めて之を掌上に加へたるに等しきのみ、而して其艦は浮き物なり、戦闘の慘に罹らずとも、船頭若くは磯角に憂と一たび振觸せんか、何時海若の有に歸せざるを必せず、地中海の演習に一朝海底に沈没し、英のヴィクトリア以て鑑す可きなり、然れば如今戦闘艦四隻を造る所をば、今ま一隻だけ餘計に作りたりと見て、一千四百萬圓を外交の業に投じ見よ、われは深く其効果の戦闘艦一隻を加へたるに劣らざる利益に歸す可きを疑はざるなり。戦勝の結果は幸にして二億三千萬兩といふ大金を我に收めたり、此大金を軍備擴張の一途に用ゐる盡すのみが政事家の能には非ざる可し、假へば其中の二三千萬圓を外交の政に運用せよ、其効力如何ぞや、之を用ゐて歐洲の強大國の國都の下に巍峩たる

大使館を築き建て國內一流の外交家を選びて此に派遣駐留せよ、各強大國の政府は皆己を敬重すと歡喜す可し、孰れも極めて歡喜す可し、單だ此一事のみに於ても我國際の上に於て言ふ可からざるの地歩を占め、言ふ可からざるの利益あらん、且つ從來是等の列國に一流の政事家外交家を派遣駐留し得ざるの事情は、一には其地位卑ければなり、二には待遇の薄ければなり、外交官に金が足らぬとは十年一日の如く耳にする所なり、是れ足らせざるが故に足らざるのみ、今ま是等の大使に任ずる者には俸給を厚くし、交際費を裕かにするの外、其必要に由りては黄金十萬磅不問其出入一底の支出を試みよ井上送る可し、大隈遣はす可し、陸奥出す可し、青木でも存外立派な働きを爲す可し。

今や世界の動機は東洋に在り、彼や英佛露獨の數國は東洋の爲に互に睥睨せり、又交る／＼離合せん、而して我や其競争方面の一強國として樹立する以上は、是より彼等が一動一靜する毎に、必らず多少の關係を有す可し、此機や實に政事家外交家の運用驅使すべき微妙の關鍵ならん、豺狼は互に食ましむ可し、虎豹は交も搏たし

む可し、一流の外交家歐洲の外交界に在り、本國の政事家外交家と力を戮せ心を協へ、絶えず東洋問題に關し列國の間に周旋せんか、英佛間一章のドヴァー海、安んぞ萬里の距離を生せざるを知らんや、露獨國界ニエノマン河上、又安んぞ劍氣の浮動せざるを知らんや。

想起す千八百七十年獨佛の鏖戦一たび終りて佛國の憤怨其の骨に入れるも、今に於て二十有六年、終に一たび獨に嚮ひて其干戈を移すこと能はず、是れ他なし、大戰の後は容易に足を擧ぐる能はざる者あればなり、如今歐洲の風雲大に驚動し、龍驤虎攫の活劇を演出せんか、劇裏には他を顧るの違あらず、而して幕落ち劇閉づるの後に至るも、短くも數年、長ければ十年二十年諸優皆疲れ、各々家に還りて其創痕を癒し、其生氣を養はん、此數年乃至數年の間こそ、即ち砲煩を庫に收め、軍艦を船渠に上すの時、世界の昌平、武裝的ならざる世界の昌平、始めて以て致す可きなり、諸君既に一流の政事家外交家を以て自ら住ず、何を困みて二六時中大隈や井上や乃至は板垣ぐらゐまでの處分に齷齪たることを爲す、第一流の自分免許に對しても、豈恥づ可きの次第ならずや。

帝堯崑崙雪、置之扶桑東

突兀五千仞、芙蓉挿碧空



○哀れ天涯の一孤客

劍華發して此人世に現はれ、刀影閃めきて此人世を辭したり、哀れ天涯の孤客金玉均、

今ま金玉均の經歷を略序すれば、金氏は朝鮮の一家、世々韓廷に在りて國政に參預せり、玉均人となり奇警穎悟、詩を善くし書に巧みに、琴瑟六藝通ぜざる所なく、且つ頗る口才あり、談論風生、微辭人を動かす蓋し交際場裡の才子也。

朴永孝の選まれて我國に使するや、玉均副使となりて東京に來り、廣く我賢士太夫と交りて始めて世界の大勢を悟り、國事を以て自から任するの志あり、會ま外務大臣井上伯玉均を延見し、深く結托する所あり是に於てか益々志を決し、歸國の後ち永孝と竊かに志士を收攬し、一たび支那の羈絆を脱して本國の獨立を全ふせんことを圖る。

明治十七年十二月四日朝鮮郵政局新たに成り、國王親臨して開局の式を擧ぐ、玉均機に乗し泳孝と共に兵を擧げ、急に襲いて在朝の大臣數名を仆し、王を擁して革新

の政を行はんとす、會ま政敵の清兵に頼りて之に抗するあり、王も亦逃れて其營に入る、是に於て事終に敗れ其徒朴泳孝、柳赫魯、申應熙、鄭教蘭、李熙固等と遁れて我國に投ず、之を十七年甲申の亂とはなすなり

爾來玉均は東京に在り、玉均の政敵閔氏の一族深く之を畏る、翌十八年二月韓廷穆麟德、除相雨を使として我國に遣すや、玉均を引去せんことを求めしむ、政府玉均の國事犯亡民たるを以て峻拒して事を容さず、二使手を空しくして歸り去る、是に於て閔族は更らに刺客池運永なる者を遣はして玉均を伺はしむ、事發はれ運永は我政府の爲めに捕へられて本國に押送せらる。

此歳大井憲太郎等事を朝鮮に起さんとし、發するに臨みて事露はる、風説往々玉均に連なる、我政府深く清韓兩國の交情を傷んことを虞れ、日を期して玉均に去國を命ず、天涯の孤客如何ぞ多く腰纏あらん、此を以て期日に至り發するを得ず、是に於てか政府は命を用ゐざるを名とし、八月七日玉均を要して南洋の絶島小笠原島に移せり。絶島に移されて在ること數月、瘴炎交々侵し悴病相依れり、是に於て一篇の陳情書

を政府に上り、請ひて北境の北海道に移り、爾來寒天の下に星霜を閲みすること五歳、明治二十三年免されて東京に歸り以て今日に至りしなり、前きに明治十七年十二月十三日仁川を逃れて我國に投し、本年本月(廿七年三月)二十三日神戸を發して西航の船に駕せしまで玉均の我國に在る九ヶ年一ヶ月餘に及ぶ、此間保護に厚薄ありと雖ども、其身の存して以て恙なきを得たるものは我國の賜なり、而して玉均一日此厚蔭の國を離れ、忽ち兇刃の下に仆る。

玉均我國に流偶する、且つ十年、其間だ未だ嘗て首丘の義を忘れず、其志常に一たひ故國の獨立を全くし、革新の事業を成さんことを希ふ、願ふに今回李經芳の招に應じ去りて、上海に向ひしもの、亦其國を思ふの切なるに因らずんはあらず、而して一生轆軻、今や彼の如し、哀れ此天涯の孤客、悲し此愛國の志士。



○愛國狂

若し熱血を灑て志情を決行するものを以て狂なりとせば、天下の狂者も亦多し、學者は學問に狂し、政治家は政事に狂し、宗教家は宗教に狂す、狂も亦可なり。

夫れ人苟も特立の志操を有するもの誰か多少の狂種を具へざるものあらん、唯其感する所同からず、任する所異なるの故を以て、其狂態を發するに大小の別あるのみ。世道の衰ふるや德業圓滿の人固より得易からず、吾輩以爲らく狂者を見ることを得ば亦た可なり。

滔々たる天下、文臣錢を愛み、武臣死を愛み、冷々酒々、浮萍の如く、飄絮の如く、巧みに世を渡るを以て人世の能事となす、此時に於て一熱心勵行の人あり、矯激の行をなして醉生夢死の世人を警醒せんとす、而して世之を以て狂となす、其志亦哀むべし。孔聖嘗つて曰へり必也狂狷乎と、又曰へり卿愿徳の賊也と。彼の名爵を争ひ、祿位を貪るは、狂者爲さるるなり、人の爲めに笑ひ、人の爲めに泣くは、狂者の爲さるる所なり、利あれば之に就き、利なければ去る、狂者の爲さるる所なり、

而して此等は世人の視て以て才子となし人物となす所、狂者より之を見れば徳の賊に外ならず、昔者横山正太郎、時事の非なるを痛言して太政官の門前に屠腹す、人以て烈となす、今者大原某、北門の鎖鑰固からざるを慨して、西徳寺に切腹す、人視て以て狂となす、時の相距る二十余年、人心の變亦た嘆すべきものあり。

一國の患は人心枯冷して熱血を失ふより大なるはなし、北海道の開けさること久し、國家の富源、北門の鎖鑰未だ何れの日にも頼むべきを知らず、彼の封豕長蛇狡焉逞くせんことを思ふ者は、日に爪を磨し、翼を鼓して來らんとす、而して國人方に小利を争ひ、小名を競ひ、叫喚嘻笑、禍の將さに至らんとするを顧みず、是れ蓋し大原某の慨する所なり、國人たる者宜しく其熱情を察して警醒するところなかるべからず。矯激の行は固より中庸の事に非ず、然れども生は易く死は難し、身を殺して世を警す吾輩は亦た其狂に感ずる所なくんはあらず、乞ふ血性ある國人よ、其行の激なるを以て其志を忘るゝ勿れ。

鷹の眼は枯野にすわる夕かな

○軍人と士道

◎ウォオルズレー將軍ゴルトン將軍を談ず

英國のウォオルズレー將軍は當代の名將、緬甸に、ロシアに、印度に、支那に、加奈陀に、アシヤニチーに、ゾールに、埃及に到る處功あり、モルトゲの如き大戦の經驗なしと雖ども、亦老練の將と謂ふべく、其語るどころ蓋し空疎ならず、况や其の人と談ずる胸に城府を設けず、是を是とし非を非とし、絶えて彼の倨肆を之れ事とし、屁でもなき事に勿躰つける陋劣の態なきに於てをや、其言ふ所洵に其の信ずる所なるべし、マルボローは將材に於て遙かにウエリントンに優るといふが如き、今更の様に聽くべきに非されども、ウォオルズレー其人の口よりして聽く、則ち得る所なしとせず、斯のウナルズレー、人ノゴルトンの事を問へるに應じて曰く、「ゴルトンは余が一生涯に知り得たる二大傑士（ツ、グ、レント、ヒー、ロ、ス）の一人なり、予は一層材能ある士に遇ひたれども、未だ彼が如き眞摯の人を看たるとあらず、彼は充分に勇氣あり、充分に決心あり、爲す所考ふる所正直ならざるなく、而して貨

財に關しては全く無感覺なりき、彼がスイダンに向つて出發せしは午后の事なりしが、其時シルクハットにフロックコートを着し居たり、予は彼が需むる所のものは何にても給せんと告ぐ、彼れ云ふ何も需むべきなしと、予云ふ現に衣類を欠くに非ずや、彼れ云ふ斯の若くして往かんのみと、而して其の若くせり。彼は曾て金錢を所持せしことあらず、獲るに従つて直ちに散す、一度七千磅を有せしが、悉く或る小學校に寄附せり。其發するに臨み、余は問ふに小遣錢の有無を以てす、彼れ平然として答ふらく、否、ブラッセルスを出立せる時旅宿拂ひの爲め國王より二十五磅借用せりと、予云ふ、善し、是れより周旋し回り幾許か調へてステーションに會見せんと、乃ち所々クラブを廻りあるき金貨三百磅を得たり、而も彼れには金を託す可らざるを以て、同行者のステワルト佐官に與へしに、一週間許りにしてステワルトより書面到來し、中に云ふ、「閣下は三百磅を配慮すべし、我等ポルゼーに着せし時民衆群聚してゴールドンを歓迎し來れり、中にゴールドンの知る所の老人あり、貧にして且つ盲す、ゴールドン乃ち金を求め盡く之に遣せり、云々」。是れ固よりゴル

ドンが性行の一端、其詳細は前に傳あり、彼れ事々物々自ら薄くして人に厚くし、其居る所の食堂屢々山海の珍味を列ね、一見太だ豪奢なるが如きとあるも、而も此れ皆人の爲めにせるもの、己れは舊に依つて麵包を喰らひ水を飲めるのみ、各國より獲たる勳章頗る多く、而して總て賣拂いて其金を散せり、支那に在りし時、利を輕んずるの甚だしき、李鴻章其或は好物たるべきを疑ひ、而して後其の然らざるを悟り、服せり、若し彼をして我日本に來らしめば、人夫れ如何に懷きしか。

巴猿一時停舟於明月皎々之邊

胡馬忽嘶失路於黃沙破々之裡

◎豫讓、ゴールドン、西行、

ゴールドンの澹泊、其天性に出づと雖ども、吾人の認むる所にては寧ろ奇矯に類し必らずしも妥當の教訓と爲すべからざるに似たり、然れども右に曲れるを直さんとす、

先づ之を左にせざるべからずとかや、豫讓曰へらく我が爲す所は將に以て天下後世の人臣と爲り二心を懷て其君に事ふる者を愧めんとするなりと、世を擧りて利に就き利に趨り利に笑ひ利に泣くの時、天或は偉丈夫を降して此を愧しむ、近代カリバルヂーの如き即ち是れなり、ゴルドンの如き亦實に是れなり、世或は金を崇拜するを以て文明の表象とし、金を卑視するを以て封建の餘習とす、然れどもゴルドンは實に是れ泰西人士の頌揚する所、われ亦是を以て泰西人士の甚だ鄙む可らざるを知る。邦人西行の銀猫を以て談柄とす、而も西行は出世間の人、利に淡なる素より其處、銀猫の談柄となれば、偶々出世間の墮落を證するのみ、西行の銀猫に驚かばゴルドンを奈何すべき、西行は言ふに足らず。然るも我國亦眞の高士なかりしに非ず、其の風動せる所効力や大、元龜天正人獸と一般、乃ち上杉謙信あり、微にヒューマニティーの光を發し、三百年間の士道を造るに與りて最も力ありき。晚近則ち西郷隆盛あり、隆盛議すべきもの少からず、其の材幹、其の見識其所謂無私さへも疑ひ得ざるに非ざれども士道に於て天下に師たるべきものあり、軍人が今尙ほ幾分か利に憚

る所あるは恐らく隆盛の感化なり。隆盛逝き其れ誰か在る、將官にて二三の人或は幾しと雖ども、武臣錢を愛するの時代に能く之を叱呵し警醒するは宜しく極端の士ならざる可らず、我國由來士の高風を誇り、而して刻下一人のゴルドンなきは果して何ぞや、豈自ら省みて愧ぢざるべけんや、軍人は昔の武士に異らず、終生刀を帯ひ祿を食む、當さに進んで士道振作の任に膺るべし、士道にして振作せば、尸位素餐の徒並に汚行の吏好譎の商亦聊か顧る所あるべし、例せんか海嘯の災に罹れる者、華族と豪商とに於て奮つて義捐すべき筈、而して其の額の多からざるは士道の振はすして制裁の存せざるが爲めのみ、事胡爲ぞ此の如くなる、恨は軍人に叛す。

夏草や武夫共が夢のち



○溇陽江

高崎正風

紅葉うつろひ。あしがちる。秋のあはれの。いと深き。溇陽江の。
 夕まぐれ。友の舟出を。送り来て。別れを惜む。さかつきの。
 數重なれど。いとたけの。しらべも添はぬ。淋しさに。本意なきこと。
 思ひつゝ。影遠白き。波の上の。月打まもる。折しもあれ。
 忽ち聞ゆる。琵琶の聲。思もかけぬ。ことなれば。互に心。
 どきめきて。歸らんことも。ゆくことも。忘れ果つゝ。其の聲を。
 尋ねて誰ぞと。音なへば。打潜まりて。答へなし。舟漕を寄せて。
 酒を添へ。燈かゝげ。又更に。宴の庭。打開き。
 琵琶のあるを。招けども。頼にはいぞ。百千度。呼立られて。
 しぶく。こなたの舟に。移り來ぬ。琵琶を抱きて。まばゆげに。
 面を掩ひ。彈初めし。其の撥音に。いひしらぬ。深き情の。

こもりつゝ。ひきゆくまゝに。つねづねの。あのが心の。うれたさを。
 訴へ出る。心地せり。人こそ知らぬ。滾ゆふの。百重かさなる。
 憂き思ひ。積る恨みの。數々を。四筋の糸に。いはすらん。
 軽く打ち。緩くひぬり。はらひつ。かゝげつ。初めには。
 霓裳をかなで。後には六女を。彈じけり。大絃は。嘈々として。
 村雨の如く。小絃は。切々として。私語ごとに。似たり。
 切々と嘈々ど。こきまぜて彈ば。大珠小珠。玉盤に落つ。間關たる鶯の聲。
 花陰に滑かに。幽咽たる泉流。水早瀬を下る。水泉冷澁の趣。凝りて絲を絶え。
 しばし聲なき。其のほどは。すゝろに。憂ひを催して。聲あるよりも。
 中々に。風情を添へし。折しもあれ。再び響く撥の音。銀瓶碎て水入り。
 軍起りて折物の。刀稜を削るに。髣髴たり。曲も今はど。なりし時。
 撥を収めて。四の緒を。只一聲に。搔ならせば。さながら扇を。
 裂く如し。東の紡も。西なるも。たゞ悄然と。聞惚れて。

物云ふ人も。あらばこそ。秋の浦風。身にしみて。水底白く。
 澄渡る。月の影こそ。更にけれ。衣をつくるひ。居なほりて。
 語る詞も。口籠りて。妾も本は。都なる。殿臺の陵下の。
 産れにて。十三歳の。頃よりも。琵琶の上手と。世にしられ。
 玉を飾れる。宮の内。金を敷ける。臺にも。召のぼせられ。
 遊士の。かなたこなたの。會にも。招き寄せられ。戯れ合ひ。
 さめきかはし。あや。錦。かつかへれば。家も富み。身も榮えつ。
 世の中は。斯くあるもの。思ひに。思ひたのみて。花の春。
 紅葉の秋と。等閑に。日を経る程に。同胞に。親族に離れ。
 夕去き。朝來りて。顔花の。盛もいつこ。杉の門。
 馬も車も。寄來ねば。世渡るたつき。盡果てい。身を浮草の。
 根をば絶え。水のまに。誘はれて。情も淺き。商人を。
 夫とするだに。はかなきを。其の夫遠く。旅立し。此の浦舟に。

夜を守る。月明かに。水寒むみ。更行まいに。まどろめば。
 吾身の盛り。夢に見て。いとい悲さ。増りぬと。語るを聞きて。
 思はずも。ふときためいき。つくくと。琵琶を聞きたに。悲しきを。
 此の物語の。哀れさよ。始て逢る。此の人と。身の際こそ。
 はかなけれども。我れも同じく。浮沈み。去年よりこゝに。流離ひて。
 溇陽城の。かたほとり。蘆と竹との。生繁る。いぶせき中に。
 家居して。旦夕に。聞ものは。高嶺の猿。杜鵑。
 樵夫の歌や。總巻が。吹鳴す笛の。聲ばかり。却て胸を痛つ。
 やまひやます。心地して。昔聞つる絲竹の。音なつかしく。思ひしに。
 今宵の君が。琵琶の聲。天津乙女の。音楽を。聞く心地して。
 いとうれし。否むことなく。今ひとつ。弾きてきかせよ。予も亦。
 歌をつくりて。贈らんと。いへば實にも。思ひけん。又も彈ずる。
 撥音は。前の聲より。いそがしく。物凄ければ。江州の。

可馬はさらなり。並居たる。人も袖をぞ。志ぼりける。

梅枝幾處出籠斜
臨水掩屏三四家
昨日寒風今日雨
已開花淡未開花



欠

MISSING

○創業の氣象

奥羽の亂既に鎮定し、函館の師既に凱旋するや、朝廷大に功を論じ賞を議して民と共に休息せんと欲し、雄藩の名士を會して其意見を詢ふ、時に總督の參謀大村益次郎獨り進みて曰く、内憂漸く熄むと雖ども外患未だ計られず、西洋諸國の我が邊りを伺ふもの日に益々甚し、若し水陸の兵を養はずして國防を等閑に付し去らば、一朝風浪の警あるも國家將に何を以て之に應せんとするや、是れ偷安姑息泰平を裝ふの秋にあらずと、言終はりて筆を執り其の案を塗抹す、一坐色を變じて語なく公卿或は聲を勵まして其無禮を詰るものあり、益次郎大息して退き翌日骸骨を乞ひて郷土に歸る。

既にして諸侯皆な封土を還へし癡藩置縣の制行はるゝに及び、創業の氣象は愈々衰へて世を擧げて昇平を謳ふ、朝廷専ら文物典章を改めて以て万國と其美を競はんと欲し、遂に岩倉具視を全權大使に任じて歐米を巡らしむ、時に西郷隆盛等深く中興大業の失墜せんことを憂へ、以爲らく、撥亂の餘勢、士氣未だ衰へざるに乗じて國

威を海外に顯揚し、因りて國家の基を定め人心の歸向を統ふるは今日の急務なり、徒らに刀筆の小技を以て此の偉業を維持せんとするは長久の計にあらずと、蓋し武裝を卸さずして以て王政中興の成を守らんと志なり、是に於て征韓の論は朝廷に起り、事將さに行はれんとするに及び、大使歸朝して廟議忽ち變ず、隆盛君以下皆な袂を拂ひて職を去る。

大村西郷皆な相尋きて非命に斃れ、創業の氣象、士君子の禮節、共に是れより全く消し、天下復た兵をいふものあらず、然れども大久保利通岩倉具視ありて輔弼の職に居る、對外政策を次にして専ら域内の文化に力を用ふると雖ども、其政猶ほ見るに足るものあり、既にして大久保斃れ、又た岩倉逝き、而して伊藤、井上、大隈、山縣の徒は朝に立つ。

史論に曰く費禕世を棄て、而して董允事を用ひ、蜀の朝廷是れより復た社稷の臣を容れず、魏國の爲めに輕侮せられて三分の計敗れたるは固と是れ此れに因る、蓋し董允は是れ才子のみ、刀筆の技に富むも、人を識るの明なし、其の擧げて用ふると

ころは黃皓一輩の小人のみ、故に姜維の徒ありといへども皆な國に忠を致すを得ずと、洵に然り、洵に然り。

才子時に朝に立ちて威福を弄するや、正人君子は尸素の謗を恐れて皆な冠を掛く、此の時に於て薦用せらるゝところの人は、幫間の如きもの、巾着切りの如きもの、泥棒の如きもの、相塚師の如きもの、才取りの如きもの、間牒の如きもの、即ち一言に掄へば、法律の許す限り悪事を働きて耻ぢさるもの最も多しとす、其影響は引きて社會全般に及び、壯年血氣の士にして位祿の榮を熱望するものは、皆な斯る輩の言行を模範とし、人の顔色を伺ひ、人の心底を探り、其の家族の情態より其の朋友の關係まで隱微を苛察して交際するをば處世の巧を得ることゝ爲すに至れり、此の巾着切りの流風は實に今日の立憲時代にまで繼續し、上は廟堂の大臣より下は郷閭の志士に至るまで、此の流風に感染して所謂「助倍根性の時代」を現出す。

詩家清景弄新春 柳嫩鶯黃色未勻

春待上林花似錦 出門皆是看花人



○幻 影

想ひ起す昨歲坊の遼東に在る、歸雁兩三聲暮春の雨に鳴いて過くる一夕、亡友古白が靈は縹渺として坊が陣營をたづね永く人世の訣別をつげぬ、飯來故山に古白を訪へば一片の墓標は只寂然として松風蘿月の間に立つのみ、古白終に在らず。

刹那の夢重なりて今や一歳の夢となりぬ、其夏去り其秋迎へ其冬過ぎて其一周の春は來りぬ、花は即ち相似たり人は即ち相似ず、一片の墓標苔漸く蒸すを見るのみ、古白又終に在らず。

今や春又早く去らんとす、世は狂はしめし花は昨日の幻となりぬ、花に狂ひし世は今日の夢となりぬ、天地蒼然として沈み人心寂然として悲し、嗟暮春の人天何ぞ夫れ斷腸の事多き、嗟古何々々終に何の日にか還らんとする。

今宵細雨蕭々たり、坊獨り燈下に坐して遙かに君を慕ひ、更に昨春の雨夜を想ふ、心緒亂れて麻の如し

春雨はさびしきものと思ひ知りぬ

離 狗 不 知 吠

隨 兒 遊 里 園

主 翁 從 外 返

搖 尾 入 衣 裾



○社會の腐敗

社會の腐敗といふ語は近來益々世人の口に上りて何の談にも挿入せらるゝが如し、去れど、所謂る社會の腐敗といふは如何なる定義を有するかに至りては聊か明晰を缺ぐものあり、明晰を缺ぐと雖ども、世人は克く之を了解して毫も疑はず、獨り此の語の定義に疑を有せざるのみならずして今日の社會體に此事實あるを疑はざるが如し。

如何なる時代にも如何なる社會にも、人の理想を満足せしむべき事實のみ現ずることとは有り得べからずして醜汚の事は絶ゆる期なし、例へば盜賊の何れの世にも必らず之れあるが如きのみ、人類は或る點に於て利慾の最も多き動物なりとせば清淨潔白を此の人類社會に望むことの難きは論なし、社會の腐敗といふは果して人類の社會の不清淨不潔白を意味すとせば腐敗は是れ社會の本色ならん。

然れども、腐敗を以て社會の本色と爲さば、他の一方に於ける夫の教育宗教徳行風紀などは殆んど吾人の妄語たるを免れじ、法律の成文に違はざるものは皆良民たる

こと疑なしと雖ども、名づけて上流人士といふ者は此良民の上に位すとの謂なり、何を以てか良民の上に位するを得べき、世人は曰ふ、財産ある者又は智識ある者又は官位ある者皆な上流なりと、而して行狀心術は算そへられざるか。

財産ありて詐欺を働く者あり、智識ありて竊盜を作す者あり、官位ありて賄賂を取る者あり、去れど其行爲の未だ法律に觸れざる限りは是れ皆な上流の人士たるを失はざるか、曰く然り、人誰れか上流人士たるを願はざらんや、若し斯くて上流人士たるを得るものとせば、社會なるものは是れ法律の範圍内に於ける悪事の競争場なり、所謂る社會の腐敗といふ語は毫も意味なきの形容詞たるに歸せん。

去れど、世人は意味ありげに此の語を口にす、而かも嘆息の聲は之れに伴へり、法律の範圍内に於ける悪事の競争は社會の現状にして而かも此の競争の甚だしきを名づけて腐敗といひて嘆息するか、此嘆息や恐らくは眞意に出づるにあらじ、嘆息しつゝ世人は夫の上流人士を歓迎するに汲々す、歓迎せらるゝ者は益々驕りて益々上流に溯る、謂らく、人の噂も七十五日のみ、地位を得れば則ち人皆な尊敬すと、是

に於てか社会の腐敗の語益々意味なきに至る。

社会腐敗といふの語にして益々意味なきに至ると同時に、毀譽褒貶なるものも亦た一時の雑言と爲りて止むに至らざるを得ず、世人は曰ふ、言論の無勢力は今日より甚たしきものなしと、然り、言論は抑制せられて且つ輕蔑せらる、輿論は不在にして社会的制裁は休業なり、加之ならず、他の一面には名爵の授與を以て毀譽褒貶を抹殺するの大權力あり、社会の腐敗といふの語の意義をも併せて抹殺しつゝあり、社会の腐敗といふ語は世人常に之を口にしつゝ其意味の既に抹殺せらるゝを知らず、而かも此の抹殺や彼れ自ら之を幫助して自ら知らざるが如し、是れ豈今日の現状にあらずや、現に彼等は社会の腐敗を口にしつゝ、頻に此の腐敗の泉源を渴仰し、他人若し之を攻撃すれば則ち曰く、世の中は皆なモンナものなり致方なしと、此の言や實に腐敗を幫助す、貴族皆な然り官吏皆な然り富人紳士學者皆な然り、社会の腐敗といふる語は何の意味もなし。

然りと雖ども腐敗は竟に腐敗に終はるべきにもあらずして、機會一たび至り大刷新

を加ふるにあらば再び面目を改むることを得べし、而して機會や袖手して俟つべきにあらず、唯た識者の用意を要す

間行暴雨來。

江潤晚潮響。

沽酒入漁家。

老翁坐結網。



○年月かけて何頼みけん

「君か代の安けかりなば兼てより身は花守となりけんものを」吾輩は當世の治亂を知らずと雖とも花守となりて此世を送るもの少きを見ては轉た感慨の情に堪へざるものあり、鳥尾將軍の如きは、能く人をして此歌意を想はしむるの人なり、君か高潔なる心は他の群雀と粟を啄むの俗なるを厭ふて、屢ば世と相違ふの運動を爲さしめ、而して君か忠誠なる心は身に墨染の衣を纏ふて禪林に通るゝの決意を爲す能はずして、君が所謂中正の大義を唱へしむるに至る、頃る君が歌を讀む、曰く

哀れなり賤が軒はのなはずたれ

年月かけて何に頼みけん

白馬銀鞍長安の道には寒に叫ぶの人なきか、朱門玉閣洛陽の街には饑に泣くの子はなきか、新し橋の高堂空しく聳て何の爲す所ぞ、喧々囂々只だ人語の響を聞くのみ、嗚呼想へば二十一年の歲月かけて頼みし處は何事なりしぞ、君が一片の歌に激せられて多情に記す。

○社會禮習論

◎流行の狂思想

舊○慣○習○を○『○自○由○』○の○敵○と○爲○し○繁○文○縟○禮○を○『○實○利○』○の○賊○と○な○す○所○の○思○想○は○、○社○會○激○變○の○時○代○に○在○り○て○一○た○び○は○流○行○す○る○こ○と○必○然○な○る○べ○し○、○激○變○時○代○の○思○想○は○改○革○を○好○む○の○點○に○於○て○多○少○の○眞○理○を○含○む○や○疑○な○し○と○雖○ど○も○、○改○革○に○偏○す○る○の○點○に○於○て○は○一○の○狂○思○想○を○免○れ○ず○、○夫○の○百○數○十○年○前○に○一○た○び○歐○洲○大○陸○を○振○搖○し○た○る○所○の○流○行○思○想○は○則○ち○然○り○、○マ○ユ○ネ○ー○ヴ○の○究○措○大○ル○ー○ソ○ー○な○る○人○が○其○境○遇○に○促○さ○れ○て○一○狂○思○想○の○代○表○者○と○爲○り○『○自○然○的○狀○態○』○を○取○り○て○人○類○生○存○の○眞○理○な○り○と○主○張○せ○し○は○世○に○隠○れ○な○き○所○に○あ○ら○ず○や○、○自○然○的○狀○態○は○眞○理○な○る○乎○、○社○交○團○結○は○眞○理○に○あ○ら○ず○、○學○術○技○藝○は○眞○理○に○あ○ら○ず○、○人○類○が○自○由○を○失○ひ○其○の○實○利○を○喪○ふ○は○皆○な○此○の○非○眞○理○に○自○ら○執○着○す○る○の○致○す○所○な○り○。○若○し○自○由○及○實○利○の○眞○理○を○全○く○せ○ん○と○欲○せ○ば○、○山○林○に○獨○棲○せよ、○獸○皮○を○衣○と○せよ、○木○實○を○食○と○せよ、○而○し○て○泉○流○を○飲○料○と○せよ、○王○に○仕○へ○法○に○従○ふ○こ○と○は○勿○論○、○公○衆○の○習○慣○、○社○會○の○禮○文○斯○る○類○の○も○の○は○皆○な○人○類○自○然○的○の○性○に○違○ふ○も○の○な○り○。

夫の狂思想は元と幾分の眞理を含むに相違なきも、若し顧慮せず之を敷衍するときは自ら此の奇怪なる結果に到着せざるを得ず、尺度を折り衡量を碎けば民に争ひ無けん、老莊の説も亦た然り。

◎狂思想の祖述

前世界に於ける此の狂思想は今や何人も其の狂思想たることを認む、然れども此狂思想に淵源する所の學説をば世人之を奉信して怪しまざるは何ぞや、百年前に於て歐洲に起りし政治及經濟の説は實に此の狂思想の一部を祖述せし者なり、政治に付きては「自由論」、經濟に付きては「實利論」、二者相ひ携へて百年前の歐洲を振搖し、其餘響は引きて五六十年の後にまで及びたり、否な今日に至りても猶ほ各國社會の一偶に奉信せられて其の「眞理」たるの姿容を保つなり。然りと雖ども反動は既に起れり、其の狂思想の祖述者たる陳腐の政治經濟論者が、其見て保守思想と爲す所の者は其の抱持する大眞理を發揮し、彼れ輕躁者流の遺棄して顧みざる歴史的事實を取りて之を活用の途に置きたり、歐洲社會の近時は實に史蹟論派の時代なりと雖

ども、百年前又は數十年前に於て或は印度洋より或は太西洋より他州に傳はりたる政治及經濟の説は、史蹟論派にあらずして寧ろ彼の狂思想の祖述者なり。

◎破壊的修飾家

吾が社會も亦た實に此の古渡りの政治經濟説を賞翫したることは争ふべからず、自由の名を以て一切の舊慣俚習を輕蔑するの極、實利の名を以て繁文褥禮を排擯するの極、遂に一千餘年來扶植せし所の社會禮習をも破壊して而して其の亂階と爲るを知らざりき。

例へば歲末年始の賀禮は社會が既往に鑑戒を取りて將來に希望を抱くの一新節にあらずや、殖民地の如きは吾輩の知らざる所なり、苟も二千餘年の高齡を有する老成社會に在りては、史上種々の關係よりして必らず習熟せる儀禮なくんはあらず、若し時間及空間の無限無極なる點に付て達觀せば、季節の變換も邦土の差異も固より問ふ所にあらずして、社會禮習の如きは最も拘はるべきにあらざるなり、然りと雖ども、今の傲然此の禮習を破る人士は斯る達觀者にあらざるのみならず、或る點に

於ては非常の修飾たるもの最も多し、而して其の生平に於て「自由」を擲ち「實利」を棄つることは、却つて他の社會禮習に服従するものよりも甚だし。是に因りて之を觀れば、夫の古渡りの政治經濟説を取次ぎたる者は稍や舊慣俚俗の陋と繁文褥禮の弊とに激したることあるべきも、其説に雷同して社會の禮習を破る者は固より唯一時流行の狂思想に感染せしに過ぎず。

◎破壊論の情力

狂思想より來る所の自由及實利は是れ寧ろ野蠻時代の遺物なり、今世に於ける人類社會に容れざる所の事物なり、若し斯る自由及實利を取りて眞理なりと云は、是れ今日の社交團結を非理なりと言ふと同じ、若し強て之を實行に得んと欲せば、社會其物を破壊し盡すに非れは不可なり。然りと雖ども、世人は社交團結を非理なりと言はず、又た社會其物を破壊しても之を實行に得んとは言はざるなり、唯た彼等は二十年前の流行思想に漂され、其隋力にて今日の狀態に立ち至れるのみ、思ふに彼等自身も亦た社會の禮習を輕蔑する其の言行に付きて證明を爲し得ざるべし。

◎士君子と禮習

若し眞に斯る自由を保有するが爲に舊慣俚習の羈束を脱せんと言は、宜しく「旅行欠禮」等の廣告をも卑屈とせざるべからず、若し眞に斯る實利を獲取せざるが爲めに繁文褥禮の弊を排せんと言は、「恭賀新年」等の郵書をも冗贅とせざるべからず、而して彼等は皆な之を能くせざるなり。言語は思想を通するのみ、然れども舊慣に逆らひて世に尊敬を欠くべからず、舉動は意志を行ふのみ、然れども俚習に反して公に醜猥を示すべからず。衣は元と寒を防ぐのみ、然れども紳士は甘んじて印半天を着ることを得るか、食は元と飢を療するのみ、然れども貴人は能く井飯屋に入ることを得るか。如何に自由を愛し如何に實利を尙ぶも、世の士君子は社會の禮習を侮るべからず、否な、社會の禮習を破れば眞正の自由實利を得べからざるなり。

◎社會解散の端

人類は自由一偏の動物にあらず又た實利一偏の動物にもあらず、時としては羈械を甘んじ又た時としては算盤を棄てざるべからざるなり、而して自由及實利は自ら其

中に在り、所謂る社會禮習に服従することは則ち人類普通の義務に外ならず。舊慣俚習は時として其の害あるを免れず、繁文褥禮は最も其弊あるを見る、然れども害あり弊ありとの點を以て一切之を排除することは非なり、夫の自由又は實利の一端を尊崇する陳腐論派は吾輩今日に在りて之を追究するの必要なし。獨り此論派の流行餘勢に驅られて知らず識らずに社會の禮習を侮る所の士君子に至りては、社會其物に對する義務を怠る者として攻撃せらるゝこと當然なり、吾輩は社會禮習を以て國民的一致に必要なものと爲し、又た從て之を國民的特立の一要素と爲すなり、今や社會の上流に在る士君子等が往々にして此の禮習を侮ることは是れ社會其の物を解散するの一端緒にあらざるや。

◎上流人士の罪

仄かに聞く我が 皇宮の中に於ては賀節の典禮頗る莊嚴にして長くも 天皇 皇后の兩陛下には歳首三日の間早朝より賜謁の場所に臨御あらせられ、以て百官有司の參賀を受けさせ給ふこと未だ嘗て廢せられずと、宮廷に於て禮習を重んじさせ給ふ

こと其れ斯の如し。然るに所謂る百官有司又は有位有爵の人々に至りては年末休暇の日より各々出遊を爲し、或は病氣に托して賀禮の煩を避けんことを企て、現に諸新聞紙に廣告をなすもの其の幾何なるを知らず、最も目立つ所の者は夫の儀式内部に勢力を占むる華族の輩が此流行に雷同して賀禮を廢する是れなり。夫れ皇室は國家の首位たると同時に又た社會の首位に在り、故に社會の禮習も亦た皇室を以て其の中心となし、皇室の周圍に近接する華族及百官を以て其の師表となすものなり、今や百官華族の輩は往々皇室に對して參賀の儀を廢し、又た社會公衆に對して禮習を守るの義務を怠ること斯の如し。思ふに社會の禮習は夫の法律の如く其の制裁あるに非ず、社會の禮習を守ると否とは獨り各自の心に任し之を牽束するものは唯社會の制裁に過ぎざるなり、社會制裁の衰ふるや一朝一夕に非ず、法律の外に思ふべきものなしとするの徒に在りては、又た之を如何ともする能はざるか、嘆すべきに至りに非ずや。

妖童含笑舌先吐

好婿欲言唇漸開



◎眼中唯た法律

大凡そ社會の腐敗するや、常に上流社會之か原因を作るに出づ、皇室の如き庶民(中等以下)の如きは常に社會禮習の保護者と爲るに怠らすと雖ども、夫の社會に實權を有する上流社會は往々進みて之を破壊することを勉むるに似たり、現に新年賀禮の一點に付ても右に述べたる如き實例あるにあらずや。腐敗の極に達する彼等は法律の制裁より外に憚るべきものなし、而して、皇室に對する義務と公衆に對する義務とは法律以外の義務たるを謂ひ、敢て之を怠りて顧みざるに至るか、此心術を以て社會に立つときは至らざるなけん、吾輩は獨り禮習の爲めに之を恐るゝのみに非ず、人類は既に自由一偏の動物にあらず又た實利一偏の動物にも非らず、之と同時に人類は法律一偏の動物にあらざること勿論なり、若し法律に違はざるを以て善人となさば、監獄墜囚の徒を除くの外、天下悉く善人なりと云ふを得べきか。吾輩は夫の上流社會の人々が近來益々年賀の禮を侮るを見て深く感ずるところあり、社會の禮習に服従せしむるは強制を用ゆべからず、而して強制を用ひざれば服従せし

むる能はざるに似たり、何となれば彼等は法律の外に憚るものなければなり。

◎禮は簡易なれ

然りと雖ども一策あり用ふべし、禮習をして簡易ならしむること、是れ其の一策なり、松飾に國旗を懸へす如きは是れ簡易なり、數の子に屠蘇飲む如きは是れ簡易なり、羽織に袴を穿つは是れ簡易なり、親戚故舊の門に名刺を通ずる是れ簡易なり、斯る簡易の禮習は貧富を論ぜずして之を行ふを得ん。若し夫れ大禮服を着するは勿論のこと通常衣服と雖ども、慣れざる者は之を着ることを欲せず、富まざるものは之を備ふることを得ず、加之ならず又各々之に應ずるの儀式あり、斯の如き治定は元と莊嚴を裝ふに出てたりとは雖ども、若し行はれれば則ち所謂る莊嚴も亦虚飾たるに過ぎず。禮は其れ奢ならんよりは寧ろ儉なれ、儉ならざれば以て貧富に通ずべからず、貧富に通せざれば以つて禮習の實を擧ぐべからず、實を擧ぐる能はざるの禮習を設くるは是れ禮習を廢するに同じ。今の儀式を司る者は果して禮習の何物たるを知るや否や、若し禮習の社會に必要たる所以を知らば勉めて其の虚を避け其實を

擧ぐるに心を用ひざるべからざるなり。

吾輩は今日に於て法律の缺欠を憂へず禮習の衰頹を憂ふるものなり、禮習既に衰頹し盡く、法律ありと雖ども將た何程の効あらん。貴賤上下の軋轢、隣保郷團の破裂、黨派の争鬭、並に議院の解散に至るまで、若し深く其の原因を探らば、法律の妄に増進して禮習の益々消却すること、是れ其の一大原因たるを知るに難からじ、是れ猶ほ自由か、是れ猶ほ實利か。

風乾古木三聲急

月白寒流千嶺低



○奇の説

百八十四

世に一流の人あり余を目して不平家となし奇癖家となす、余は決して不平に非ず又決して奇癖を好むものに非ず、不平とは世の中を不快に思ひ、奇癖とは常情に背きて異を立るを云ふなり、然らば我皇國の事物を擧げて之を不快に思ひ其風俗、習慣、道德までをも、悉く破壊して一向西洋に倣はんと欲するものこそ、大不平家、大奇癖家と云ふべけれ、と濟し切て居る、是れ鳥尾子得庵の得庵たる所以にして、而して人の子を目して不平、奇癖家となす所以なり、子を音羽の邸に訪ひしに先づ其門に入て路の頗る迂迴したる蝶螺の貝の底に入るが如きを感じし、伊豆山の別邸、亦た更らに底なり、斯の如く其底に停住して世塵を脱するかと思へば、忽然中國近畿に遊びて黨員を募集すと云ふ、亦た奇ならずや、と同く奇人の席を亂し難き某子爵の奇説なり、人、人を奇とすれば、人、人を奇とす。人、人を奇ならずとせば、人、人を奇ならずとなす、是れ當狀なり、世に之を奇妙なりといへども、是れも亦奇ならず。

百數の大宮人はいさまあれや

櫻がさして今日もくらしつ

○三條公西遷始末(二節)

◎七卿、妙法院に入る

公の鷹司第に入るや、關白參内の後にして、會々柳原中納言至る、乃ち懇狀を具して中納言に托し、また松平淡州參内の途を要し、手翰もて之を招き、其居間關説して、情事を通せられんことを託せり、而して何の報なし、關白も亦退朝せざるを以て、朝廷の事都て知る能はざりし、親兵并に長藩士は關白を迎へ朝旨の在る所を聞かんと欲し、將さに禁内に入らんとせしが、薩兵銃に擬して之を拒み、抗論百端竟に騒擾を致せり、於是公等哀懇の路殆ど絶ちたり、而して長藩士皆な憤りて曰く三條卿忠純正議、天下の知る所なり、而して今讒構に陥らる、如何んぞ公の爲めに之

百八十五

が機牙を破り、而して其大節を耀かざらんや、と山田、中村、村田、來嶋、桂、久坂、佐々木、寺嶋の諸人會議を開く、議論沸騰、統一する所なく、殺氣凜然事將さに起らんとするの勢あり、公等深く之を憂ひ、謂て曰く、闕下咫尺、固に憚りなしとせず、請ふ洛東に退き、徐ろに後圖をなさん、と衆皆之れを諾す、於是一人進んで薩兵に向ひて曰く、我士衆洛東に退き、朝命を待つことに決せり、而るに貴方備を立て砲準を前に取らる、ただ虞すべきなり、と薩兵乃ち砲準を轉せり、訛言あり三條卿親兵を集て亂を作んと、清水谷宰相に勅して之を問はしむ、公在らず、長藩已に鷹司第の後門并に境町門を押し開き、第一陣を毛利讃州、第二陣を吉川監物、第三陣を公等七卿、親兵之を護す、第四陣を長藩の諸士となし洛東妙法院に向ふ。途中日暮る、三條繩手より提燈數十張を燭し、其妙法院（大佛）に着するや。公等七卿は長藩士と同じく本堂に陣し、直ちに部署を定む、吉川氏の兵は北門を守り、長藩の兵は中門を守り、毛利讃州の兵は十津川黨と俱に西門を守る、兵甲甚だ壯に、意氣奮揚、而るに天冷かに雲暗く且つ小雨あり、處々篝火を焚き、或は櫓を倒して

酒を酌む、情景ただ慘淡たり。

◎議西下に決す

是夜會議を開きしに、長藩士某進んで曰く、讒構已に深し、叛國して後舉を圖るに若かず、或は曰く苟も勤王の正義を貫かんと欲せば、京都を去るべからず、と一人あり之を駁して曰く我七卿は痛く姦黨の爲めに思まる、もし京都に還らば必らず姉小路卿の轍を踏まん、宜しく退いて長州に據り而して素望を遂ぐべし、と公等は説を賛し、議遂に決す、於是益田彈正書を裁し鷹司氏に呈せり、其畧に曰く、臣等已に堺町門衛を免せらる、故に毛利讃州以下叛國、専ら海防を修め、殊に聖旨を遵奉し、國力を盡して攘夷に従事すべし、已にして三條卿夙に名望を負へり、願くば卿の職を復し、委するに其先鋒の任を以てせられんことを、と而して公等已に西下の議に決せし故、公親しく親兵を召し、慰諭して飯らしむ、親兵皆な別を惜み、切に隨從を請ふ、公曰く我れ已に勅勘の身となり、而して尙ほ禁衛の親兵を従かはし、之れ朝威を憚らず、且つ辭なきものなり、と敢て之を可とせず、親兵等於是退散、惟だ

宮部増實、土方久元、眞木保臣、水野丹後、淵上郁太郎等、強て隨從を請へり其妙
法院を發せしは、即ち十九日の曉にして、夜來の雨蕭々草木爲めに黯澹たり、公以
下六卿皆な簑笠を着け草鞋を穿ち、泥路間關、西に向て歩行す、落葉誰れか憐まん、
此状態を見る隨從の志士は、皆な涙を流し、悲憤に堪へず、以爲らく如何ぞ闕下に
號泣し、忠邪淑慝の迹を辯せざらんやと、是日芥川驛に宿す、二十一日西宮を経て
兵庫に至る、公以下與に楠公墓を拜し、夜に入り船に上る。

久坂通武七騎落の謠詞あり曰く

世は刈菰と亂れつゝ。赤根さす日もいと暗く。蟬の小川に霧たちて。へたての雲
となりけり。うらいたましや玉刻春。大内に朝暮殿居せし。實美朝臣に季朝卿。
壬生生澤四條東久世。其他錦小路どの。今浮草の定めなき。旅にしあれば駒さへ
も。すゝみかねては嘶きつ。降りしく雨の絶間なく。なみだに袖のぬれはてし。
これより海山あさぢかはら。露霜わきてあしかちる。灘波のうらにたくしほの。
からきうき世はものかはと。ゆかんとすれば東やま。峯の秋風身にしみて。朝な

夕なに聞きなれし。妙法院の鐘の音も。なんと今宵はあはれなる。いつしかくら
き雲霧の。はらい盡して百敷の。都の月をしめ給ふらむ。

◎檄を阿侯に授けて勤王の志士を募る

蓋し公久保の際と雖ども、興復の念少しくも心に忘れず、其の伏見を過ぐるや、宮
部増實に旨を授け、京攝に周旋して義舉の軍費を調せしめしが、増實事を卒へ、公
に楠公墓前に謁し、復命す、是夜之を船中に召し、阿州に遣し、書を阿侯に與へて
義舉の事を説き、且つ檄を授けて勤王の志士を募らしむ、檄に曰く、中興の大業、
且○其○緒○に○就○か○ん○と○す、而○し○て○奸○慝○隙○に○乗○じ、巧○み○に○唇○吻○を○弄○し、以○て○聖○旨○を○枉
ぐ、賊○臣○跋○扈、外○夷○猖○獗、眞○に○憤○激○に○堪○へ○ず、我○諸○同○志、於○是○西○國○に○赴○き、行○々○志
士○を○募○り、義○舉○を○謀○ら○ん○と○す、請○ふ○有○志○諸○君○先○づ○長○州○に○來○り、義○舉○に○戮○力○あ○ら○ん
と○ぞ、と二十二日兵庫を發し、次日備海に入り鞆港に着船、乃ち水野丹後、土方久
元、清岡半四郎公張を召し、檄を授けて藝備に遣はし、義舉に與みすべき旨を説か
しむ、蓋し此檄向きに増實に授くるものと同文なりといふ、(中略)而して増實復書

を齎らし、行々南海の志士を訪ひ、伊豫の今治より藝州に航し、九月十七日坊州三田尻に造りて復命す、水野土方等は、公が藝公に與ふる手翰並に檄文を携へて廣島に入り、藩吏寺尾生十郎に面し、公の手翰を交し、其返翰を得、藝藩の志士を歴説し、九月朔三田尻に造り次月復命せしか、藝侯は公等の爲め、頗る周旋せし所ありといふ。

◎長藩議して七卿の叛京を促さんとする

公等は後三日間海路を踏み防州三田尻に着船、會々逆風の爲めに阻せられ、是夜向島に泊し、翌日即ち二十七日三田尻に上る、此時正親町少將攘夷監察使として將に長州に入らんとし、而して此に駐る、公等乃ち其旅館を訪ひ、事を共にせんことを謀る、是より先き公等西下の報山口に達するや、長藩の議論、頗る區々に涉る、曰く七卿縱令姦臣の爲めに陥らるゝも、蓋し朝議を蒙り職を免せられ、私かに京師を脱せしなり、他日來り投せば、或は勅令追捕のことあらん、則ち義に仗りて之を拒まば、因て以て内訌を起すもまた未だ知るべからず、抑も此等の事なしとせんか、

身已に僻遠に流落し、依依前まずば、焉んぞ再び風雪際會の地を得べけんや、且つ朝號一發、碩輔の才を求むるあらば、七卿等固より出でざる可からず、然則夫の身安危を繫ぐ、其の進退、尤も慎まざるはあるべからず、因て七卿の爲めに謀るに、其の京師に歸り、恭順朝命を待つゝの愈れるに若かず、我藩其れ之を勸め、而して雲路を開き其冤を雪くに力を盡すべきなり、と於是公等を防州上の關に迎ひ、直ちに東歸を促すべしと其處分に及びしが、公等船、上の關を過ぎ已に三田尻に至る、長藩尙ほ人を派して進説せしむ、而して既に上陸の後にして、公等決心確として動かず、乃ち其事由を記して朝廷に奉告す、公等七卿も亦た連署して傳奏に送る、其略に曰く臣等曩者參朝を停めらる、義宜しく相慎重すべし、而して今敢て然らざる所以のものは、蓋し攘夷の勅旨を奉承するを以て、一意此事に任じ力めて積年の慮慮に副はんと欲し、西國に下れり、伏して願はくは德音を賜へよ、と是に至りて正親町少將を見る、少將時に馬關より九州に航せんとし、而して未だ發せず、

◎問罪の師小倉藩に向はんとす

小倉藩は馬關の對岸に在り、長藩攘夷の舉を觀望し、敢て之を輔けざりし、長藩の壯士之を怒り、建議して曰く、我藩勅旨を奉じ、掃攘の軍を擧ぐ、而して小倉藩兩端を持し、依倚觀望、此れ不忠なり不義なり宜しく問罪の師を興すべし、と少將曰く尙ほ朝旨を仰ぎ、之を決斷すべし、と直ちに其臣徳田隼人を京師に遣し其報を待てり、然るに朝議は去月十八日一變、公等の西走となるに至りし故、少將其報を得ること望を絶てり、而して公等及隨從の諸士、皆な少將西航せば鎮西諸藩の義氣を振作する便宜ありと信じ、切りに西航を勸む、少將即ち此月三日筑前黒崎に航し、未だ幾もならず、朝命皈京せしむ、乃ち還る、此時眞木保臣、福羽文三郎美辭、土方久元等三田尻に在り、議して曰く、正親町少將筑前に在り、宜しく先づ該藩を鼓舞せしむべし、と公其議を然りとす、久元等乃ち筑前に航せしが、少將已に發程の後たるを以て、竟に空しく廻る、而して少將は公等と善く交通せしは、朝威を憚からざる爲となり、と譴を蒙れり。

公等已に三田尻に寓せり、一日一封書京都より至る、曰く去る十八日善く自ら處せ

ざるを以て官位を禡はる、と公於是名を實と改む、其の他六卿も皆偏諱を省かる、然るに四方の志士、風を聞き、義を慕ふて來り集る、長藩爲めに一館を設けて之を待つ、匾して招賢閣と題し公を請ふて之を總理せしむ、而して眞木、水野、宮部、土方以下山田十郎、轟武兵衛、中村圓太郎等、皆一時の魁傑、俱に時勢を揣摩し、國事を痛論し、其の規畫する所一にして足らず、於是尊攘黨の輿望隱然移りて此に萃る、長藩殊に奇兵隊を派して公等七卿の警衛に充てしむ。(下略)

いかたしよ待て言さはん水上は

如何はかりふく峯のあらしぞ

